山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第184集

中巨摩郡白根町

横堀遺跡

中部横断自動車道白根インターチェンジ工事に伴う発掘調査報告書

2001. 3

山梨県教育委員会

日本道路公団

中巨摩郡白根町

横 堀 遺 跡

中部横断自動車道白根インターチェンジ工事に伴う発掘調査報告書

2001. 3

山梨県教育委員会

日 本 道 路 公 団

序

本報告書は、中部横断自動車道白根インターチェンジ工事に先だって行なわれた、横堀遺跡の調査成果です。

白根町は扇状地に立地しているため、かつて存在した遺跡もその多くは氾濫によって消滅してしまったものと考えられてきました。しかしながら、中部横断自動車道の建設に伴う一連の発掘調査によって、横堀遺跡のほか、平安時代の集落跡である百々遺跡の発掘調査も現在行なわれ、徐々にその様相が明らかになってきています。

さて、横堀遺跡は縄文時代晩期最終末～弥生時代中期初頭を主体とする遺跡です。「住居跡」のような人々の暮らしを直接的に示す痕跡は発見されませんでしたが、この時期を特徴づける‘条痕文土器’と呼ばれる土器のほか、黒曜石製の石器や、開墾などに使われたと考えられる打製石鍬などが見つかっています。現在山梨県内では該期の遺物がみられる場所は80箇所あまりにのぼりますが、いずれの遺跡からも遺構はほとんど確認されず土器片などが出土するにとどまっています。横堀遺跡も例外ではなく、木などが生えていた痕跡が確認されたのみでしたが土器片や石器などの分布状況から遺物が集中するブロックが存在することがわかっています。また土器や石器の分布傾向を細かく抽出した結果、土器が集中する箇所と黒曜石の剝片や打製石鍬が集中する箇所が重なることがわかっています。このような遺物の分布傾向から、土器などを使って実際に生活していた場所と、生活することによって出た不要なものを捨てたり、作業をしたりする場所とに分かれていた可能性があるということを示唆する結果がでています。

近年、白根町のほかにも、櫛形町・若草町といった同じく扇状地に立地する遺跡からも相次いで条痕文期の遺物が確認されています。今後、このような地域での発掘調査が進む事によって、かつての人々の暮らしが明らかになっていくものと思われます。

今回の発掘調査によって得られた知見から新たに見出される問題点も出てくる事と思われますが、本書が学習・研究の資料として活用される事を念じてやみません。なお、末筆になりましたが本調査にご協力を賜った関係各位、ならびに直接調査に関わった方々に厚くお礼申し上げます。

2001年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　　大塚 初重

例　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡白根町在家塚横堀1538番地外に所在する横堀遺跡の発掘調査報告書である。

2．本事業は、中部横断自動車道白根インターチェンジ工事に先だって1999年５月14日～７月26日にかけて実施したものである。

3．発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

4．発掘調査区のグリッド杭の設定については、㈲東雲測量に委託した。

5．発掘調査区の東・南壁面写真ならびに断面図作成に関しては、㈱フジテクノに委託した。

6．本書は第２章を主任文化財主事深沢容子が、第３章－第３節－２、同－第５節－３を主査文化財主事保坂康夫が、その他を文化財主事野代恵子が執筆した。なお、第４章については保坂の石器に関する所見原稿を組み込んでまとめている。編集については野代が行なった。

7．写真撮影については現場においては野代が行ない、遺物については小川忠博に委託した。

8．表紙のイラストは大塚敦子による。

9．発掘調査から報告書作成にあたっては、下記の方々からご教示・ご協力を頂いた。厚く感謝申し上げます。

河西 学（山梨文化財研究所）、矢野晴代（白根町教育委員会）、穂阪町子・山口一樹・河西美紀（白根町町長室広報係）、㈱青木建設・㈱井尻工業共同企業体、広瀬和広・小口妙子（甲西町教育委員会）、山口 明（長野市立博物館）、小川忠博（写真家）

9．報告書に関わる図面・出土遺物・写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管している。

凡　例

1．遺構・遺物の挿図の縮尺は原則として以下の通りである。

遺構：調査区全体図　1/200、遺物分布状況　1/120、遺物集中区　1/60、
土坑　1/20、微細図　1/20

遺物：土器　1/3、石器　1/1・1/2・1/3、土製品　1/3

2．遺構図においてのドット、スクリーントーンについては以下の通りである。

●…土器　　○…炭化物　　△…石器　　砂目スクリーントーン…炭化物の集中

目　次

序
例言・凡例

第１章　調査の実施と経過……2
　第１節　調査に至る経過……2
　第２節　調査組織……2

第２章　横堀遺跡とその周辺 ……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の成果……5
　第１節　調査の方法……5
　第２節　基本層序……6
　第３節　遺物の分布状況……9
　　1　土器の分布状況　　2　石器の分布状況　　3　遺物集中区
　第４節　発見された遺構……20
　　1　土坑
　第５節　発見された遺物……23
　　1　土器　　2　特殊遺物・縄文土器　　3　石器

第４章　総括……44

附　編　横堀遺跡から出土した炭化材の年代と樹種 ……47
　（1）　樹種同定
　（2）　C^{14}年代測定

写真図版

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図
第２図　中部横断自動車道予定地と試掘調査位置図
第３図　調査区内トレンチ位置図
第４図　調査区東壁・南壁セクション図
第５図　調査区内トレンチセクション図
第６図　土器出土点数
第７図　石器出土点数
第８図　土器接合状況
第９図　石器分布状況
第10図　遺物集中区位置図
第11図　土坑・微細図ポイント位置図
第12図　遺物集中区１
第13図　遺物集中区２
第14図　遺物集中区３
第15図　第１～５号土坑
第16図　微細図１～４
第17図　微細図５～７
第18図　出土土器（１）
第19図　出土土器（２）
第20図　出土土器（３）
第21図　出土土器（４）
第22図　出土土器（５）
第23図　出土土器（６）
第24図　出土土器（７）・特殊遺物
第25図　出土石器（１）
第26図　出土石器（２）
第27図　出土石器（３）
第28図　出土石器（４）
第29図　出土石器（５）
第30図　出土石器（６）
第31図　出土石器（７）
第32図　出土石器（８）
第33図　出土石器（９）
第34図　出土石器（10）

表目次

第１表　横堀遺跡出土土器一覧
第２表　横堀遺跡出土特殊遺物・縄文土器一覧

第１章　調査の実施と経過

第１節　調査に至る経過

平成11年４月14日　文化庁に発掘通知を提出する。
同　５月14日　発掘調査を開始する。
同　７月26日　発掘調査を終了する。
同　７月29日　甲府南警察署へ発見通知を提出する。

第２節　調査組織

〈発掘調査〉

調査主体	山梨県教育委員会	教育長　興石和雄
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター	所　長　大塚初重
		次　長　藤田　修
		次　長　田代　孝
調査担当	山梨県埋蔵文化財センター	主任文化財主事　深沢容子
		文化財主事　野代恵子

発掘調査従事者

作業員　石川茂子、石原恵、市川祥子、鰻池定一、大森智枝子、神沢正孝、北原和江、久保田明義、斎藤礼子、佐久間等、佐久間春江、沢登たつ江、鈴木政一、手塚盛明、手塚房子、時田わか、内藤春枝、中込ともゑ、中込なを美、名取清子、羽中田弘、望月いよ子

〈整理作業〉

調査主体	山梨県教育委員会	教育長　興石和雄
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター	所　長　大塚初重
		次　長　藤田　修
		次　長　田代　孝
調査担当	山梨県埋蔵文化財センター	主任文化財主事　深沢容子
		文化財主事　野代恵子

整理作業従事者

作業員　石原恵、大塚敦子、北原和江、佐々木富士子

第２章　横堀遺跡とその周辺

第１節　地理的環境

横堀遺跡は、中巨摩郡白根町横堀地内、標高328mの地点に所在する。

白根町は甲府盆地の西縁部に位置し、北は八田村・韮崎市、南は若草町・櫛形町に、東は釜無川を挟んで竜王町・昭和町に、西は芦安村にそれぞれ接しており、東西14km、南北3.6km、総面積39.25km²を測る。町の中央部には南北方向に国道52号線（駿信往還）が縦断している。町の西部は千頭星山（標高2138.5m)、甘利山（1671.5m）など巨摩山地の山々からなり、その後方に町名の由来でもある白根三山をはじめ南アルプスの高峰が連なる。東部は御勅使川扇状地からなる平野である。甲斐駒ケ岳から南東に連なる山脈中の唐松峠（標高1700m）付近にその源を発する御勅使川は、急峻な山間を北東に流れ、甲府盆地に出て日本屈指の巨大な扇状地を形成している。扇状地上は砂礫層の堆積が厚く、米作には適さない。そのため、かつては干ばつに強い桑が栽培され養蚕が行われていたが、現在はモモ、ブドウ、サクランボなどの果樹栽培が盛んである。

遺跡は、御勅使川扇状地の扇央部に位置する。‘横堀’という地名の由来については、一説にはこの一帯に御勅使川の旧河道があり、東西方向に浅い堀のような地形が見られこれが東隣の西野へと続くため、この名が付けられたとも言われる[註1]。この地表より3.5～4.0mのところにある黒色粘土層が遺構面である。上部には厚い礫層が発達しており、また遺物を包含する黒色粘土層の下部にも礫層がみられることから、本遺跡が営まれた縄文時代晩期最終末から弥生時代中期には、一時的に水域から分離され安定した土地が形成されたものと考えられる。

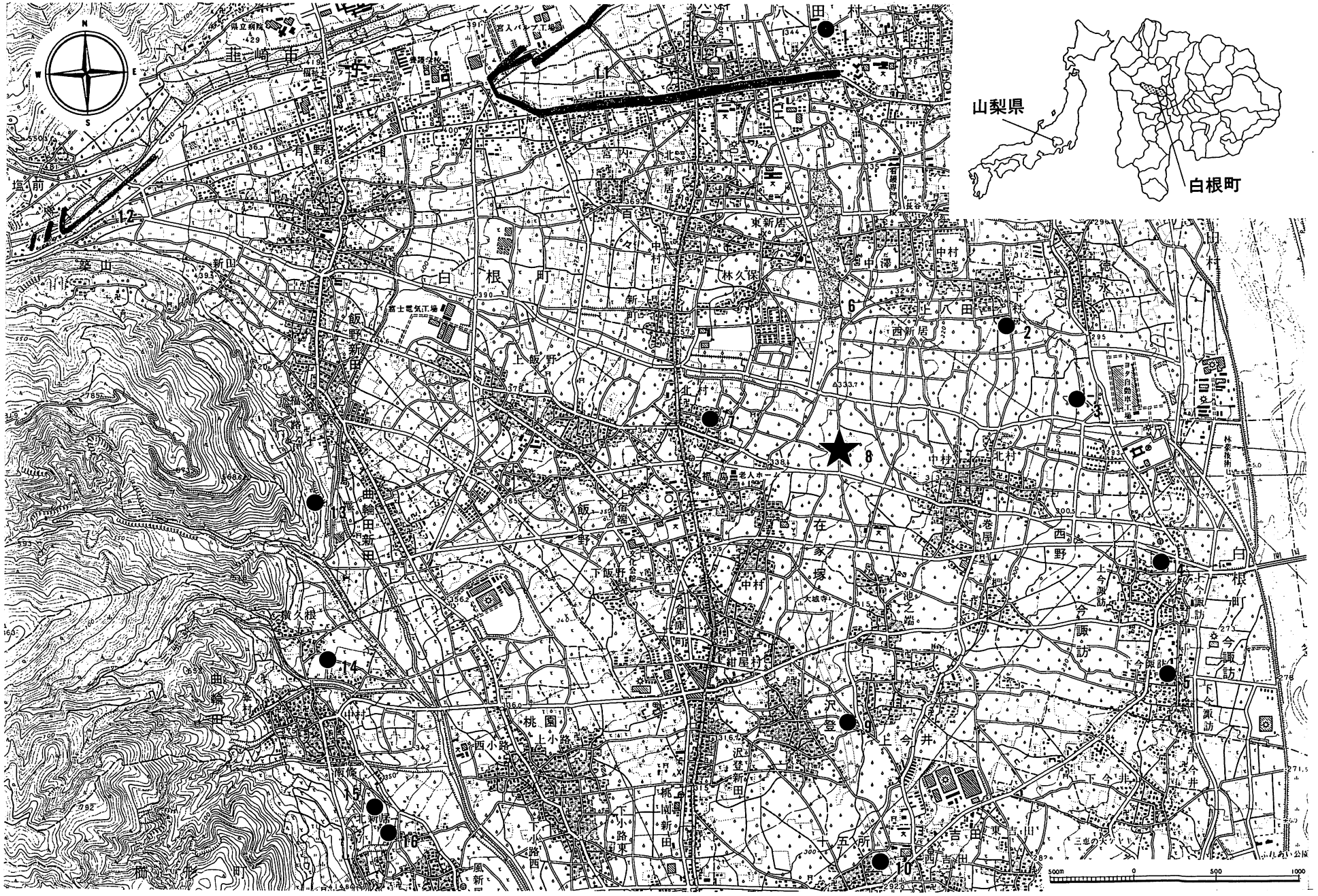
第２節　歴史的環境

横堀遺跡が所在する白根町は、扇状地上に立地しているため、かつては存在した遺跡もその多くは氾濫によって消滅してしまったものと考えられてきた。また、これまで遺跡の発掘調査が行なわれる機会もほとんどなく、町内で遺跡の分布はほんのわずかしか知られていなかった。以下に記した遺跡についても、百々遺跡以外については昭和47年に白根町教育委員会によって行なわれた分布調査に基づくものであり、本格的な発掘調査が行なわれたものではない。

縄文時代の遺跡では、扇状地西縁の山腹の段丘上、標高450m付近に飯平遺跡（13）がある。表採された土器によって中期から後期にかけての遺跡と考えられている。扇状地の末端部分には清水坂遺跡（3）があり、この北側、標高315m付近には上八田下村遺跡（2）がある。縄文・弥生・古墳時代の遺物がみられ、焼土や敷石なども確認されている。同じく扇状地扇端部の段丘上、諏訪神社境内付近には下今諏訪遺跡（5）があり、弥生時代後期の完形の壷などが出土している。古墳では、おつき穴古墳（4）・金山塚古墳（7）の２基が確認されているがいずれも横穴式石室をもつ後期の円墳である。この金山塚古墳は横堀遺跡（8）の西、およそ800mのところに所在しており、石室内部からは甲冑類が出土したと言われている。現在古墳の上には金山権現が祀られている。平安時代では大嵐善応寺裏山の経塚より経筒が発見されている。また、善応寺周辺では土師器や須恵器が採集されている。善応寺の南東には、南北朝時代に高師冬が上杉憲顕と戦って敗死した須沢城がある。

このほか白根町には、治水に関する多くの施設が残されている。八田村との２町村にまたがるものではあるが、御勅使川の河道変更と信玄堤に関わるとされる堤防である将棋頭（11）の調査が行なわれており（第一将棋頭)、現在残る石積みの堤防は近世以降、一部は明治期のものと考えられている。また、同じような施設としては駒場・有野地区に‘石積出’といわれる堤（12）が残されている。

これまで白根町内で確認されている遺跡は以上であるが、中部横断自動車道建設に伴う一連の発掘調査で、新たに複数の遺跡が確認されている。横堀遺跡のほか、平安時代の集落跡である百々遺跡の発掘調査が現在行なわれているが、250軒を上回る平安時代の竪穴住居跡や、中世の墓坑、牛馬の骨などが多く発見され、これまで遺跡は残されていないとされていた扇状地から、大規模な集落の実態が掘り起こされる事となった。このように御勅使川扇状地の厚い砂礫の下には、まだまだ多くの遺跡が埋もれているものと考えられる。今後発掘調査が進め



第１図　周辺遺跡分布図

ば、かつて扇状地上で暮らした人々の営みが徐々に明らかになっていくことであろう。

註1…中巨摩郡地名誌による。

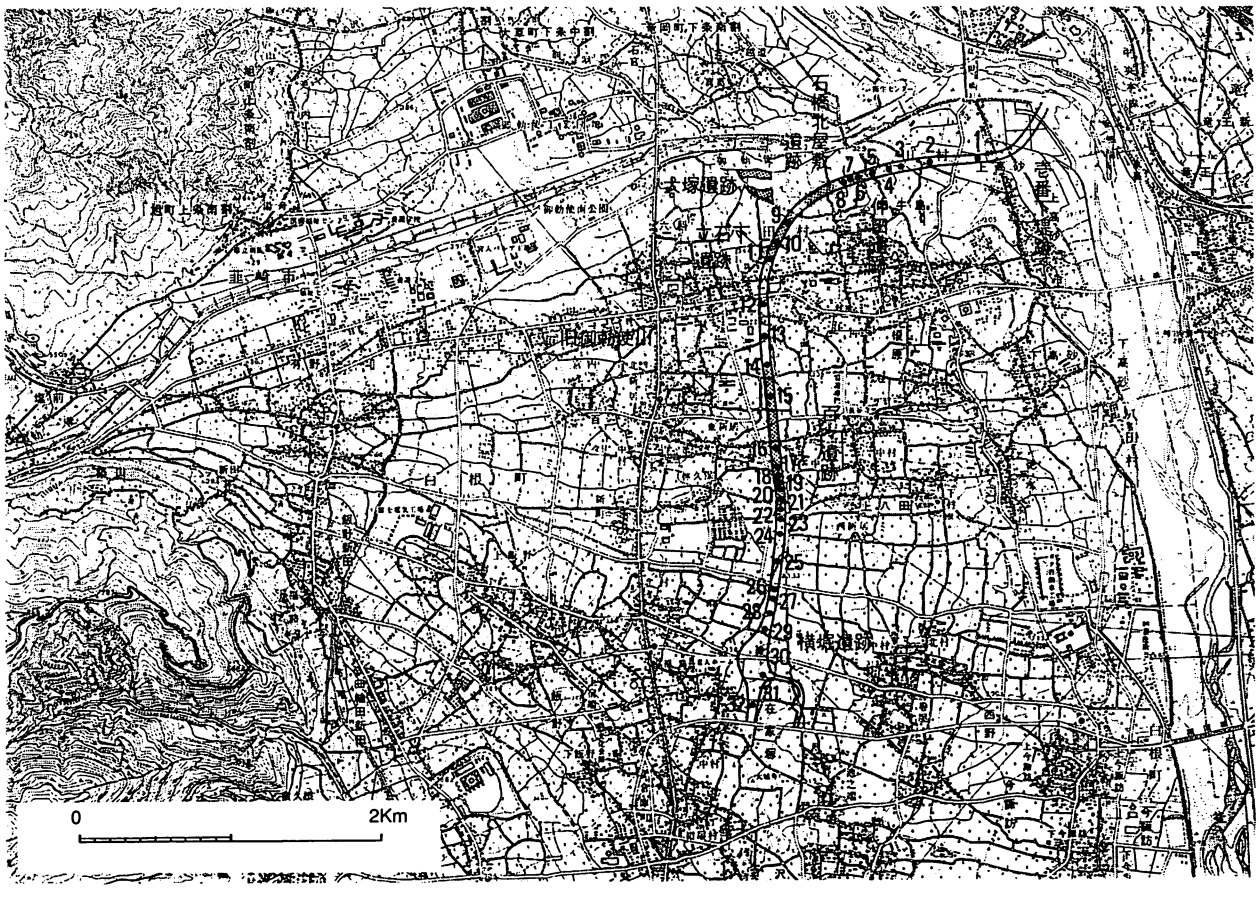
【白根町周辺遺跡一覧】（番号は第１図のNo.に対応）

1．立石下遺跡（八田村野牛島）　弥生時代前期・平安時代、2．上八田下村遺跡（白根町上八田）　縄文時代～古墳時代、3．清水坂遺跡（白根町西野）　縄文時代後期・弥生時代、4．おつき穴古墳（白根町上今諏訪）　古墳時代後期、5．下今諏訪遺跡（白根町下今諏訪）　弥生時代、6．百々遺跡（白根町百々）　平安時代、7．金山塚古墳（白根町在家塚）　古墳時代後期、**8．横堀遺跡（白根町在家塚）**　弥生時代前期～中期、9．七ッ打Ｃ遺跡（櫛形町沢登）　中世、10．十五所遺跡（櫛形町十五所）　弥生時代中期～古墳時代前期、11．将棋頭（八田村・白根町有野）　治水施設、12．石積出（白根町駒場・有野）　治水施設、13．飯平遺跡（白根町曲輪田新田）　縄文時代中期・後期、14．曲輪田遺跡（櫛形町曲輪田）　縄文時代中期・平安時代・中世、15．北峯Ａ遺跡（櫛形町曲輪田）　縄文時代中期・弥生時代、16．北新居遺跡（櫛形町曲輪田）　縄文時代・弥生時代

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

平成10年度に実施された試掘調査によってトレンチ30（第２図）より、縄文時代晩期最終末～弥生時代前期の土器が出土したことからこの付近に30m×30mの調査区を設定した。遺構面は現地表面から3.5～4.0m下であることから、壁面に45度の勾配を付けながら重機によって掘削を行なった。重機による掘削は黒褐色粘土層の直上で止め、以下手掘りにより遺構面を徐々に下げながら精査を行なうとともに合わせて遺物の取り上げ作業を行なった。調査区内には東西方向に西から０、１、２…、南北方向に北からＡ、Ｂ、Ｃ…というようにグリッドを設

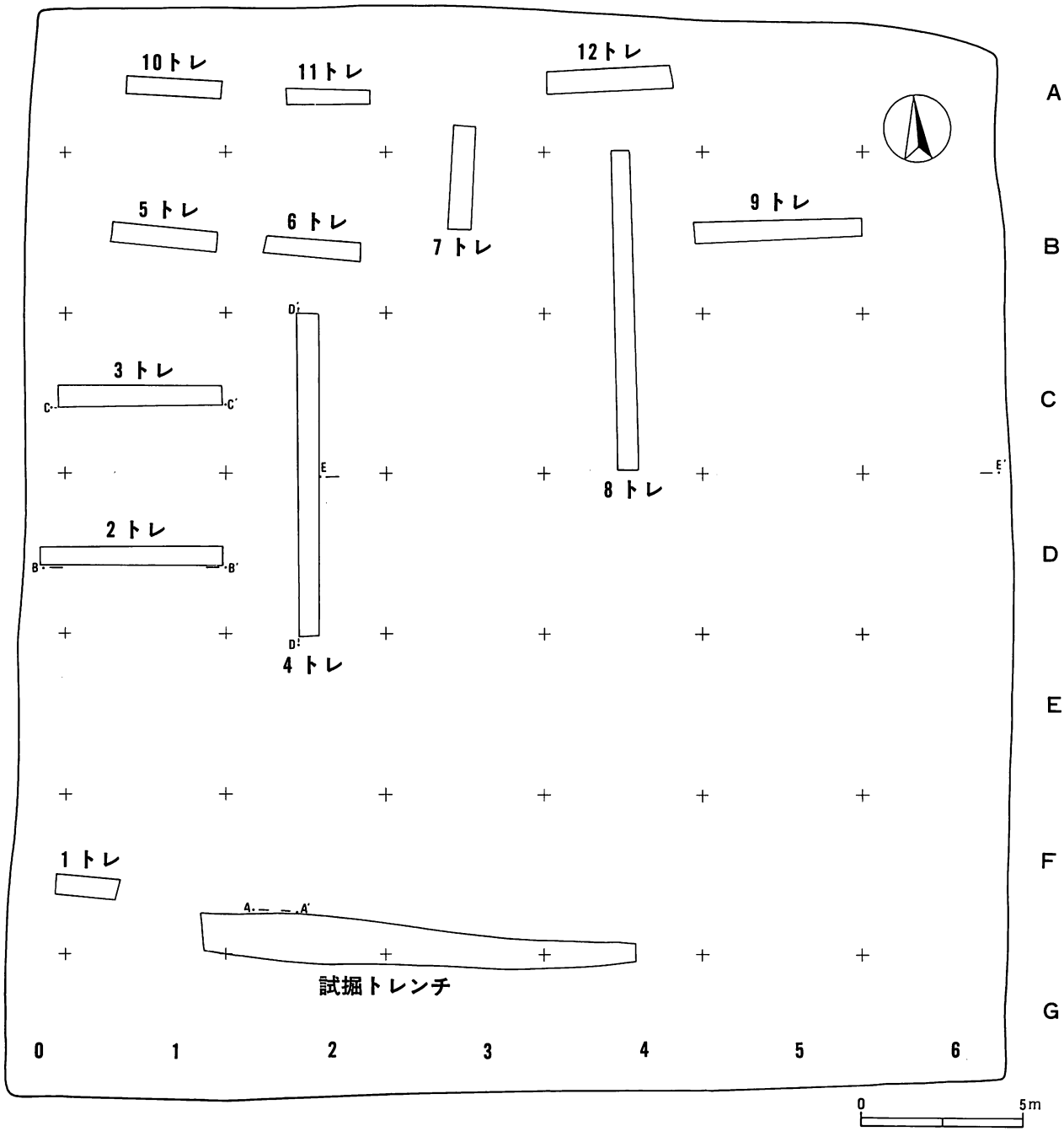


第２図　中部横断道予定地と試掘調査位置図（保坂1999より）

定した。座標値についてはD－5グリッドの北西杭でX＝－40020.0m、Y＝－2190.0mとなっている。土層の状況については調査区のほぼ中央を境にして北側はかなりシルトがかった土質で細かい砂礫も含んでおり、精査の時点でも遺物はほとんどみられなかったことから、調査区北半分については11本のトレンチを設定し土層と遺物の状況を確認した。その結果、砂礫を含む黒褐色シルト層が続き、また遺物の出土もみられなかった事から精査は南半分について重点的に行うこととした。

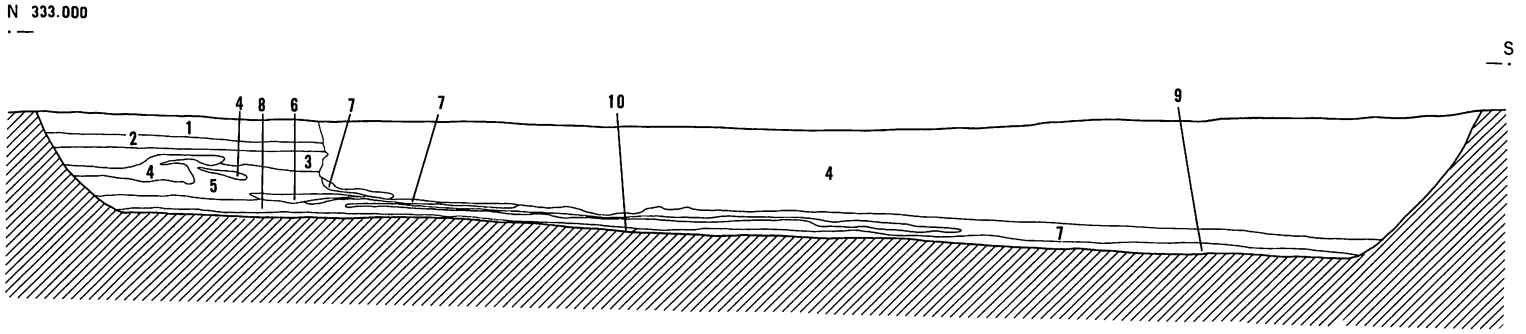
第2節　基本層序

平成10年度に行なわれた試掘調査によると、横堀遺跡の周辺では弥生時代前期・中期の遺物が上部に混入する黒褐色粘質土層が何箇所かで確認されている。それによるとこの周辺では土壌質の土層が表層に発達しており、24～27トレンチなどの表土がほとんど礫ばかりであるのと比べて対照的であるとされている。しかしながら今回

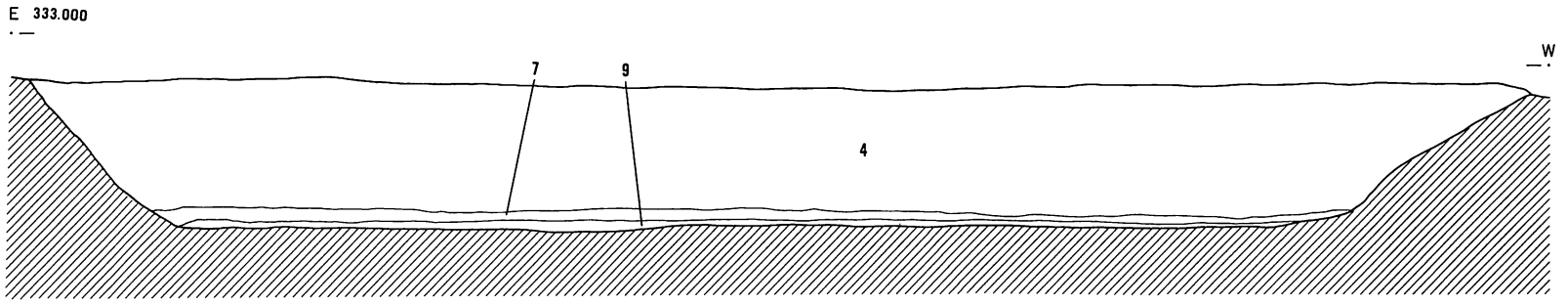


第3図　調査区内トレンチ位置図

〈東壁〉

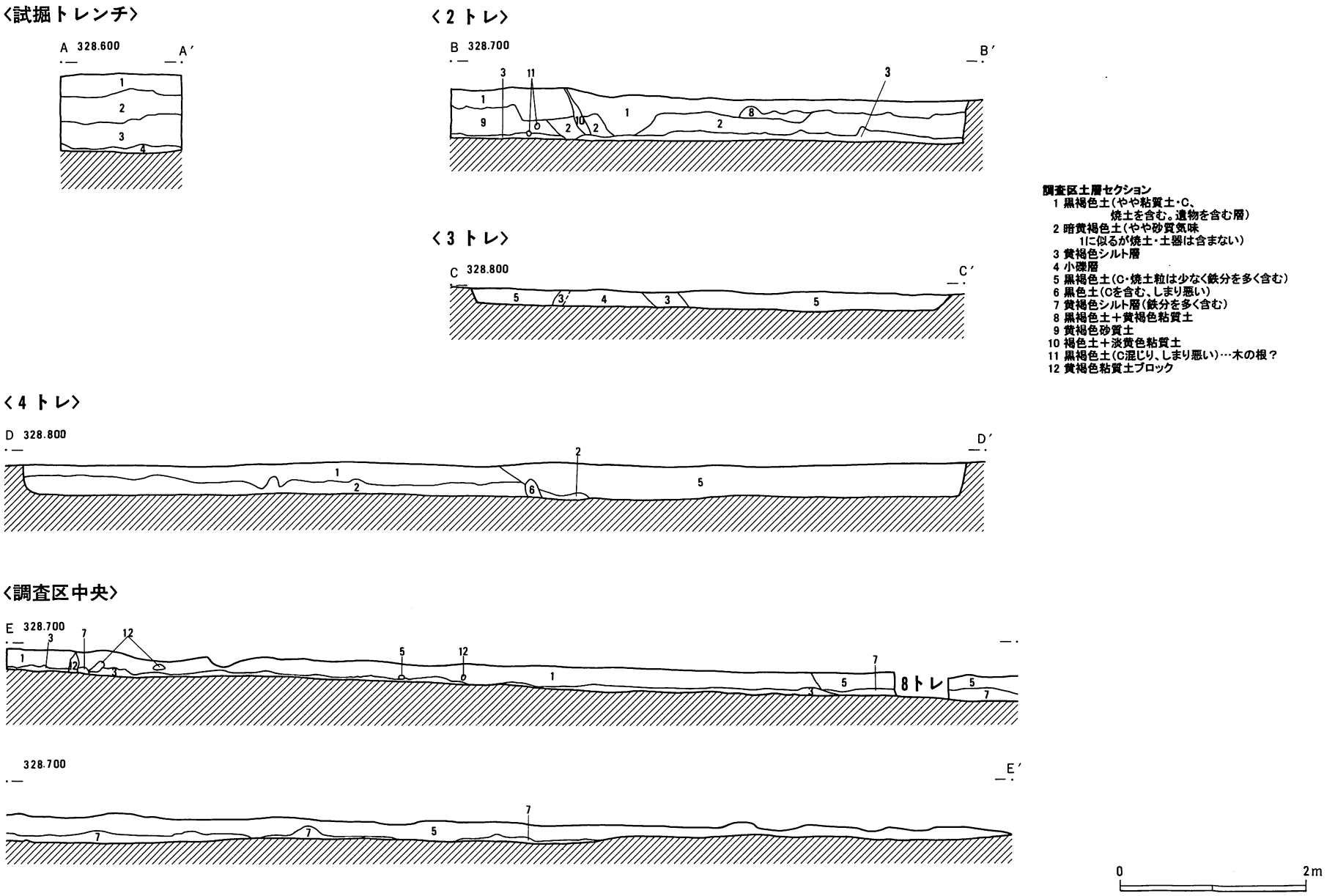


〈南壁〉



調査区東・南壁セクション
1 表土
2 黒褐色土(しまり悪い)
3 暗茶褐色土
4 砂礫
5 茶褐色砂質土
6 黒褐色砂質土
7 黄褐色シルト
8 黄褐色粘質土
9 黒褐色土(やや粘質土・C、焼土を含む。遺物を含む層)
10 黒褐色シルト層(鉄分を多く含む)

第4図　調査区東壁・南壁セクション図



調査区土層セクション
1 黒褐色土(やや粘質土・C、焼土を含む。遺物を含む層)
2 暗黄褐色土(やや砂質気味 1に似るが焼土・土器は含まない)
3 黄褐色シルト層
4 小礫層
5 黒褐色土(C・焼土粒は少なく鉄分を多く含む)
6 黒色土(Cを含む、しまり悪い)
7 黄褐色シルト層(鉄分を多く含む)
8 黒褐色土＋黄褐色粘質土
9 黄褐色砂質土
10 褐色土＋淡黄色粘質土
11 黒褐色土(C混じり、しまり悪い)…木の根？
12 黄褐色粘質土ブロック

第5図　調査区内トレンチセクション図

設定した調査区の東壁セクションの北寄りで、やや砂質気味の層を含むものの土壌質主体の土層が確認されたほかは南壁・西壁・北壁についても発達した礫層が２～３m程度の厚さで堆積している状況が観察された。これは、この‘横堀’という地名の由来である、東西方向に西野地区まで続く浅い堀の断面を表わしている可能性もある。その厚い礫層の下にはシルト層や粘質土層が細かい互層となって現われ、さらにその下の安定した黄褐色粘質土層の下に焼土粒や炭化物粒とともに遺物の混入する黒褐色粘質土層が堆積する。この黒褐色粘質土の厚さは平均して40cmほどで、以下これに似るが遺物を包含しないやや黄色味を帯びた砂質気味の黒褐色粘質土層、黄褐色シルト層と続き、それ以下は再び細かい礫層となる。また平面的に見るとＣ・Ｄグリッドラインあたりを境にして北側ではこの黒褐色粘質土層の粘性が弱まりシルトがかった鉄分を多く含む層がみられるようになり、同時に遺物の出土も見られなくなる。

第３節　遺物の分布状況

調査区南半分の遺物が分布している範囲について１mメッシュの網をかけ、それぞれのグリッドで出土している遺物の数をカウントし、遺物分布の密度について計上した。その結果遺物の集中する箇所が南北方向に帯状に連なってみられた（遺物集中帯）。これらの遺物出土状況について層位的に確認するために、その中でも特に遺物が集中する箇所について便宜上、遺物集中区という名称で３つのブロックを囲んだが、このブロックに何らかの意味を与える訳ではない。土器の接合状況を観察するとグリッドを跨いで出土した土器片同士が同一個体である状況が多く見られることから、これらの遺物分布はほぼ同時期的に形成されたものと考えられる。また遺物を包含する黒褐色粘質土層中からは十五所遺跡（櫛形町）で見られるような焼土集中箇所は全く認められず、確認できるのは粒子状の焼土が土層中に均一に拡散している状況であった。

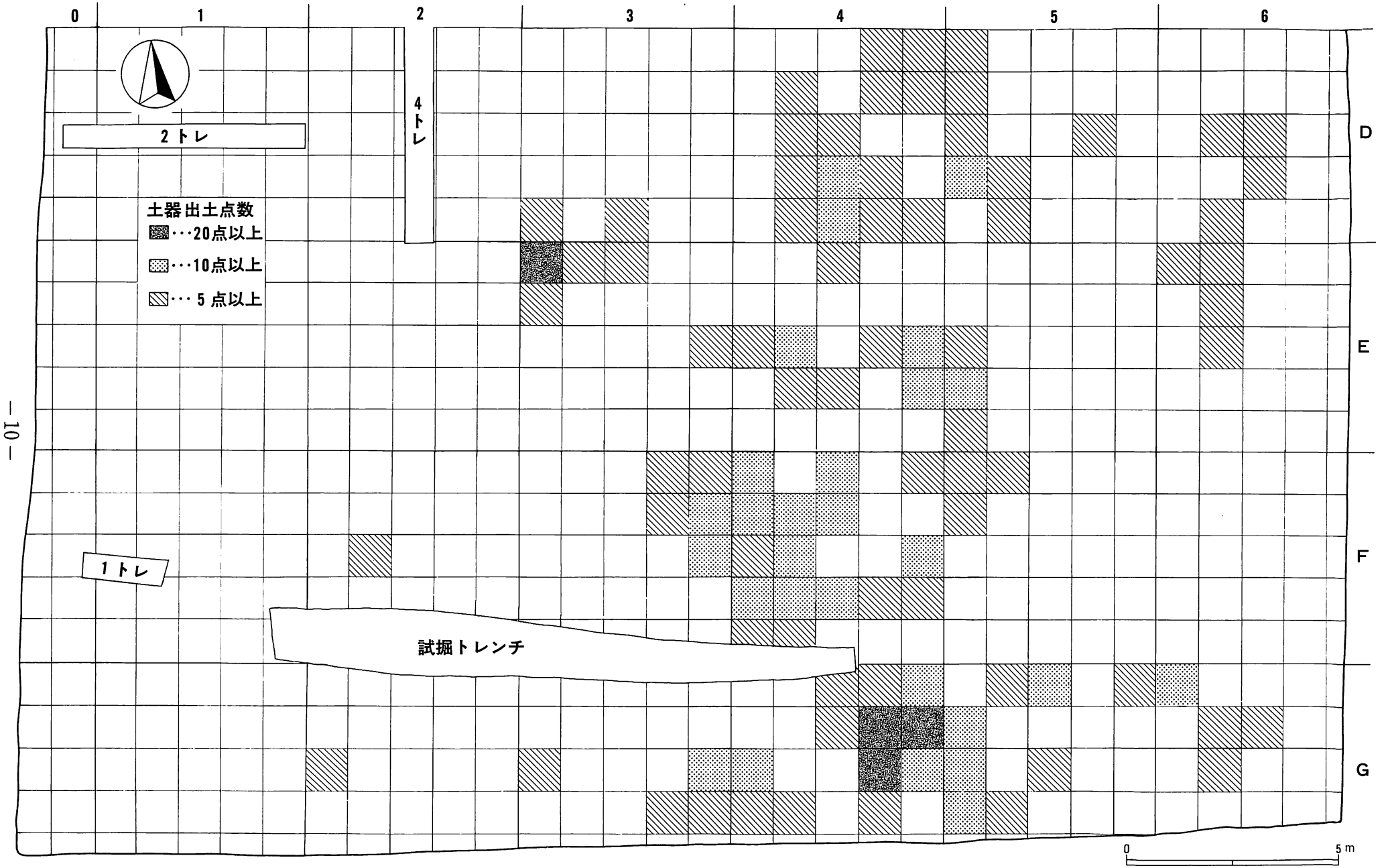
１　土器の分布状況

本遺跡から出土した土器群は、時期的には縄文時代晩期最終末～弥生時代前期の範囲で捉えられ、ごくわずかに弥生時代中期中葉のものを含む。器種としては深鉢、浅鉢、甕、壷などがある。出土した土器の状態については、マッチ箱程度の破片がほとんどで、完全な形に復原できるものは全く見られなかった。

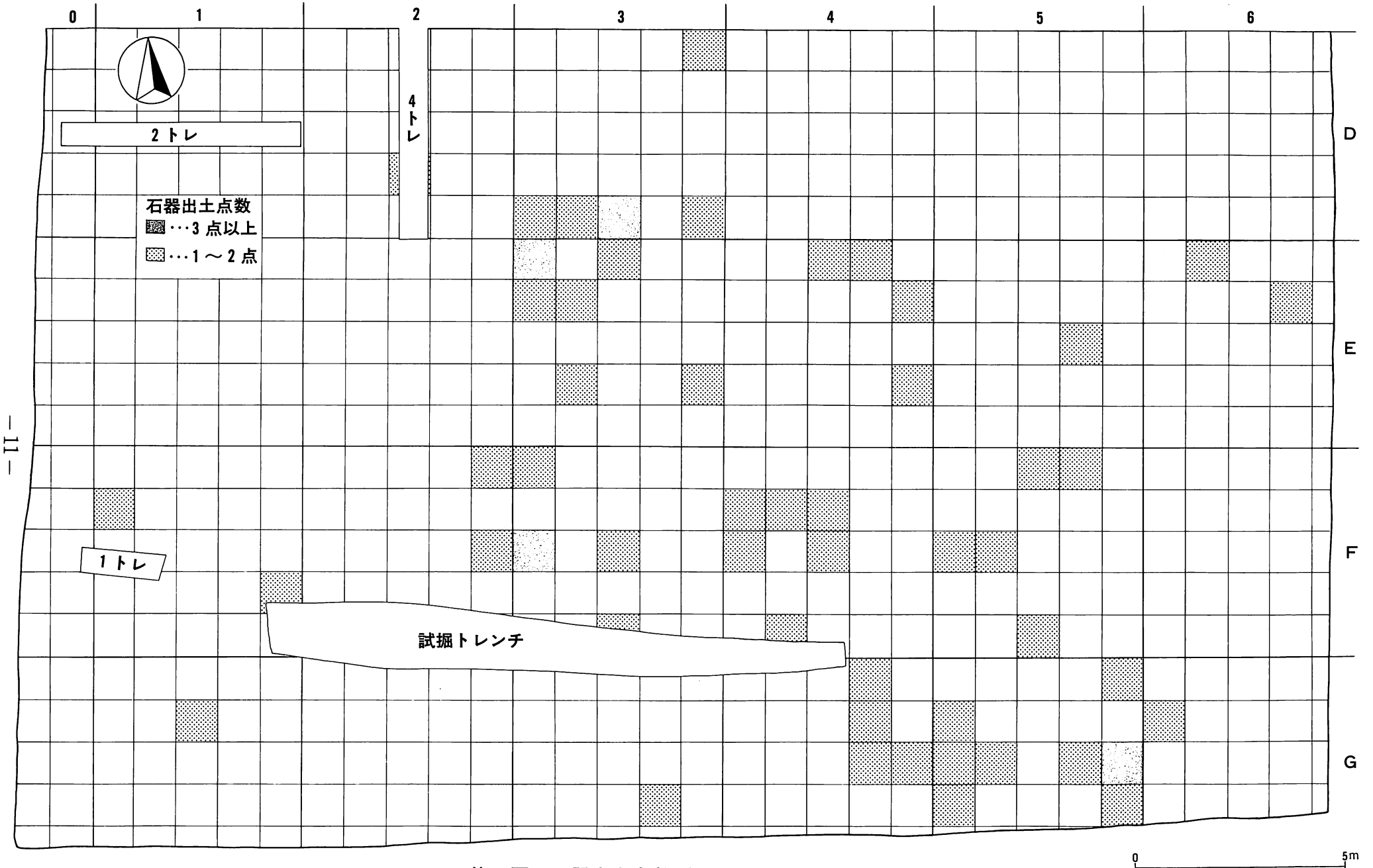
土器の分布が集中する場所は、４・５グリッドを中心として南北方向に連なる遺物集中帯で、この集中帯の中でも特に土器の集中する地点を3ヵ所ほど指摘できる（遺物集中区１～３）。器種ごと、あるいは破片の大きさによる偏りなどは全く見られない。またこれら出土した破片についての接合状況をみると、近くのもの同士の接合は勿論のこと、かなり遠くのもの同士にも接合関係が割合頻繁に見られる事がわかった。さらにこれら接合関係のある土器の出土位置を見ていくと、遺物集中帯とその東側で出土したものが主なものとなっている。この中には遺物集中区出土土器同士に接合関係が見られるものもあったが、これらの間には規則性などは見出す事ができなかった。土器の多くはその表面に摩滅が見られることから、地面の上に放置され風雨にさらされる状態にあったものと考えられ、その間に割れて移動した破片もあるものと考えられる。

２　石器の分布状況

石器の分布するメッシュはたいていの場合は単独で分布しているが、３つ以上のメッシュが互いに接して分布し、比較的高密度に石器が分布する部分が４ヵ所確認できる。そのうちの３カ所は土器の密集分布域（第６図）のメッシュと重なる。遺物集中区１（11点）、遺物集中区３（10点）、遺物集中区２－Ａ（４点）である。ここには、全石器57点中25点44％の石器が集中する。この土器集中域と重なる石器集中域に位置する石器の内容は、黒曜石製石器が多く、23点中16点70％がこの範囲に分布しているが、器種のかたよりは見られない。一方、粘板岩製および砂岩製等の石器は剝片３点、微細剝離のある剝片１点、礫器２点、敲石１点、打製石鍬破片１点、台石１点であり、全体の34点中９点24％でありその内訳としては、礫器は29％、打製石鍬は11％しか見られず、明らかに黒曜石製石器の集中度が高い。黒曜石製のものには破片や剝片も含まれており、土器集中域で使用ないし製

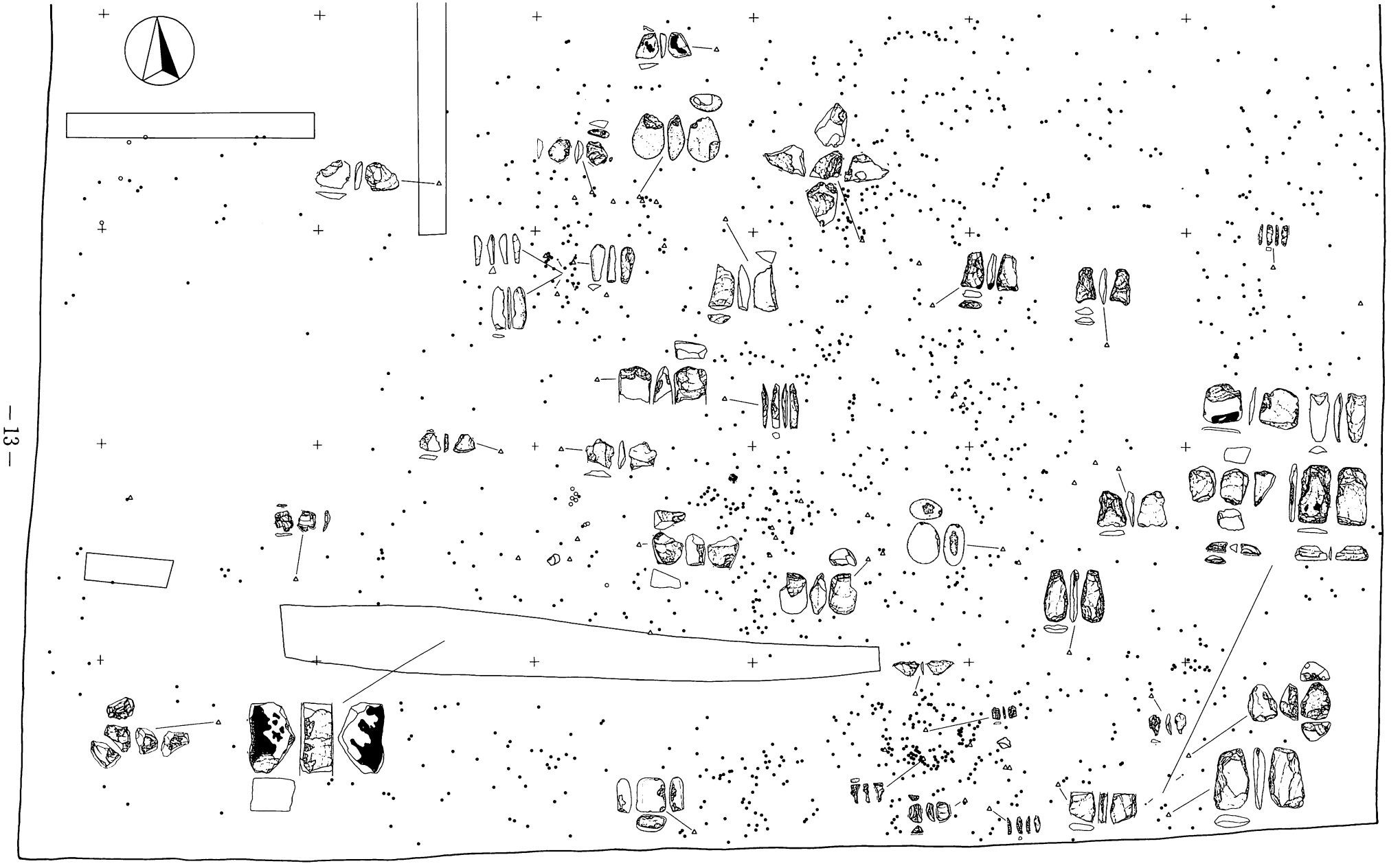


第6図　土器出土点数（1マスは1m×1m）

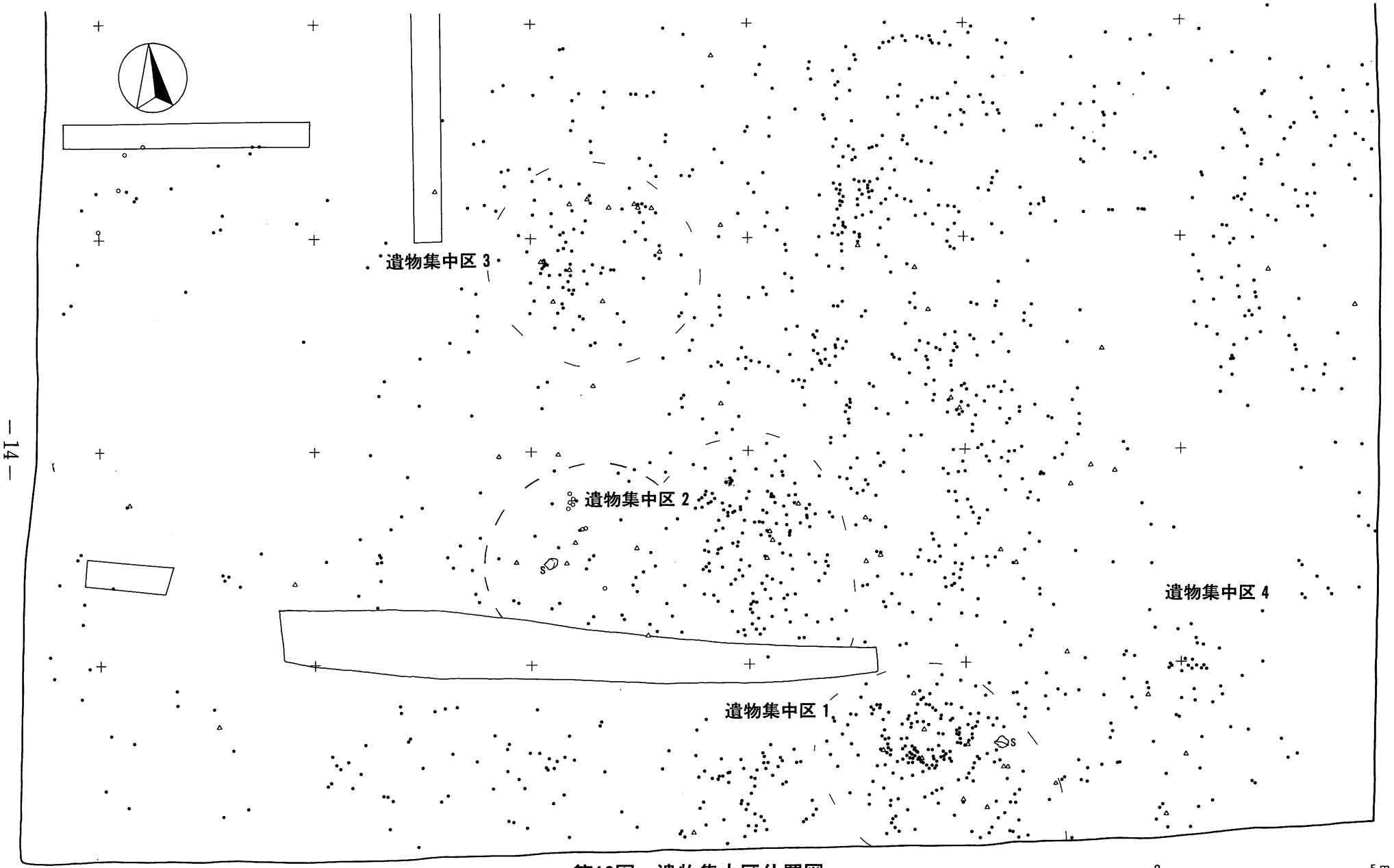


第7図　石器出土点数（1マスは1m×1m）

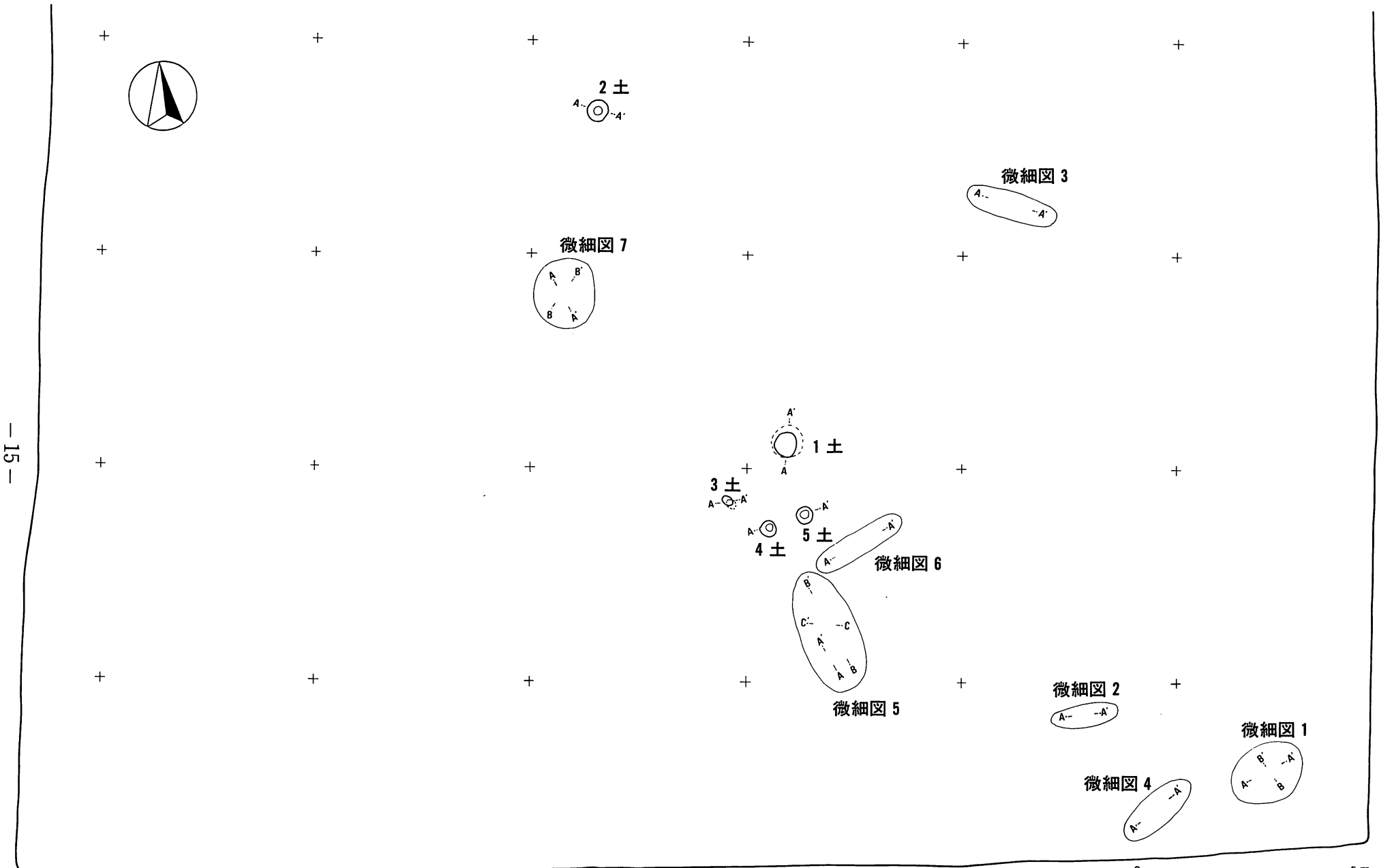
第8図　土器接合状況



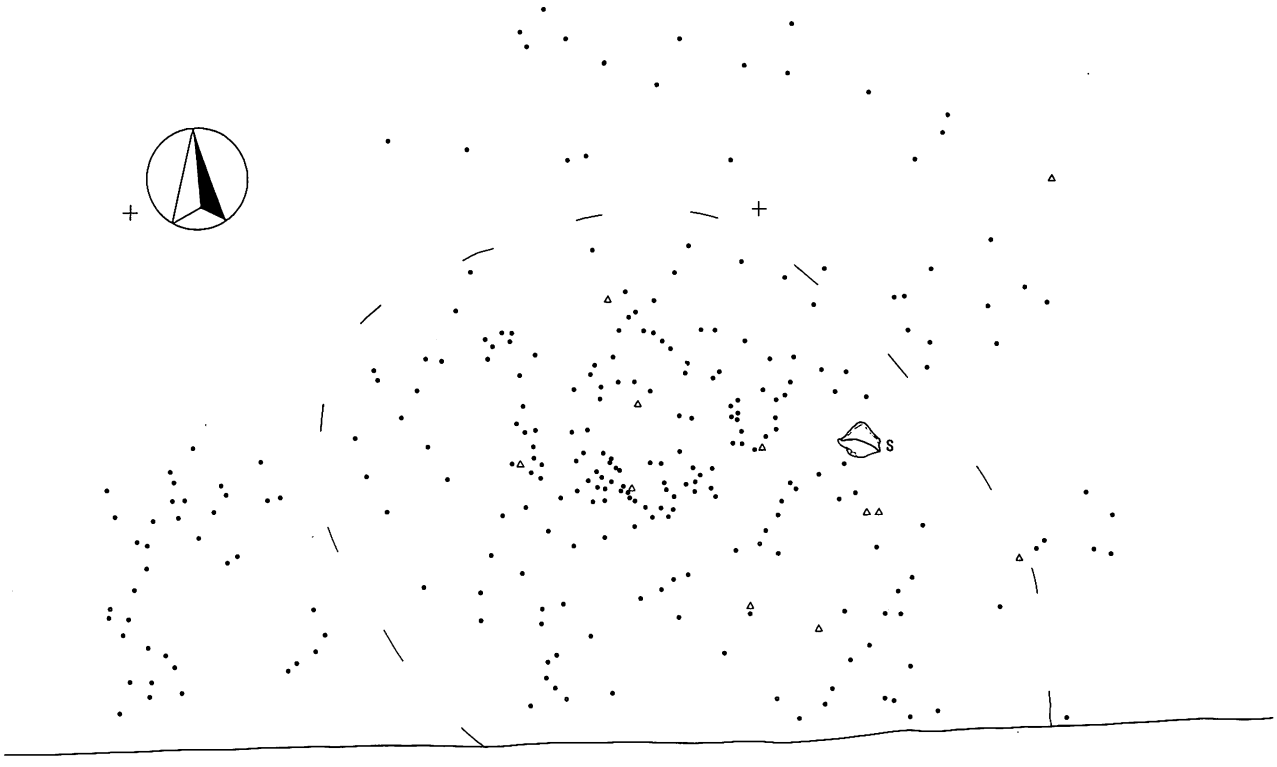
第 9 図　石器分布状況

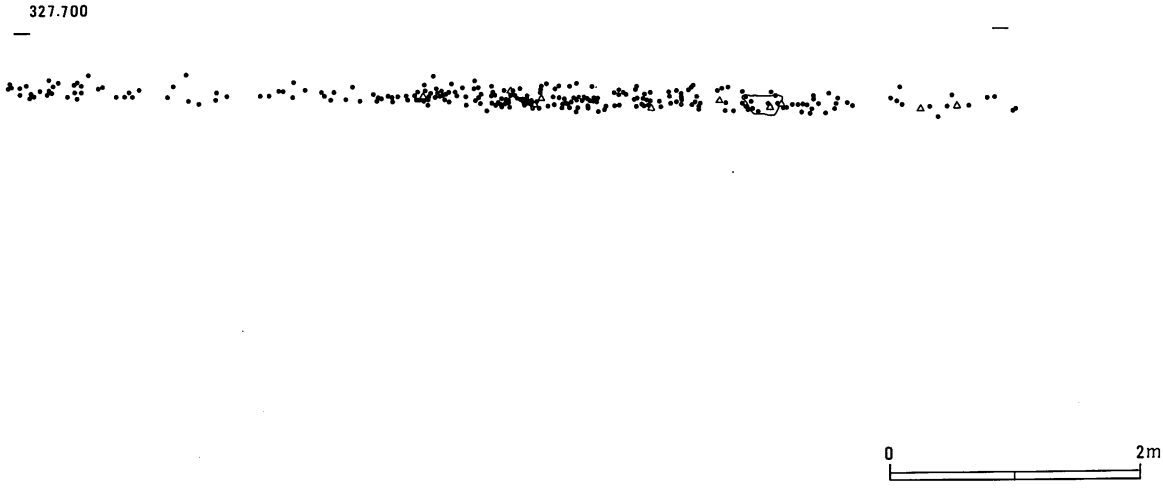


第10図　遺物集中区位置図

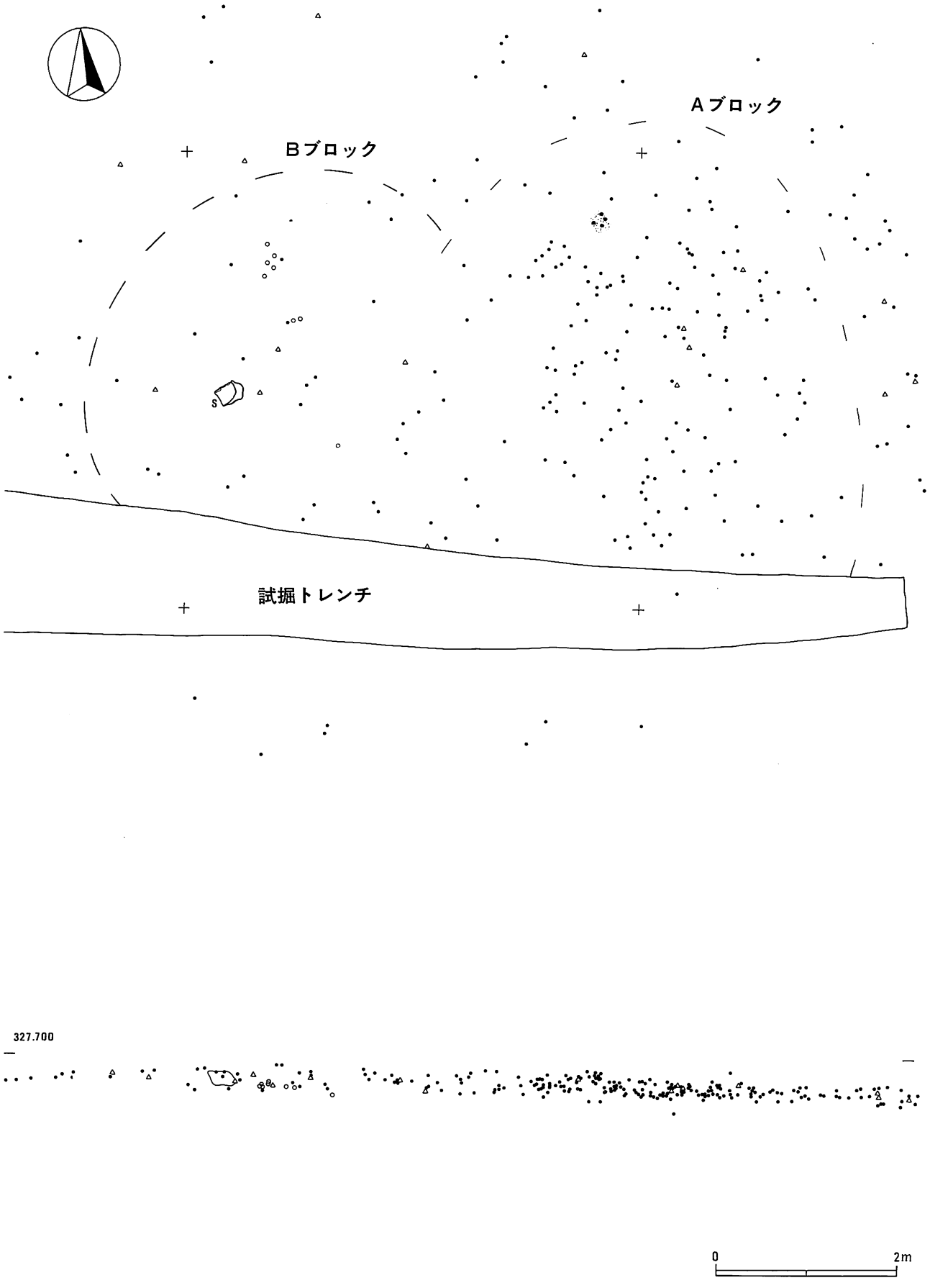


第11図　土坑・微細図ポイント位置図

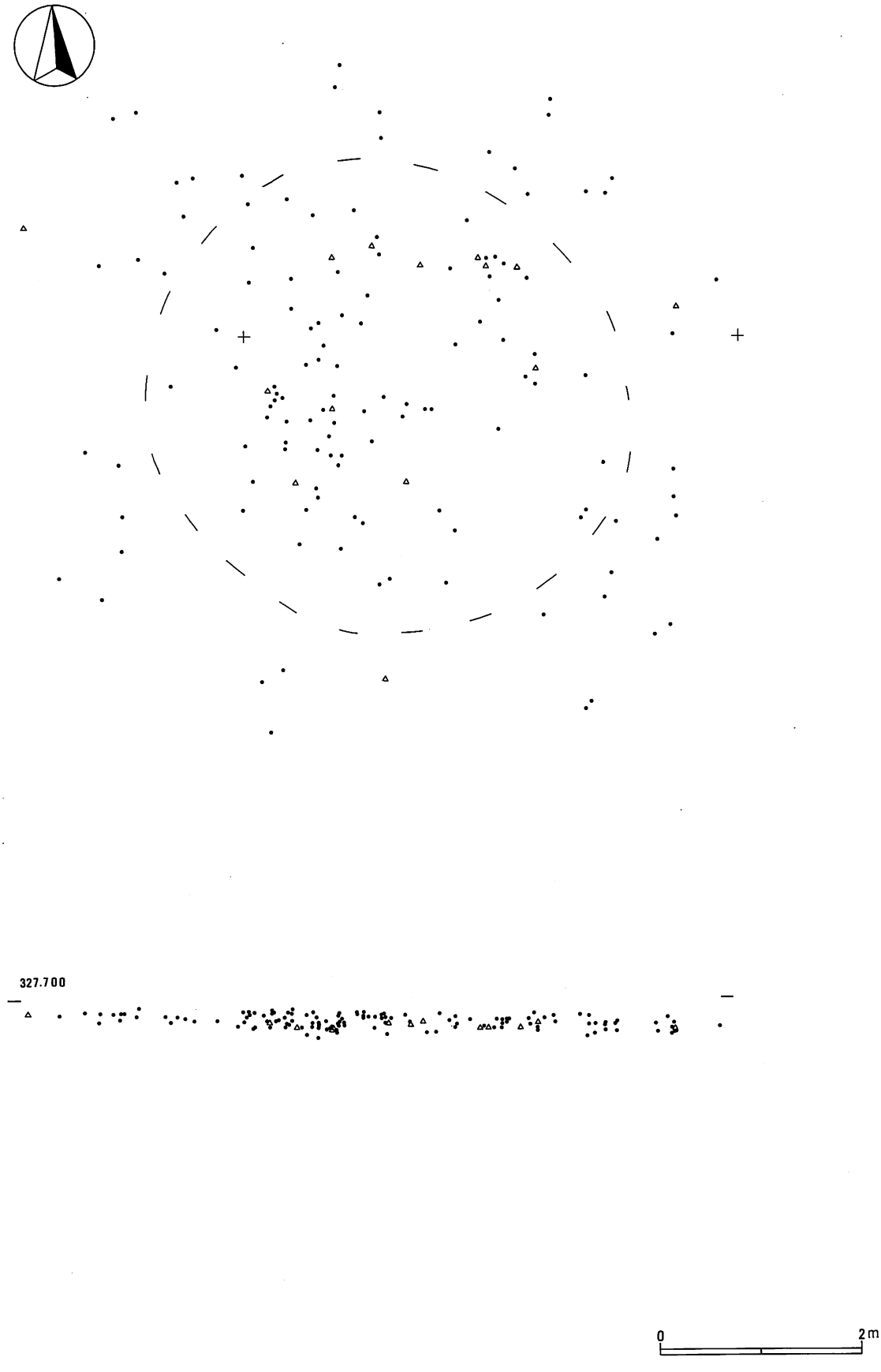




第12図　遺物集中区 1



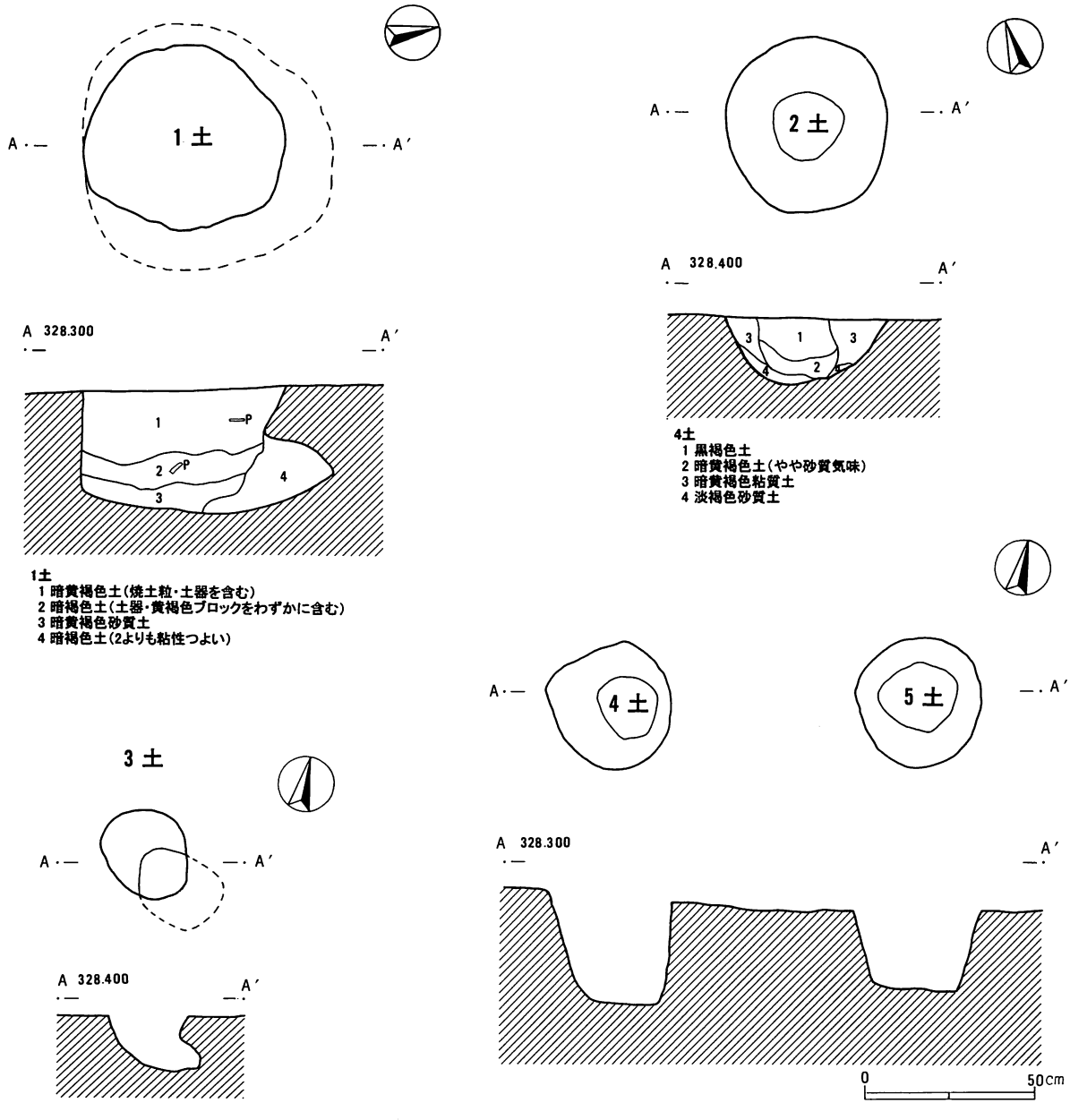
第13図　遺物集中区 2



第14図　遺物集中区 3

作されたものと見るよりも、他の地点で製作、使用されたものが破損、破砕された土器とともに一括廃棄されたものと考えられ、清掃行動（西秋1994）の存在が推定される。もうひとつの石器集中部であるＧ５グリッド～Ｇ６グリッドでは９点の石器が見られるが、土器集中域とは重複しない。石器内容は打製石鏃２点、横刃形石器１点、礫器２点、抉り入石器１点、微細剥離のある黒曜石剥片１点、粘板岩剥片２点である。黒曜石製石器の比率が低く、打製石鏃や礫器の比率が高く、本遺跡唯一の横刃形石器とその調整剥片が見られる。さらに、この周囲には通常の形態の打製石鏃が近接して分布している。これらは廃棄されたというよりは、生活空間の一部に格納されたものとの見方が可能である。

この他の石器の分布については、集中傾向がなく点的な分布であるが、４・５グリッドを中心として南北方向に連なる遺物集中帯を境にして、東側には打製石鏃、西側には礫器が多く分布する傾向にある。また打製石鏃のうち、刃部に抉り状の打撃が加えられ刃部両端が突出するものについては、Ｅ５グリッドを中心に分布する点も指摘できる。このように点的な分布ながら、特定の石器がある広がりをもつ空間を占拠しているように見える部分があり、特定の作業に優先的に使用された作業場的な空間が想定可能である。



第15図　第１～５号土坑

なお、台石については、特定器種の石器が周囲に分布するような傾向はなく、これも単独で分布する。遺物集中区１にある台石は土器集中メッシュの中に位置するが、すぐ東側には遺物のまばらな空間が広がり、台石周辺には遺物があまり分布しない作業空間があるものと見て取れる。

3　遺物集中区

遺物集中区１（第13図）

位　　置　G－４・５グリッド

出土傾向　やや東寄りに台状の大形礫が確認された。この礫は遺物集中区２－Aブロックの大形礫と接合する。土器・石器ともに集中する場所で、土器については遺物集中区２－AブロックやD－６グリッドのものと接合する破片も見られた。石器では特に黒曜石の製品や剝片などが目立った。

遺物集中区２（第14図）

位　　置　F－２・３・４グリッド（微細図５・６、土坑１・３～５を含む）

出土傾向　土器片の集中するAブロックと、中心に台状の礫を配し炭化物の集中するBブロックという２つのブロックが重なる形となるが、Aブロックについてもその北寄りで炭化物の集中する箇所が見られた。また土坑状の落ち込みもこのブロックに集中して見られる。なおBブロックの中心部にみられる大形の礫は、遺物集中区1に見られる台状の大形礫と接合する事がわかっている。また、Bブロックで出土した炭化物は分析可能であったもののすべてがクリ材であった。なお、Aブロックでみられる土器については遺物集中区１やD－５グリッドのものとの間に接合関係が見られるものが複数あった。石器については黒曜石の剝片が比較的多くみられた。

遺物集中区３（第15図）

位　　置　D・E－２・３グリッド（微細図７を含む）

出土傾向　土器の他、石器が集中して見られる範囲である。出土石器では黒曜石製の製品が目立つ。大きな土器片がまとまって出土した地点（微細図７）をも含んでいる。この地点から出土した炭化物を分析したところ、クリ材であることがわかっている。土器については遠距離間での接合は見られなかった。またその分布状況についても、他の遺物集中区が周辺を含めて全体的に多くの遺物数をカウントしているのに対して、ここでは特定の１メッシュに31点というようにかなり限定された遺物集中を読み取れる。その一方石器のみに関する集中の度合いを見てみると、１メッシュに３点という集中が２箇所で確認されている。というように幾つかの要素から他遺物集中区との相違点を指摘できる。なお、この地点は南北に連なる遺物集中帯には含まれていない。

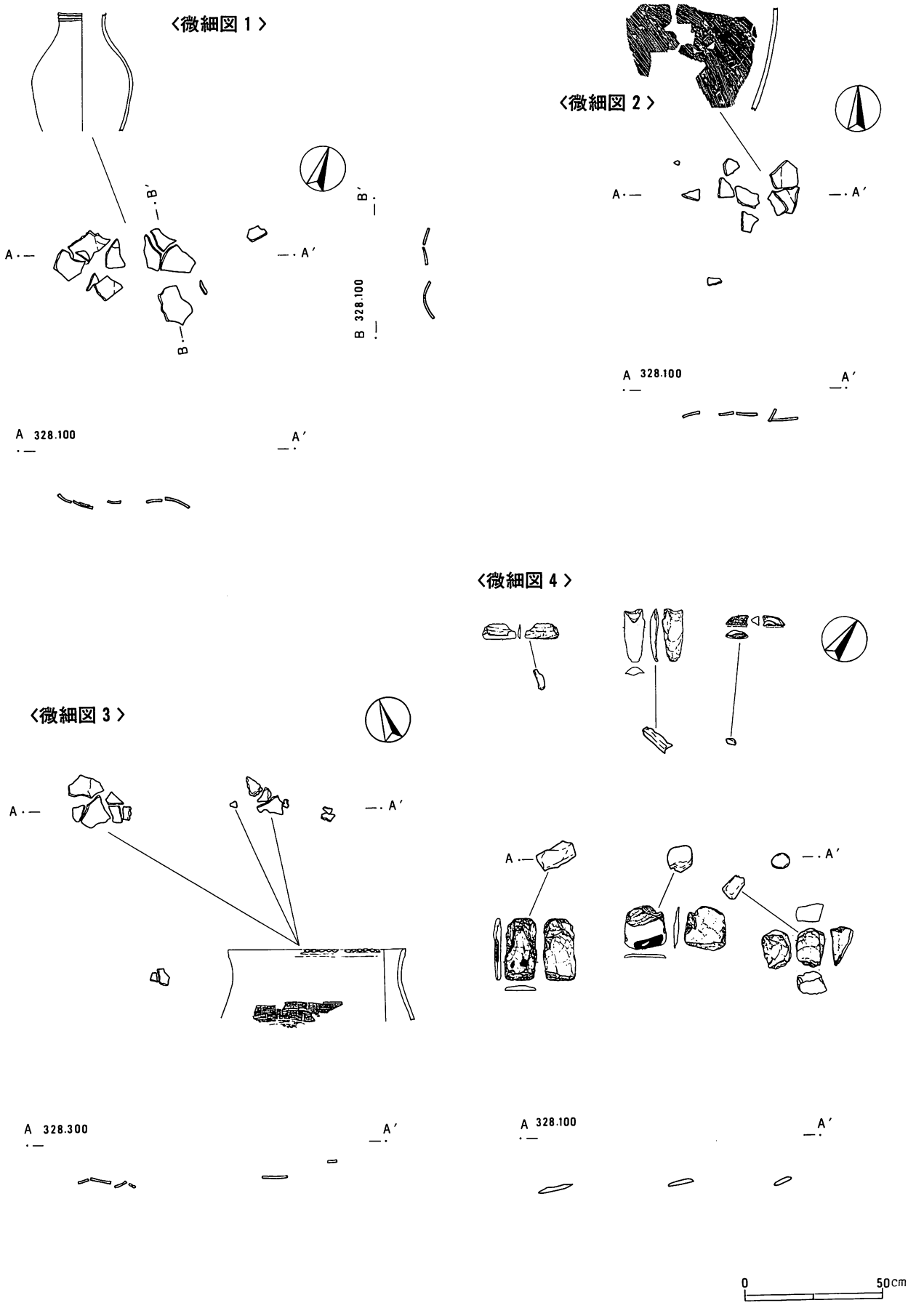
遺物集中区４（第11・17図）

位　　置　G－５グリッド（微細図４を含む）

出土傾向　特に短冊形で大きな形態をもつ打製石鏃が集中して多く見られる。周辺の遺物数は多くないものの、割合大きな土器片が出土している。

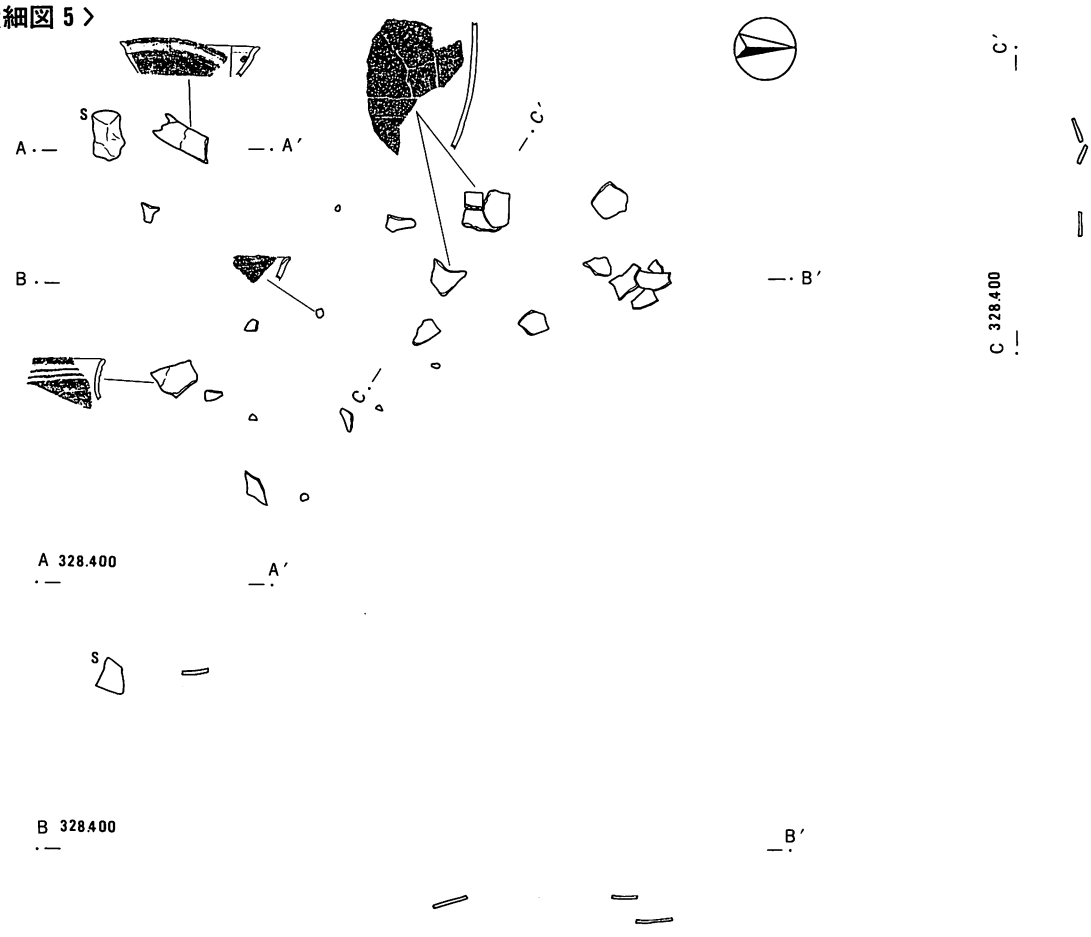
第４節　発見された遺構

本遺跡からは、風倒木の痕跡を示すと考えられる落ち込みが５基確認されたのみで、住居跡や土坑などの人為的な遺構は全く発見されなかった。しかしながら上述のように、遺物の集中に偏りがみられることからこの辺りを中心に生活が営まれていた可能性もある。しかしながら、柱穴や焼土の集中箇所など、住居跡を示すような生活の痕跡は全く確認されなかった。

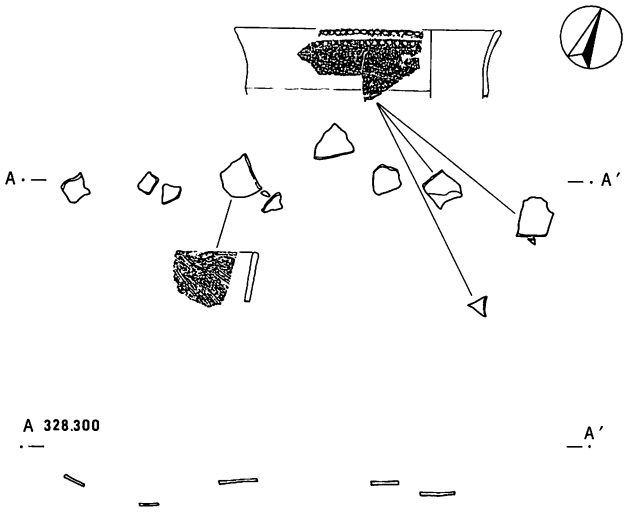

〈微細図 1〉
A
A′
B
B′
B 328.100
A 328.100
〈微細図 2〉
A
A′
A 328.100
〈微細図 3〉
A
A′
A 328.300
〈微細図 4〉
A
A′
A 328.100
0
50cm

第16図　微細図 1 ～ 4

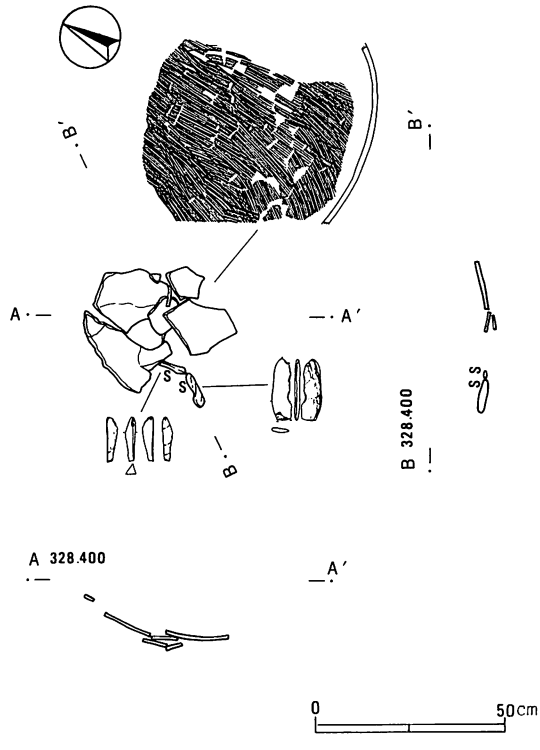
〈微細図 5 〉



〈微細図 6 〉



〈微細図 7 〉



第17図　微細図 5 ～ 7

1．土坑（第16図）

土坑状の落ち込みが数基確認されたが、いずれからも明確な出土遺物はなく、土層観察からも人為性は認められなかった。第1・3号土坑のように灰白色粘質土や炭化物の入ったものも見られる事からこれらの落ち込みは植物の根などの痕跡と考えるのが最も自然であろう。

第1号土坑

位　　置　E－4グリッド

規模・形状　73×71cm、深さ35cm、不正円形。ほぼ全周でオーバーハングし、中からは灰白色粘質土と炭化物が出土した。形状・土坑内内容物などから風倒木の痕跡の一部と考えられる。

第2号土坑

位　　置　D－3グリッド

規模・形状　42×52cm、深さ19cm、円形。底面から緩く立ちあがる。出土遺物はみられなかった。

第3号土坑

位　　置　F－3グリッド

規模・形状　28×26cm、深さ16cm、不正円形。東側でややオーバーハングする。中からは灰白色粘質土と炭化物が出土した。形状・土坑内容物などから風倒木の痕跡の一部と考えられる。

第4号土坑

位　　置　F－4グリッド

規模・形状　37×37cm、深さ30cm、不正円形。中からは灰白色粘質土と炭化物が出土した。形状・土坑内容物などから風倒木の痕跡の一部と考えられる。

第5号土坑

位　　置　F－4グリッド

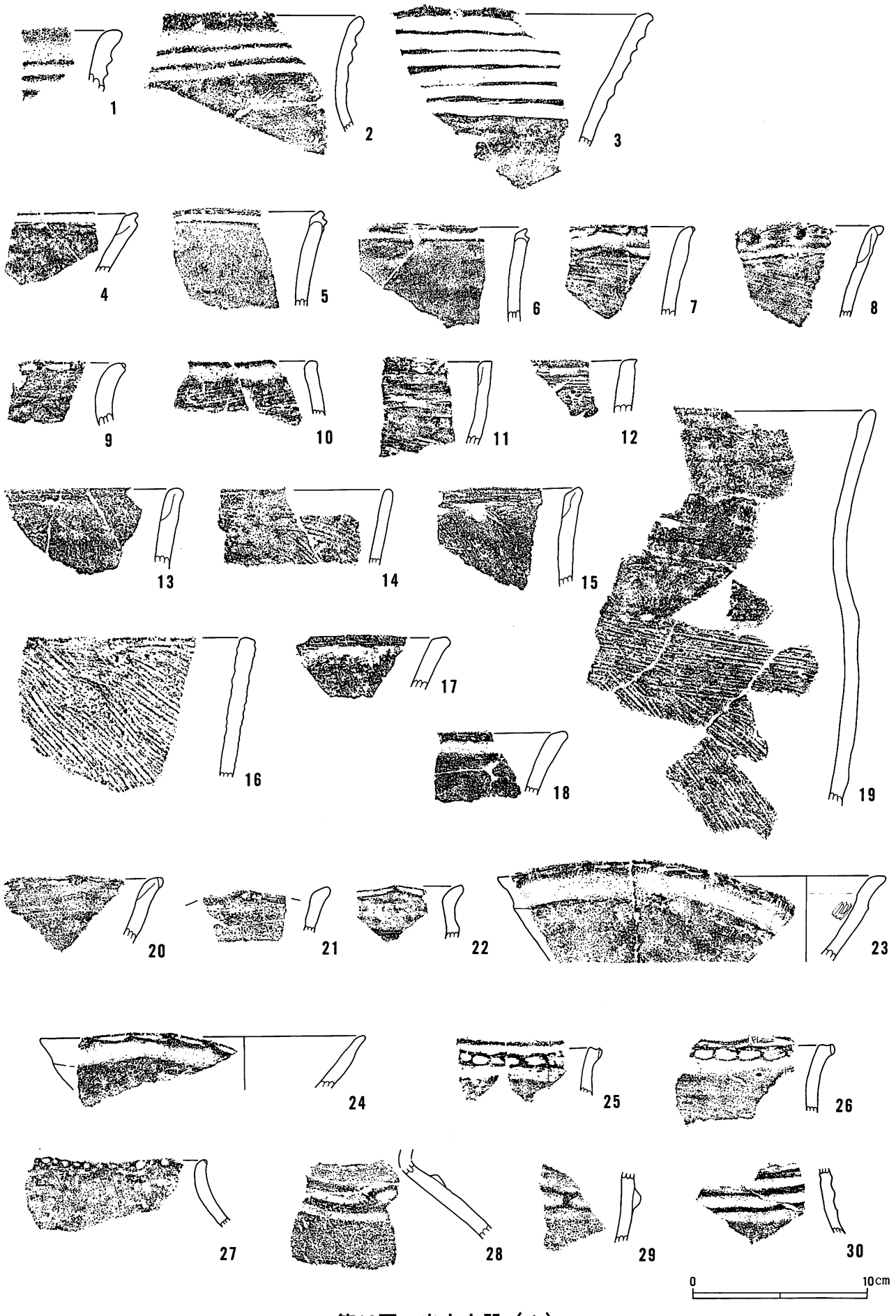
規模・形状　37×38cm、深さ29cm、円形。土坑内からの出土遺物はみられなかった。

第3節　発見された遺物

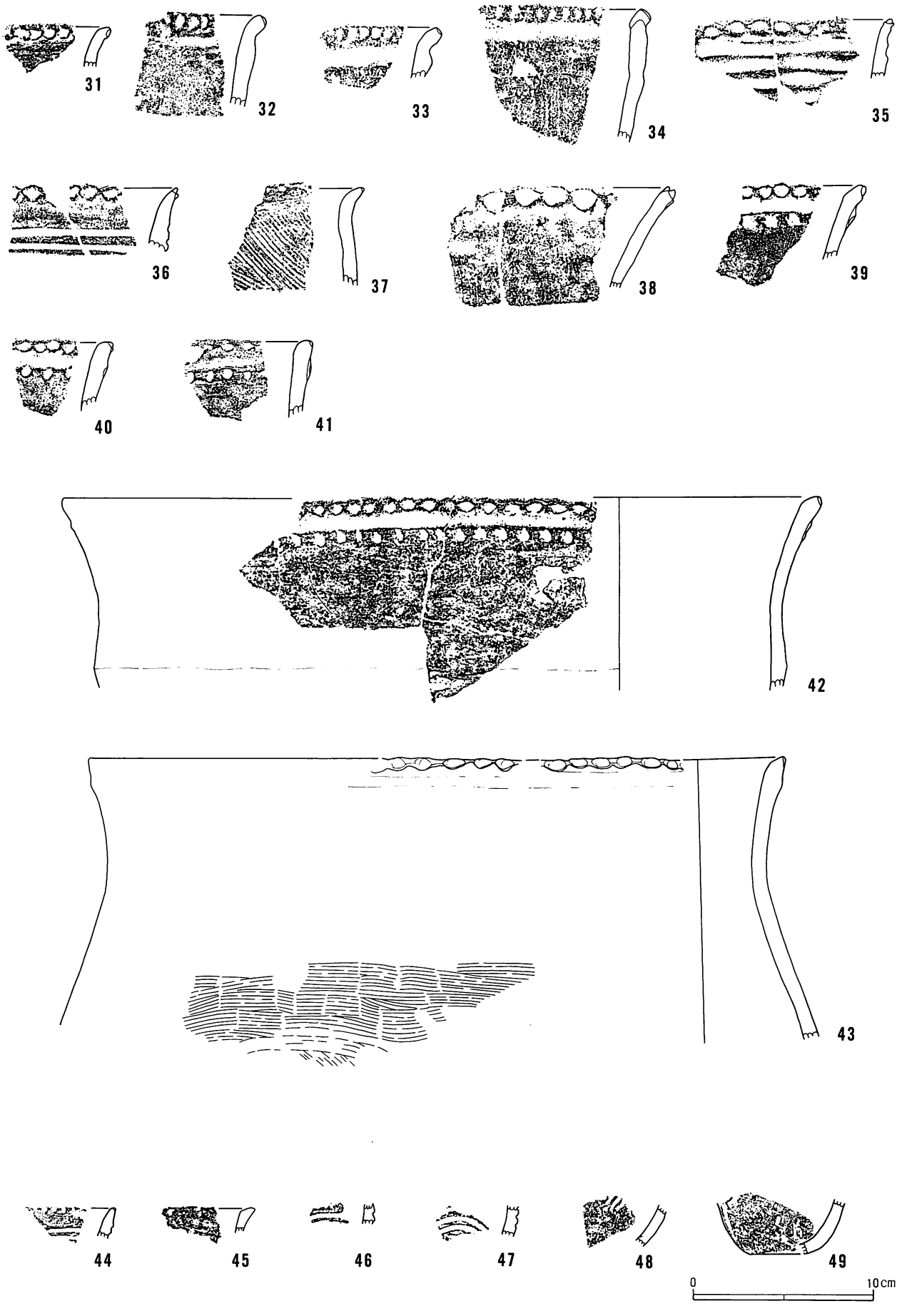
本遺跡からは、2,000点あまりの土器と40点ほどの石器、その他剝片などが発見されたが、遺構に伴うものはみられず全て黒褐色土中から出土した。

1．土器（縄文時代晩期最終末～弥生時代初頭）（第18～23図）

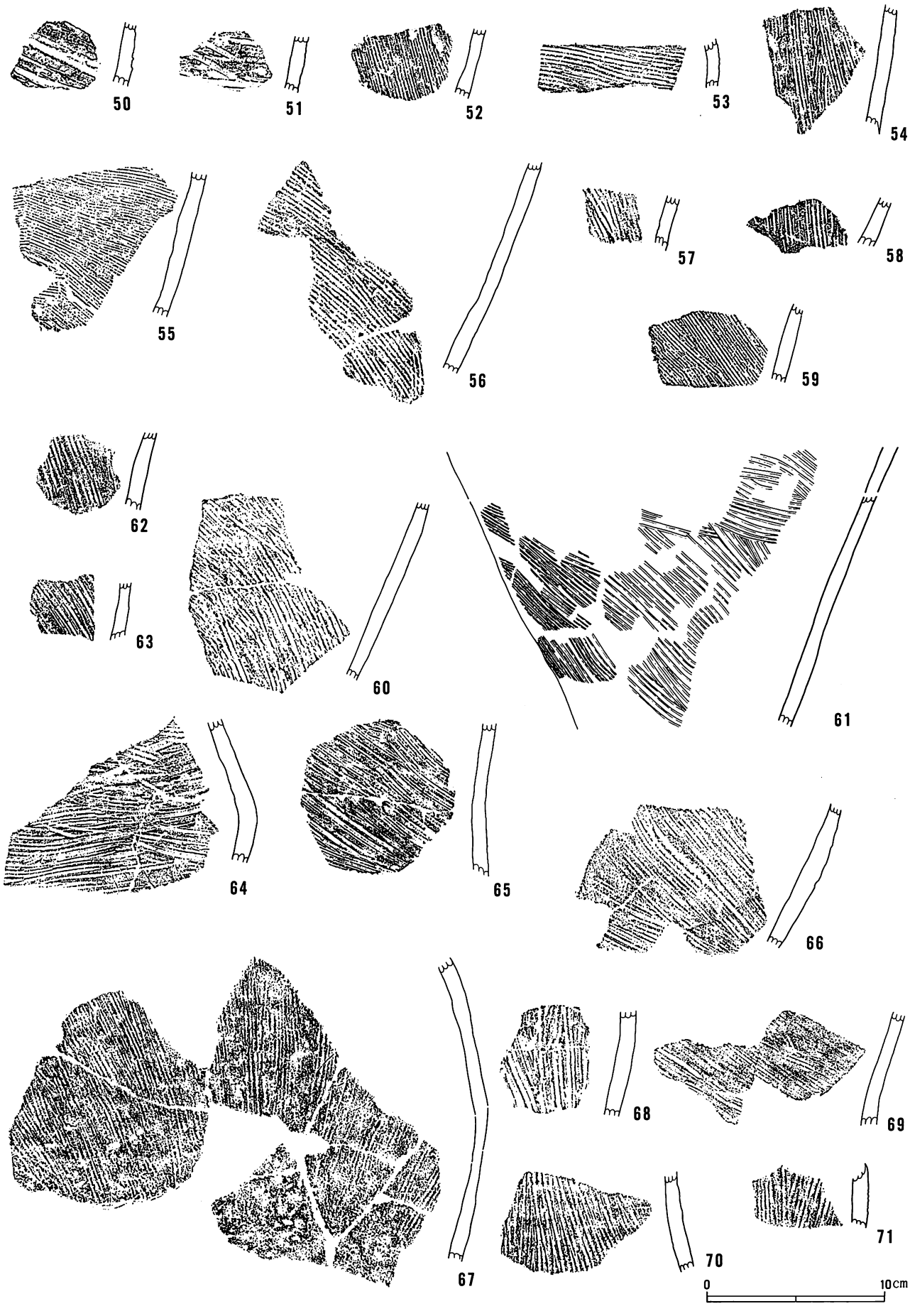
1～19には深鉢の口縁部を一括した。1～3は口縁部直下に複数の凹線をもつ一群で、金生遺跡A区17号住居跡出土のものに類例が見られる。4～6は口縁部直下に沈線をもち、口縁部内面に面をもつ一群、7～9は口縁部に小突起をもつ一群、10～19は平口縁となる一群である。16の胎土は明灰褐色を呈し内外面には細密条痕が施される。19は胴部がやや丸みを帯び、口縁が弱く外反する器形で口縁部と胴部の境には稜をもつ。胴部には細密条痕がみられ、口縁部はナデによる調整が施される。20～24には浅鉢を一括した。いずれも口縁部に小突起をもつが、21・22は波状口縁になるものと考えられる。23の内面にはタテ方向のミガキがわずかに認められる。25～30は壷の破片である。25・26は口縁部直下に押圧を伴う凸帯をもつもので同一個体と考えられる。27は口縁部に刻み目をもつ。28・29の壷には肩部に眼鏡状突帯が認められる。30は頸部に凹線をもつ。31～43には甕の口縁部を一括した。31～43は口縁に刻み目をもつ一群である。31～34は口縁端部をわずかに外反させる。37も口縁


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
10cm

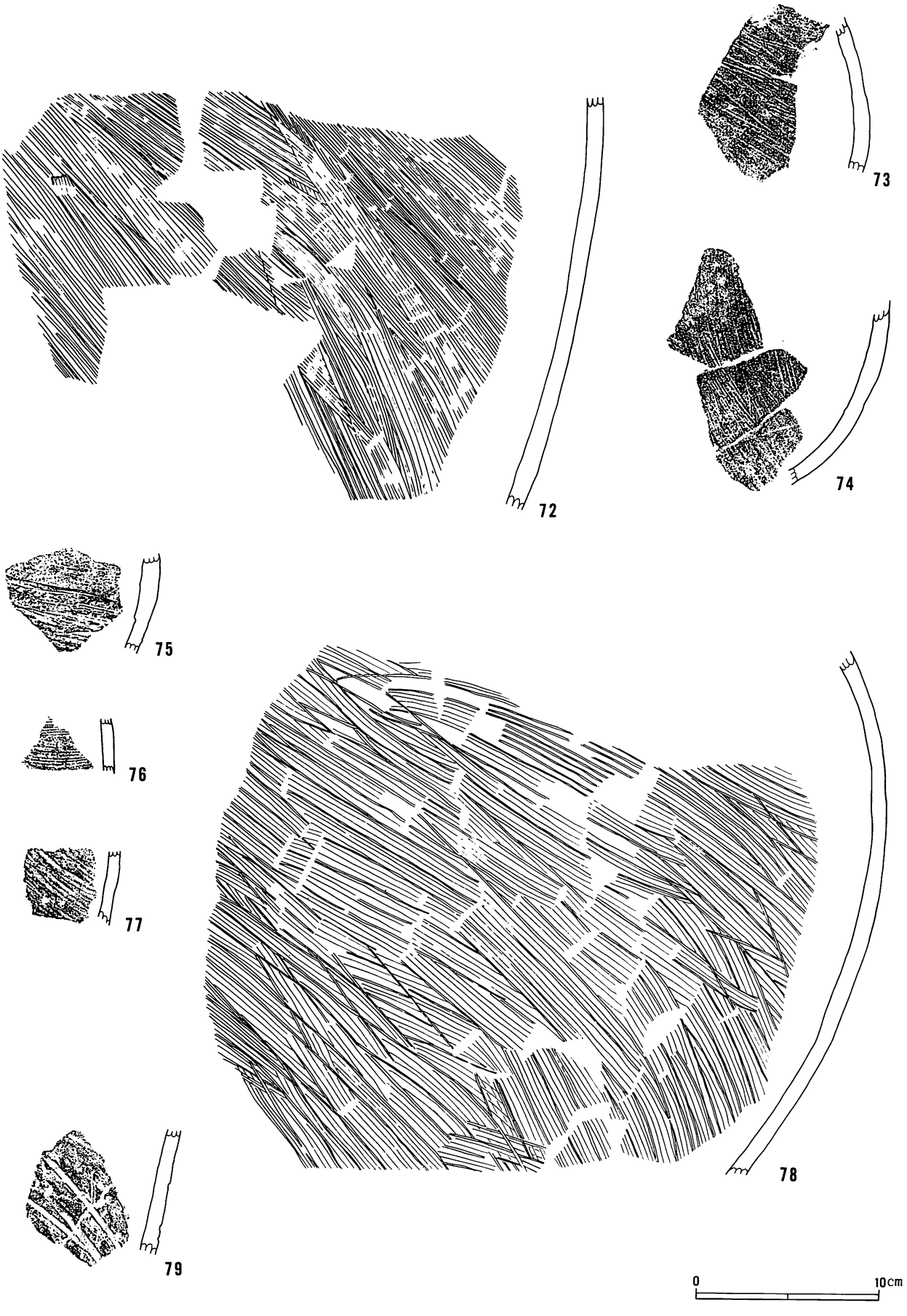
第18図　出土土器（1）



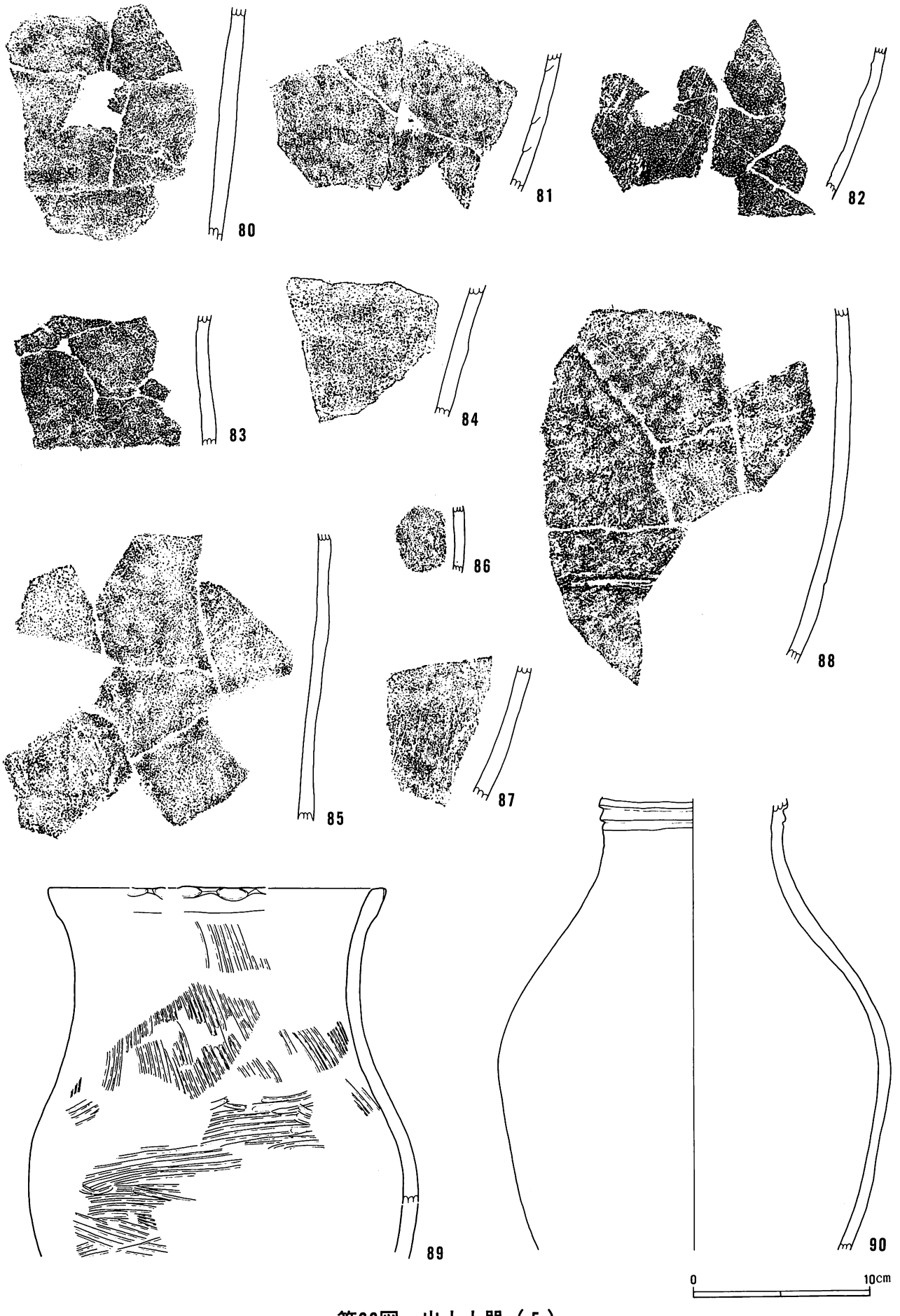
第19図　出土土器（2）



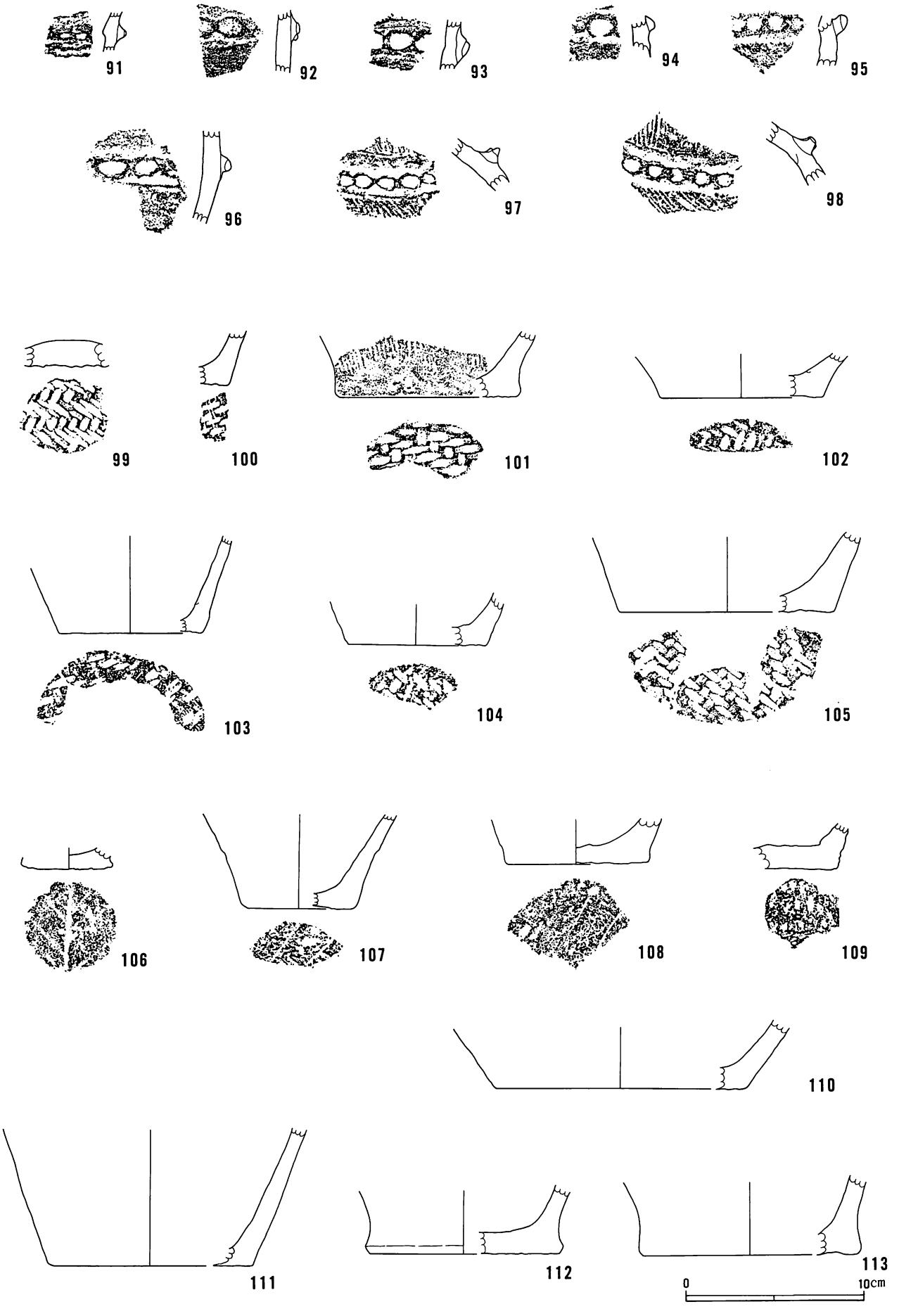
第20図　出土土器（3）



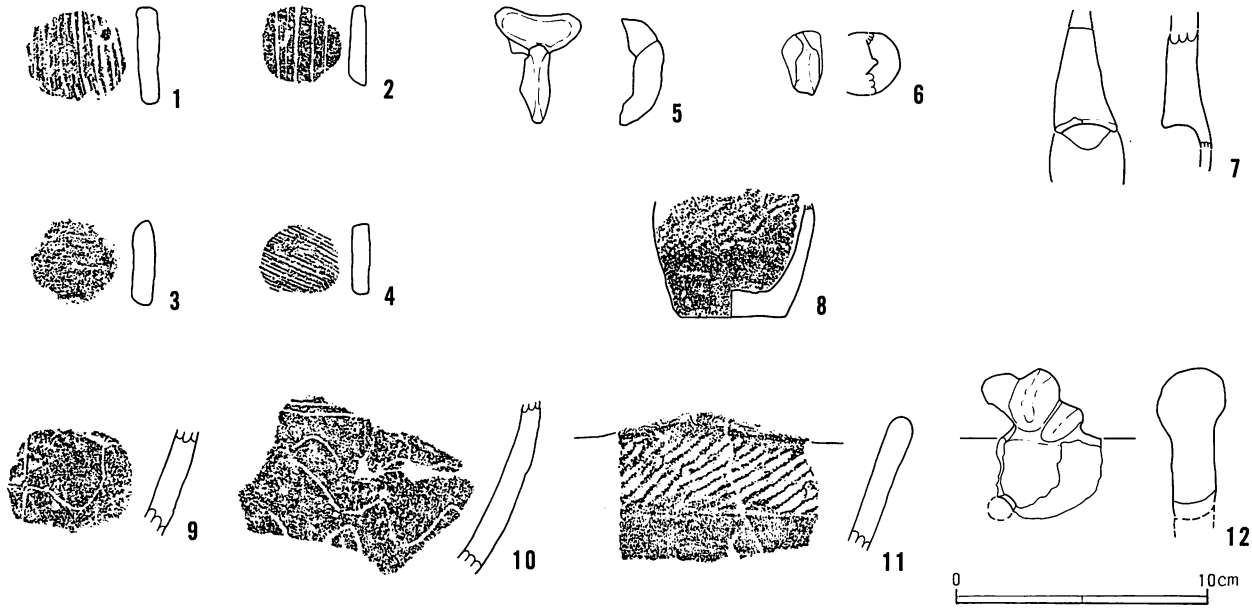
第21図　出土土器（4）



第22図　出土土器（5）


91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
0
10cm

第23図　出土土器（6）



第24図　出土土器（７）特殊遺物

端部をやや外反させているが、端部を細くおさめ口縁部以下には条痕が施されている。35は口縁部直下に凹線を、36は同じく沈線をもつ。39～42は２段に刻みをもつもので、39・41・42の口縁部直下の刻み目は貼り付けによる低い凸帯に伴うものである。42には口縁部と胴部との間に明確な稜が見られる。43は弱く外反する頸部にはナデ調整、以下条痕が施される。口縁部直下にやや突出する部分をもつが、ここには刻みなどは施されていない。44～49はミニチュア土器と考えられるもので、44は口縁部に刻み目、口縁部直下に沈線をもつ小形の甕と考えられる。45も口縁部であるが、器種は不明である。46・47は沈線による弧状モチーフをもつ同一個体と考えられる。48・49も同一個体と考えられるが、48には沈線がみられる。50～88には胴部破片を一括したが、条痕の種類によって１種から６種に分けた。基本的には中山氏の分類（中山 1985）に準じるが中山氏の３種をここでは２つに分けている。１種は幅広の浅い条痕で断面形が凵状を呈するもので50・51がこれにあてはまる。２種はクシ状工具による浅い条痕で断面形がU字状を呈するもので53～61があてはまる。３種は細密条痕文で断面形がV状となるもので62～74がこれにあたる。４種は３種とほぼ同様の工具によるものだが、器面への工具の当て方が弱くナデ風の条痕を残すものとなる。75～77がこれにあてはまる。５種はヘラ状の簡単な工具による不揃いな条痕で断面形はL状のきわめて浅いものとなるが、これには79があてはまる。６種は先端部の丸い棒状工具による幅広の条痕で89がこれにあたる。80～87は外面にヘラ削りが施される一群である。89は口縁端部外面に押圧をもつ甕で頸部にはタテ方向の、胴部にはヨコ方向の条痕が施される。条痕は先端部の丸い棒状工具による幅広の浅いもので、断面形はU字状となる。90は頸部に凸帯をもつ壷でこの凸帯は削り出しによるものである。91～98は押圧を伴う凸帯をもつもので器種は壷である。99～113は底部で、99～105は底面に網代痕をもつもの、106～109は木葉痕をもつもの、110～113は底部が無文のものである。

２．土器（縄文時代後期・弥生時代中期中葉）**・特殊遺物**（第24図）

１～４は土製円盤、５・６は不明土製品であるが、５には剝離した痕跡がみられる事から把手などのように土器についていたものである可能性が大きい。７は土製スプーンである。８～11は弥生時代中期中葉に属するものと思われる。８は胴部下半に縄文を施す小形土器である。９・10はともに沈線によるゆるい波状文をもつもので接合はしないものの、同一個体と考えられる。11は口縁部に縄文帯をもつ。12は口縁部で口縁端面に螺状の突起をもつもので縄文時代後期のものである。

第１表　横堀遺跡出土土器一覧

No.	器　種	色　調	胎　　土	焼成	出土位置	備　　考
1	深鉢	茶黄色	白砂、金雲母含む	良	Ｅ－４	
2	深鉢	暗褐色	細白砂、金雲母、石英含む	良	Ｆ－４	
3	深鉢	赤茶褐色	細白砂、金雲母、小さい石少量含む	良	Ｇ－６	
4	深鉢	灰褐色	細砂、角閃石、赤い砂少量含む	良	Ｇ－５	
5	深鉢	黄褐色	角閃石、白砂、赤砂、黒砂含む	良	Ｇ－２	
6	深鉢	灰黄色	金雲母、白砂、赤砂、黒砂、角閃石含む	良	Ｆ－０	
7	深鉢	灰褐色	白砂、角閃石、赤砂、石英含む	良	Ｅ－４	
8	深鉢	灰茶色	白粒子、石英含む	良	Ｅ－４	
9	深鉢	明茶褐色	細白砂、少量の角閃石、石英含む	良	一括	
10	深鉢	茶褐色	細白砂を含む	良	一括	
11	深鉢	灰褐色	角閃石、茶砂、赤砂少量含む	良	Ｆ－３	
12	深鉢	灰褐色	黒砂、白砂含む	良	Ｄ－１	
13	深鉢	茶褐色	赤砂、角閃石、白砂、金雲母含む	良	Ｇ－４	
14	深鉢	暗茶褐色	細白砂、少量の角閃石	良	Ｇ－４	
15	深鉢	明茶褐色	金雲母、赤砂、白砂、角閃石含む	良	Ｇ－４	
16	深鉢	明灰褐色	細砂、角閃石、赤い砂少量含む	良	Ｆ－４	
17	深鉢	赤茶褐色	細白砂含む	良	Ｅ－４	
18	深鉢	灰褐色	細砂、角閃石、赤い砂少量含む	良	Ｅ－６	
19	深鉢	赤茶褐色	細白砂、角閃石、４ミリ程度の石を含む	良	Ｇ－４、Ｄ－６	
20	浅鉢	茶灰色	赤砂、白砂、金雲母含む	良	Ｆ－４	
21	深鉢	茶褐色	白砂、石英少量含む	良	Ｇ－５	
22	深鉢	赤茶褐色	細白砂、少量の角閃石と石英含む	良	Ｄ－６	
23	浅鉢	暗黄茶褐色	細白砂、赤砂、石英、金雲母を含む	良	Ｆ－４	
24	浅鉢	茶褐色	細白砂、角閃石含む	良	Ｇ－５	
25	壷	明灰黄色	細白砂を含む	良	Ｄ－５、Ｆ－４	
26	壷	茶黄色	金雲母、白砂、赤砂含む	良	Ｄ－５	
27	壷	暗茶褐色	細白砂、石英を少量含む	良	試掘トレンチ	
28	壷	茶褐色	細白砂、金雲母含む	良	Ｆ－４	突帯は貼り付けによる
29	壷	茶褐色	細白砂、金雲母含む	良	Ｆ－２	突帯は貼り付けによる
30	壷	茶褐色	細白砂、金雲母含む	良	Ｄ－６	
31	甕	灰茶色	白砂、角閃石含む	良	Ｇ－３	
32	甕	灰褐色	金雲母、白砂、茶砂含む	良	Ｆ－４	
33	甕	黄茶褐色	細白砂、石英含む	良	Ｅ－３	
34	甕	茶黄色	赤砂、白砂、金雲母含む	良	Ｅ－３、Ｄ－３	
35	甕	黄褐色	細白砂、少量の金雲母含む	良	Ｄ－６、Ｄ－５	
36	甕	明赤茶褐色	細白砂、金雲母、角閃石を含む	良	試掘トレンチ	
37	甕	灰黄色	白砂、金雲母少量含む	良	Ｆ－２	
38	甕	茶褐色	細白砂、少量の石英含む	良	Ｅ－５	
39	甕	茶褐色	細白砂含む、微量の角閃石含む	良	Ｇ－５	二段目の突帯は貼り付けによる
40	甕	赤黄色	細白砂、少量の角閃石含む	良	Ｇ－４	
41	甕	茶褐色	白砂、角閃石含む	良	Ｆ－２	二段目の突帯は貼り付けによる
42	甕	暗茶褐色	細白砂、少量の石英、角閃石含む	良	Ｆ－４	二段目の突帯は貼り付けによる
43	甕	暗茶褐色	細白砂、角閃石含む	良	Ｄ－５、Ｆ－４	
44	小形甕	灰茶色	金雲母、白砂、角閃石含む	良	Ｇ－６	
45	小形甕	黄灰茶褐色	細白砂、微量の石英含む	良	Ｇ－４	
46	?	茶色	角閃石、白砂含む	良	Ｇ－５	47と同一個体
47	?	茶色	角閃石、白砂含む	良	Ｇ－５	46と同一個体
48	ミニチュア土器	明茶褐色	細砂と白砂、角閃石少量含む	良	Ｇ－６	49と同一個体
49	ミニチュア土器	明茶褐色	細砂と白砂、角閃石少量含む	良	Ｇ－５、Ｇ－６	48と同一個体
50	甕(条痕１種)	茶褐色	白砂、金雲母、角閃石、３mmの石英含む	良	Ｇ－４	
51	甕(条痕１種)	黒褐色	細白砂含む	良	Ｇ－４	
52	甕(条痕２種)	灰黄色	細白砂、金雲母含む	良	Ｆ－４	
53	甕(条痕２種)	暗茶褐色	細白砂含む、角閃石、金雲母少量	良	Ｆ－４	
54	甕(条痕２種)	灰茶色	金雲母、白砂含む	良	Ｇ－４	
55	甕(条痕２種)	灰黄色	角閃石、複粒子含む	良	Ｄ－３	
56	甕(条痕２種)	茶褐色	角閃石、金雲母、白砂含む	良	Ｇ－４	
57	甕(条痕２種)	茶褐色	細白砂含む、少量の石英、金雲母含む	良	Ｆ－２	
58	甕(条痕２種)	茶灰色	金雲母、白砂含む	良	Ｆ－３	
59	甕(条痕２種)	茶灰色	角閃石、金雲母、他粒子含む	良	Ｆ－４	
60	甕(条痕２種)	茶灰色	角閃石、石英、白砂含む	良	Ｅ－４	
61	甕(条痕２種)	灰黄褐色	細白砂、少量の角閃石、赤砂含む	良	Ｅ－４、Ｅ・Ｇ－６、Ｆ－５・６	
62	甕(条痕３種)	茶褐色	白砂、角閃石含む	良	Ｇ－４	
63	甕(条痕３種)	暗茶褐色	細白砂含む、石英少々あり	良	Ｆ－３	

64	甕(条痕３種)	暗茶褐色	角閃石、白砂含む	良	Ｄ－４	
65	甕(条痕３種)	茶褐色	細砂含む	良	Ｆ－１	
66	甕(条痕３種)	茶褐色	角閃石、白砂含む	良	Ｄ－４	
67	壷(条痕３種)	茶褐色	細白砂、金雲母含む	良	Ｆ－４	
68	甕(条痕３種)	暗灰黄色	金雲母、複粒子含む	良	Ｇ－３	
69	甕(条痕３種)	灰褐色	金雲母、白砂、赤砂、角閃石含む	良	Ｅ－４	
70	甕(条痕３種)	赤茶色	細白砂含む、角閃石含む	良	Ｇ－５	
71	甕(条痕３種)	明黄茶褐色		良	試掘トレンチ	
72	甕(条痕３種)	茶褐色	金雲母、白砂	良	Ｇ－５、Ｆ－５	
73	甕(条痕３種)	暗褐色	細白砂含む、金雲母少々	良	Ｆ－４	
74	甕(条痕３種)	焦げ茶色	細白砂、金雲母含む	良	Ｇ－５、Ｆ－３	
75	甕(条痕４種)	暗茶褐色	細白砂含む、角閃石少量	良	Ｇ－５	
76	甕(条痕４種)	焦げ茶色	細白砂含む	良	Ｇ－５	
77	甕(条痕４種)	茶灰色	金雲母、白砂含む	良	Ｇ－４	
78	甕(条痕４種)	赤茶褐色	細白砂、角閃石、少量の赤砂含む	良	Ｅ－３	
79	甕(条痕５種)	暗茶褐色	細白砂含む、角閃石含む	良	Ｇ－４	
80	甕	暗茶色	金雲母、白砂、赤砂含む	良	Ｅ－４	
81	鉢	茶褐色	角閃石、白砂、金雲母含む	良	Ｇ－４	
82	?	暗茶褐色	細白砂、石英少々含む	良	Ｆ－５、Ｄ－４	
83	深鉢	中赤茶色	細白砂、金雲母含む	良	Ｇ－４	
84	深鉢	茶褐色	角閃石、金雲母、赤砂、白砂含む	良	Ｆ－４	
85	甕	黄灰茶褐色	細白砂、少量の赤砂、金雲母、石英含む	良	Ｆ－４	
86	甕	赤茶褐色	細白砂、赤砂、少量の石英	良	Ｄ－５	
87	甕	暗灰黄色	粗白粒子、角閃石含む	良	Ｄ－４	
88	甕	暗茶褐色	細白砂、石英、少量の金雲母	良	Ｆ－４、Ｆ－５	
89	壷(条痕６種)	灰黄褐色	細白砂、角閃石含む	良	Ｄ・Ｆ－５・６、Ｅ－４・６、Ｇ－５・６	
90	壷	茶褐色	赤砂、金雲母、白砂含む	良	Ｇ－６	突帯は削り出しによる
91	甕	灰黄色	金雲母、白砂、茶砂微量含む	良	Ｇ－５	突帯は貼り付けによる
92	甕	赤茶褐色	細白砂含む	良	Ｇ－２	突帯は削り出しによる
93	壷	茶褐色	角閃石、白砂含む	良	Ｄ－４	突帯は貼り付けによる
94	壷	茶褐色	細白砂含む	良	Ｄ－６	突帯は削り出しによる
95	壷	黄茶色	金雲母、白砂含む	良	Ｇ－５	突帯は貼り付けによる
96	壷	茶褐色	角閃石、白砂、金雲母含む	良	Ｄ－４	突帯は削り出しによる
97	壷	暗茶褐色	細白砂、角閃石、石英少々	良	Ｇ－５	突帯は貼り付けによる
98	壷	暗赤茶褐色	細白砂、角閃石、石英少々含む	良	Ｇ－５	突帯は貼り付けによる
99	底部	茶灰色	金雲母、白砂、赤砂、黒砂、石英含む	良	Ｆ－４	網代痕あり
100	底部	黄茶褐色	細砂と白砂を含む	良	Ｅ－５	網代痕あり
101	底部	茶褐色	角閃石、白砂、赤砂、黒砂、金雲母含む	良	Ｅ－４	網代痕あり
102	底部	黄茶褐色	細白砂、少量の金雲母、角閃石、石英含む	良	Ｆ－３	網代痕あり
103	底部	黄茶褐色	細白砂、少量の角閃石を含む	良	Ｇ－５	網代痕あり
104	底部	茶褐色	角閃石、白砂、赤砂、黒砂含む	良	Ｇ－４	網代痕あり
105	底部	茶褐色	角閃石、白砂、金雲母、赤砂含む	良	Ｅ－４	網代痕あり
106	底部	明茶褐色	細白砂、金雲母、石英を含む	良	Ｅ－５	木葉痕あり
107	底部	灰茶褐色	細白砂、赤砂少量、金雲母、石英を含む	良	Ｅ－５	木葉痕あり
108	底部	茶灰色	白砂、赤砂、金雲母含む	良	Ｅ－３	木葉痕あり
109	底部	黄茶褐色	細白砂、赤砂、石英を含む	良	Ｆ－５	木葉痕あり
110	底部	茶黄色	白砂、黒砂含む	良	Ｇ－３	
111	底部	明茶褐色	白砂、赤砂、角閃石、金雲母含む	良	Ｇ－４	
112	底部	茶黄色	白砂、赤砂含む	良	Ｅ－３	
113	底部	茶黄色	白砂、角閃石、茶砂、金雲母含む	良	Ｆ－４	

第２表　横堀遺跡出土特殊遺物・縄文土器一覧

No.	器　種	色　調	胎　　土	焼成	出土位置	備　　考
1	土製円盤	明茶褐色	細白砂、角閃石含む	良	Ｇ－５	
2	土製円盤	暗茶褐色	細白砂、角閃石、少量の赤砂、金雲母	良	Ｄ－５	
3	土製円盤	灰茶褐色	細白砂、砂、少量の角閃石	良	Ｆ－３	
4	土製円盤	灰茶褐色	細白砂、少量の角閃石を含む	良	Ｆ－４	
5	把手？	明茶褐色	細白砂、金雲母含む	良	Ｇ－４	
6	土製品？	暗茶褐色	細白砂、少量の角閃石を含む	やや軟	Ｇ－５	
7	土製スプーン	黄茶褐色	細白砂、金雲母、角閃石含む	良	Ｄ－３	
8	ミニチュア土器	暗赤黒褐色	細白砂、角閃石含む	良	Ｅ－０	弥生時代中期中葉
9	壷？	赤茶褐色	細白砂、角閃石、石英含む	良	Ｇ－５	弥生時代中期中葉。10と同一個体
10	壷？	茶褐色	細白砂と、小粒の砂、少量の角閃石と石	良	Ｆ－３	弥生時代中期中葉。９と同一個体
11	甕？	茶褐色	細白砂、金雲母、角閃石含む	良	Ｄ－５	弥生時代中期中葉
12	深鉢	茶褐色	細白砂、金雲母、角閃石を含む	良	Ｇ－４	縄文時代後期。突起・円孔あり

3．石器

本遺跡から出土した石器は黒曜石製の石器が石錐１点、楔形石器４点、抉り入石器２点、二次加工ある剥片２点、微細剥離のある剥片５点、剥片７点、砕片１点、石核１点、粘板岩・砂岩製などの石器は打製石斧９点（内完形６点、破損品３点)、横刃形石器１点、礫器７点、敲石２点、磨石１点、台石２点（両者は接合)、微細剥離のある剥片６点、剥片６点の合計57点である。ここでは、個々の石器の記載を行なう。

黒曜石製の石器（第26・27図）

石錐（第26図―１）；打面の破砕した剥片を縦方向に使い、急角度の調整を両縁部全体に施して細長い紡錘形に仕上げている。素材剥片の主剥離面には先端部と両縁部中央付近に階段状剥離が部分的に見られる。また、先端部背面側に磨り面が見られ（網点部分)、先端部の使用に伴う磨耗と思われる。

楔形石器（第26図―２・３）；２は旧石器時代に見られる彫器の削片状の剥片を素材とし、長軸の両端部に両極打撃による剥離が見られる。正面右側縁部の小剥離は素材時のものである。図示しなかったがこの他に楔形石器は２点ある。

抉り入石器（第26図―４・７）；４は横長剥片の打点側に大きく一枚の剥離で抉り部を形成したもので、抉り剥離と主剥離の形成する縁部両面に微細剥離が連続して見られる。７は剥片端部を主剥離面側から加撃し、一枚の大きな剥離で抉り部を形成している。抉り部に微細剥離が集中する。また、主剥離面側には打面およびその周辺以外の部分に階段状の比較的大きな剥離が連続する。主剥離面のバルブ上にはパンチ痕跡が数カ所見られ、おそらく新たな抉り剥離の形成を意図したものであろう。素材は自然面打面。

二次加工ある剥片（第26図―５・６）；５は縦長剥片の端部に円弧を描く刃部を連続する小剥離で形成したもので、形態的には掻器としてよいものである。左右両縁部にも微細剥離が見られる。６は寸づまりの縦長剥片の打点側を折り取る加工と、剥片端部の一部には両面に加工が見られる。折断面には微細剥離が見られ、抉り入石器としての使用も考えられる。

微細剥離のある剥片（第26図―８・９）；８は縦長剥片の正面右縁部の打点側に微細剥離が連続する。９は両極打撃により破砕した石核を利用しており、図の裏面左縁辺に微細剥離が見られる。図示しなかったが微細剥離のある剥片はこの他に３点ある。

石核（第27図―10)；打面を90度転位させながら、打面と剥離作業面を入れ替えながら剥片剥離を進めている。図左下面のような比較的大型の剥片も剥離している点注目される。

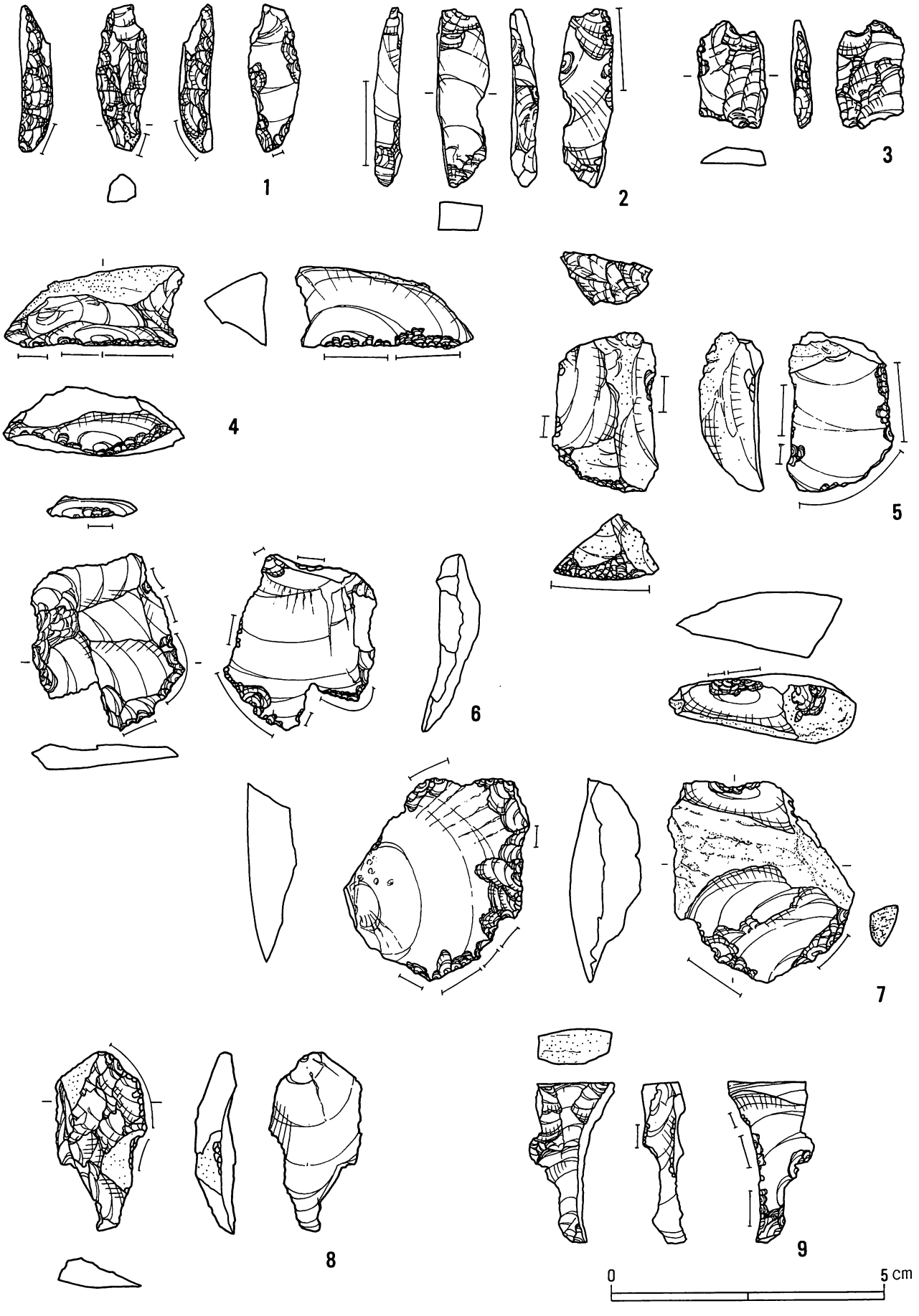
粘板岩・砂岩製等の石器（第28～35図）

打製石鍬（第28図、第29図―17・18・20)；11は寸づまりの短冊形、12～16は先端側が開く撥形である。14～16は先端刃部に１～２枚の大きな剥離で抉り状の刃部を形成し、先端刃部の両端が突出するような形態を形成している。17・18・20は短冊ないしは撥形の一部と思われる。石材は黒色の粘板岩と砂岩である。

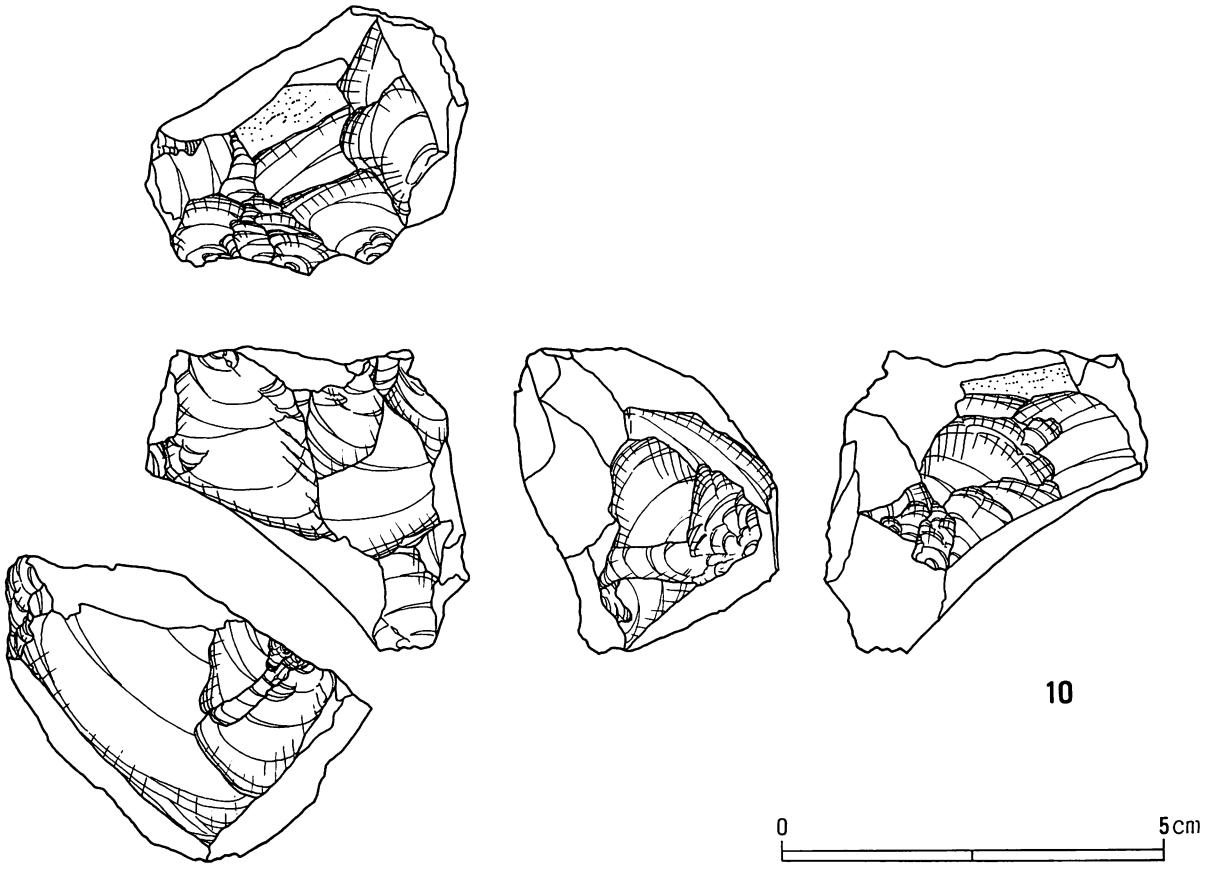
横刃形石器（第29図―19)；粘板岩の大型で比較的薄い四角形状の剥片の一辺に、刃部に平行した方向の線状痕が集中する部分（網点部分）が見られる。加工はこの辺には見られず、左右両辺に比較的大きな剥離、刃部と反対縁部の主剥離面に小規模な剥離が連続する。第33図―38・39は同一母岩の剥片であり、この石器の調整剥片と思われる。38は側縁部側、39は刃部側の調整剥片の可能性がある。

礫器石器（第30図―24・26・27、第31・32図)；円礫ないし礫辺の一端に40度前後の鋭い縁部を形成したもの（第30―24・26・27、第32図―30）と、石核状を呈し60～90度の鈍角の縁部をもつもの（第31図、第32図―31）の２種類が見られる。後者は刃部が複数の辺に見られる。潰れ状の微細剥離が縁部に見られることや剥離されたはずの剥片が調査範囲に見られないことから礫器と分類した。30が花崗岩である他は粘板岩製。

微細剥離のある剥片（第29図―21～23、第30図―25、第33図―32・33)；砂岩剥片の縁部に微細剥片が見られるもの（第29図―21～23、第33図―32・33)、粘板岩製打製石鍬の調整剥片の端部に微細剥離が見られるもの



第25図　出土石器（1）



第26図　出土石器（2）

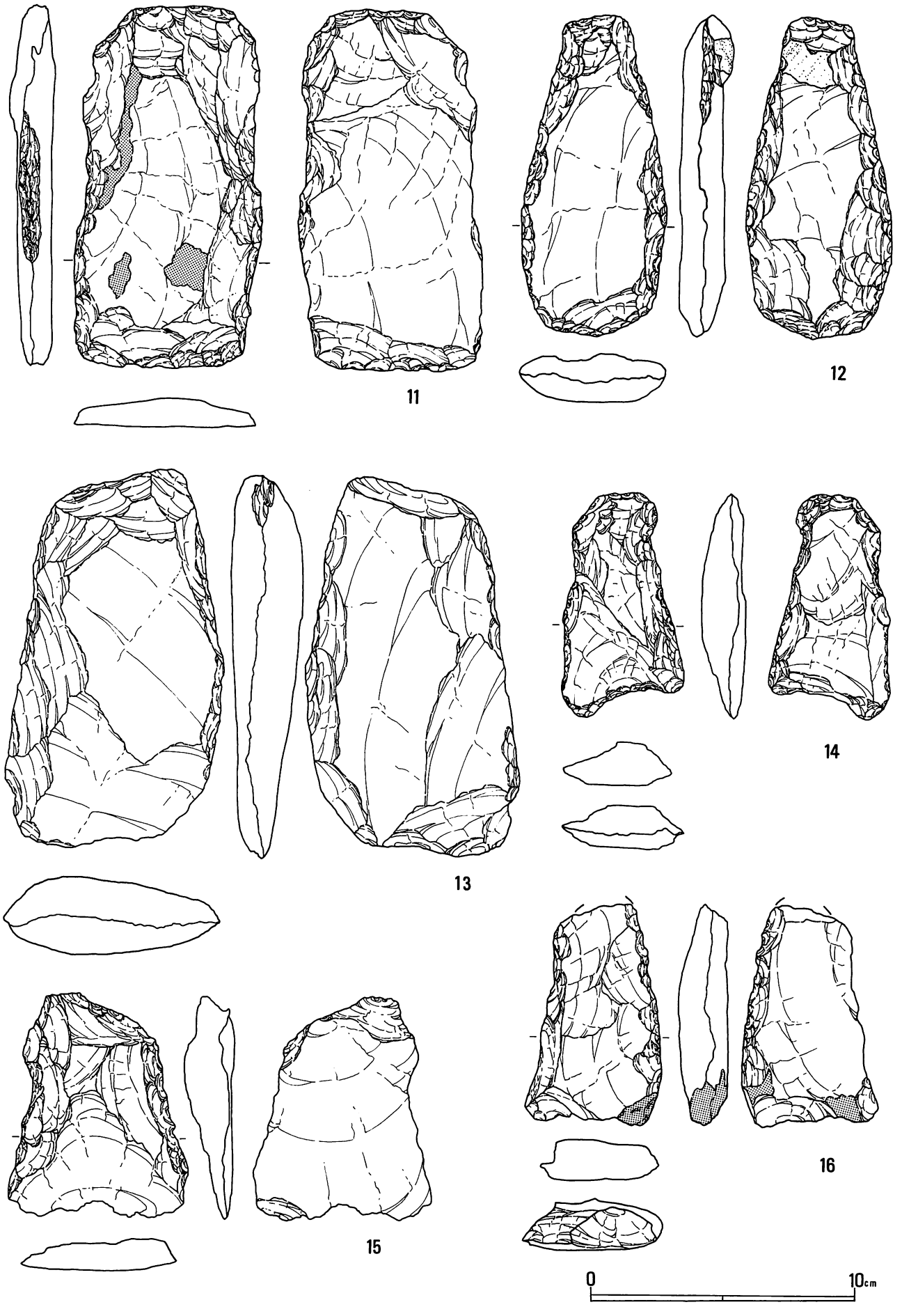
（第30図―25）がある。22の剝離面中央に磨耗痕が両面に明瞭に認められる。中央の突出した部分であり、着柄の可能性もある。

敲石（第34図―40・41）；40は砂岩円礫の一端を折り取るようにして平坦な面を形成し、その周縁部を敲打している。また、砂岩円礫の稜線部分にも一部に敲打痕が見られる。41は円礫の稜線上の2カ所に敲打痕が見られる。

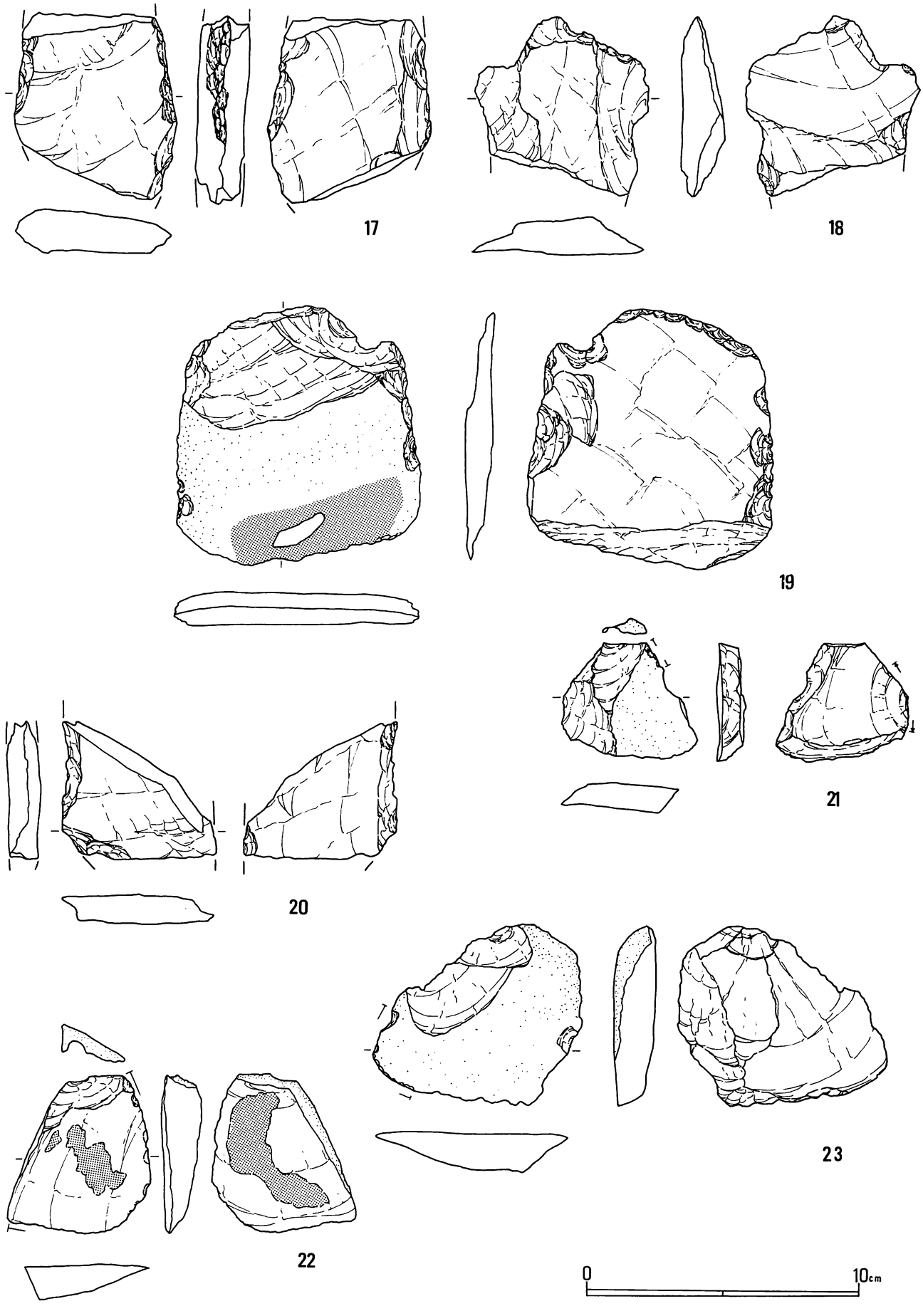
磨石（第34図―42）；砂岩の板状の河川礫をいくつかに分割したものを素材とし、2面ある自然面に磨り面を形成している。周囲の面はすべて分割面である。磨り面は自然面の片側に片寄って分布し、図裏面の磨り面右縁辺には敲打痕が見られる。試掘時に出土。

台石（第35図）；礫岩の巨大礫を2つに分割し、それぞれの鋭角の縁部に剝離作業を行なって礫器状の刃部を形成した石器である。非常に大型であり、通常の礫器ではない。固定した状態で、加工対象物を刃部に打ち当てるような作業が想定される。両者は約10m離れた位置にあるが、礫器状に加工したおりの剝片が出土しておらず、調査区以外の場所で分割され加工された後に調査地点に持ち込まれたものと推定される。

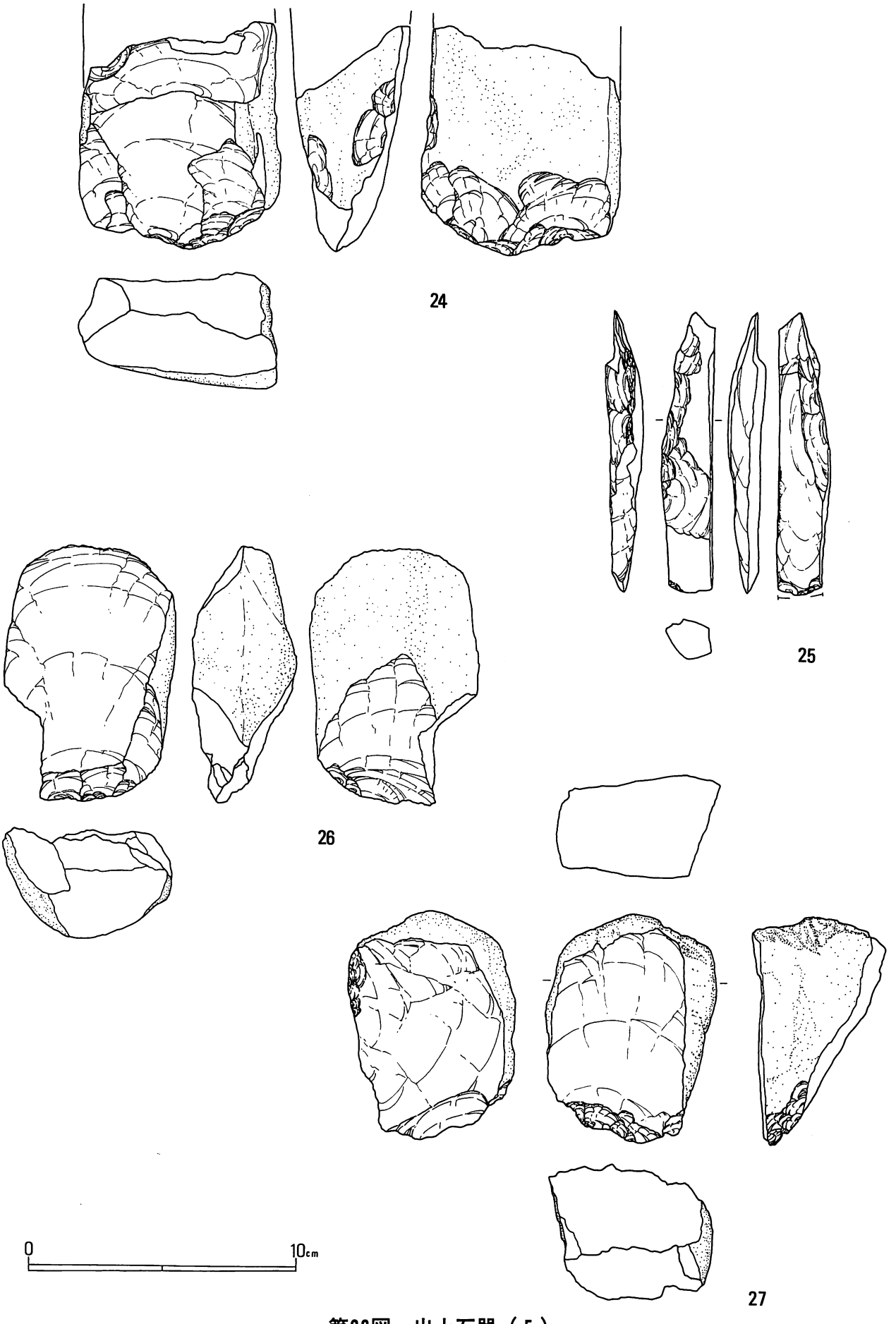
剝片（第33図―34～39）；砂岩製品で削片状に細長い剝片が3点見られる（34～36）。あるいは楔的な使用目的が想像される。37は粘板岩製の打製石鍬の調整剝片である。38・39は横刃形石器の調整剝片で、第29図―19と同一母岩である。



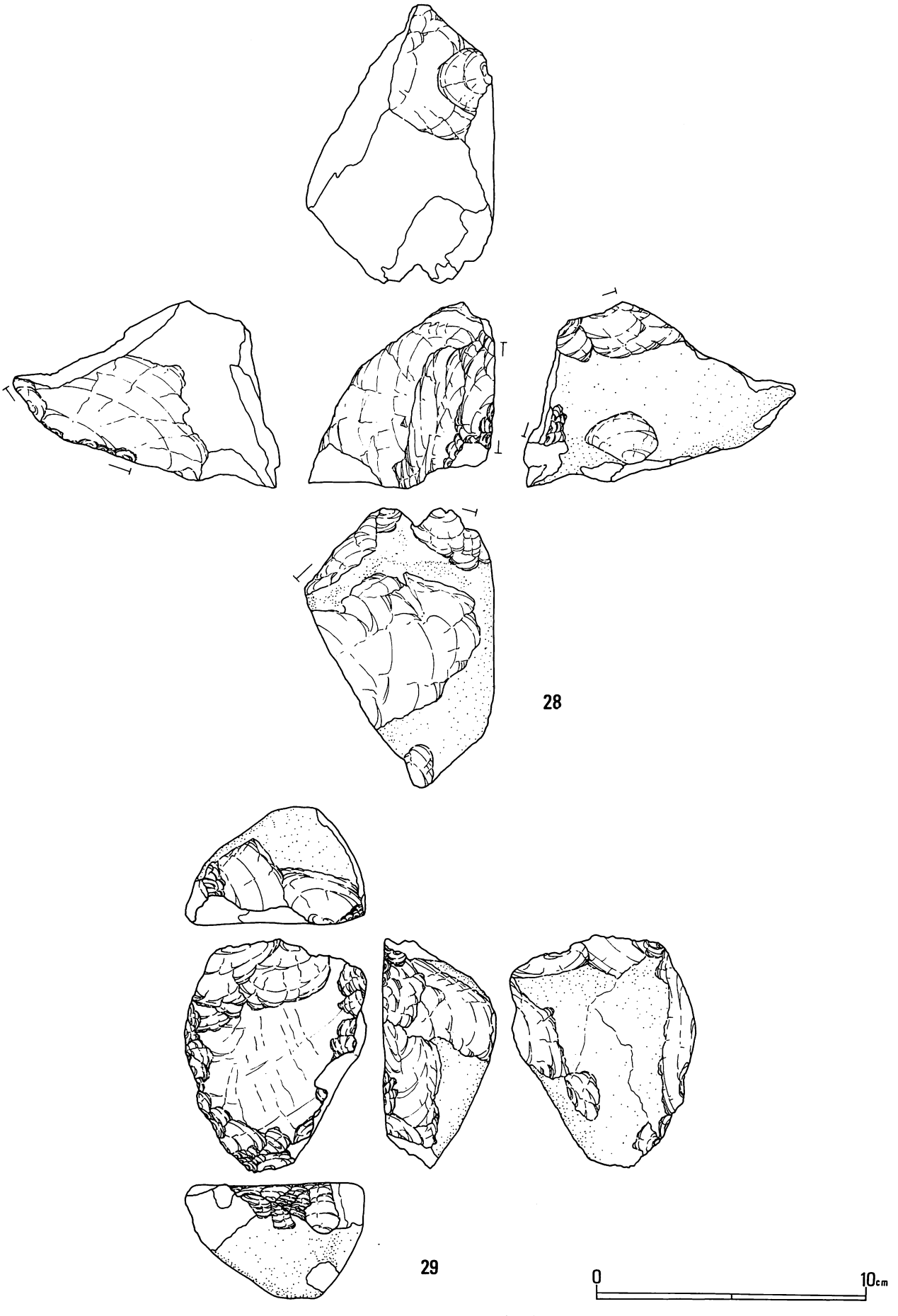
第27図　出土石器（3）



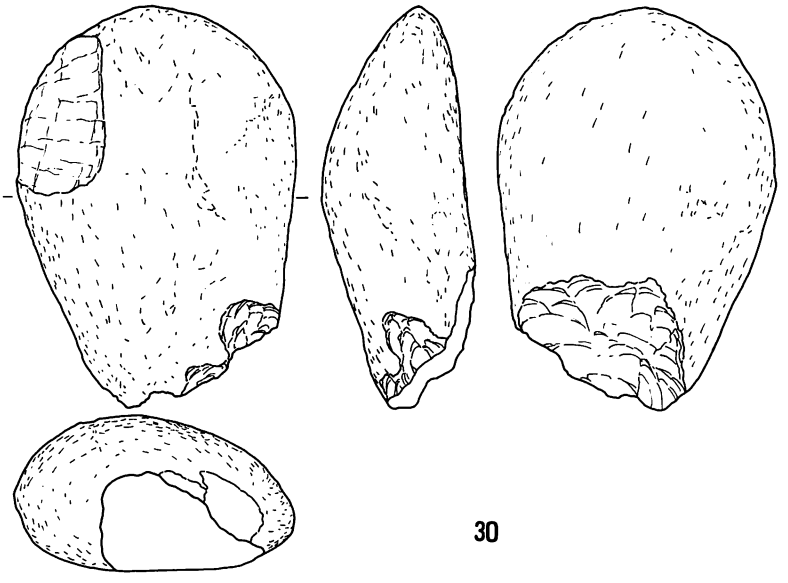
第28図　出土石器（4）

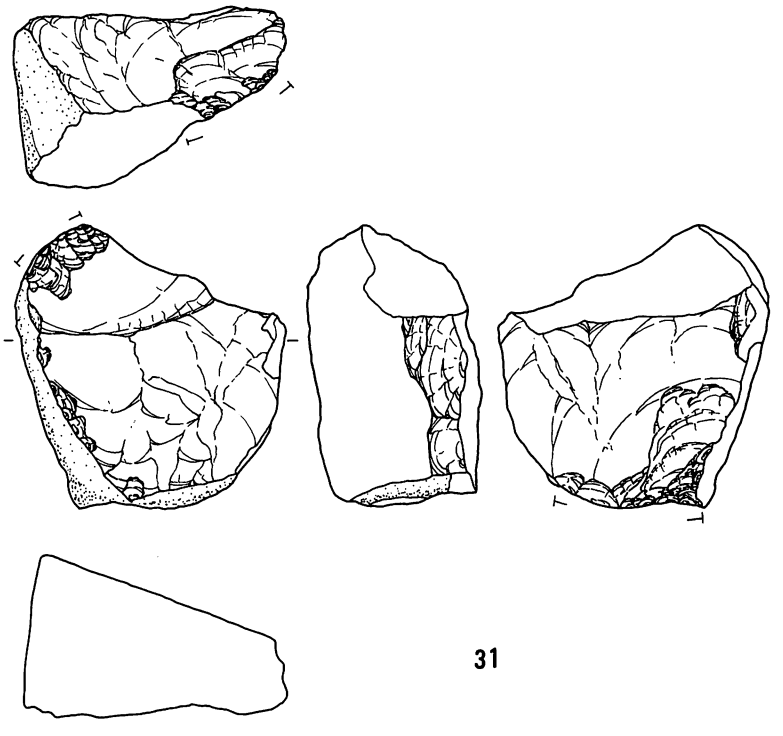


第29図　出土石器（5）



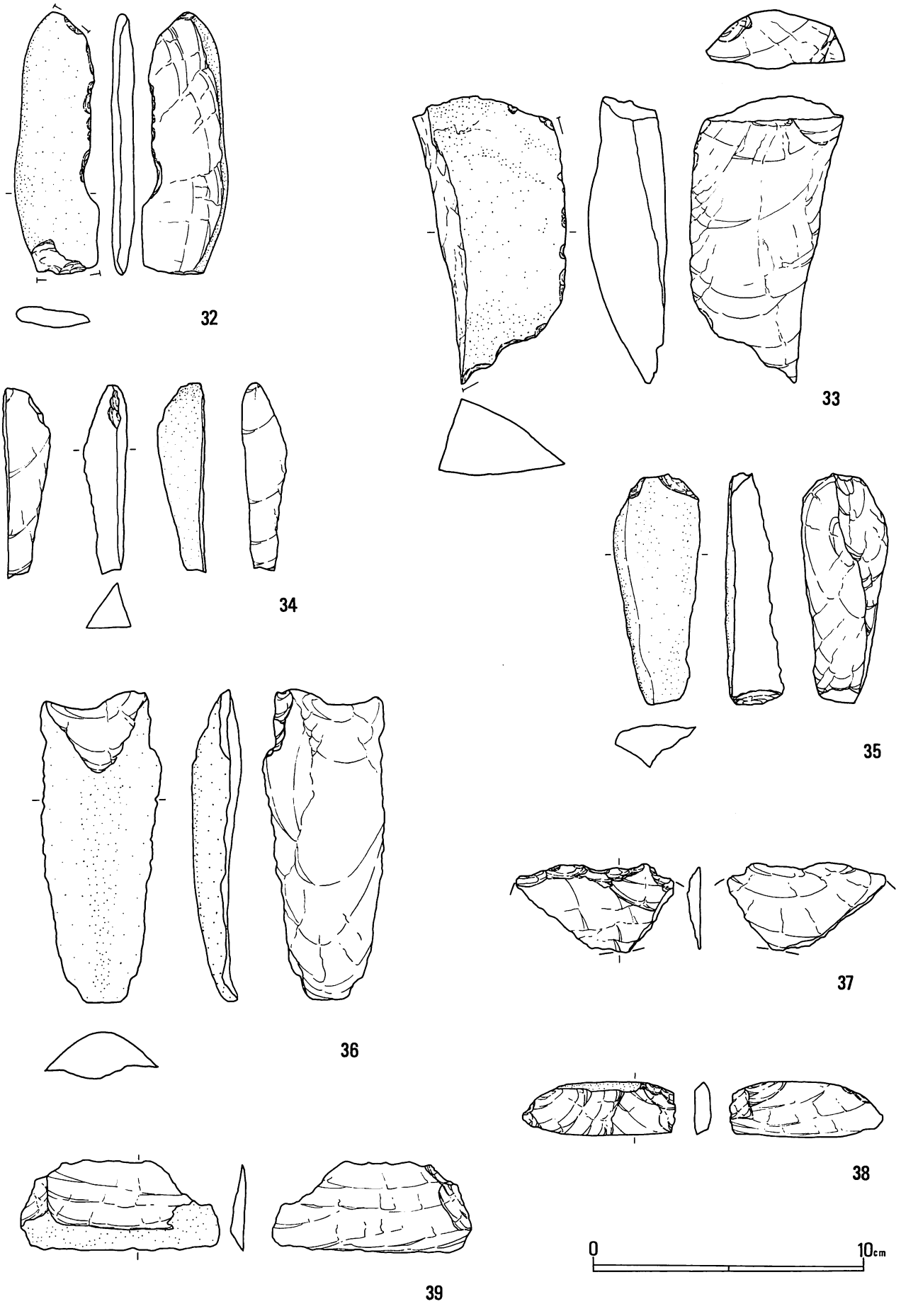
第30図　出土石器（6）



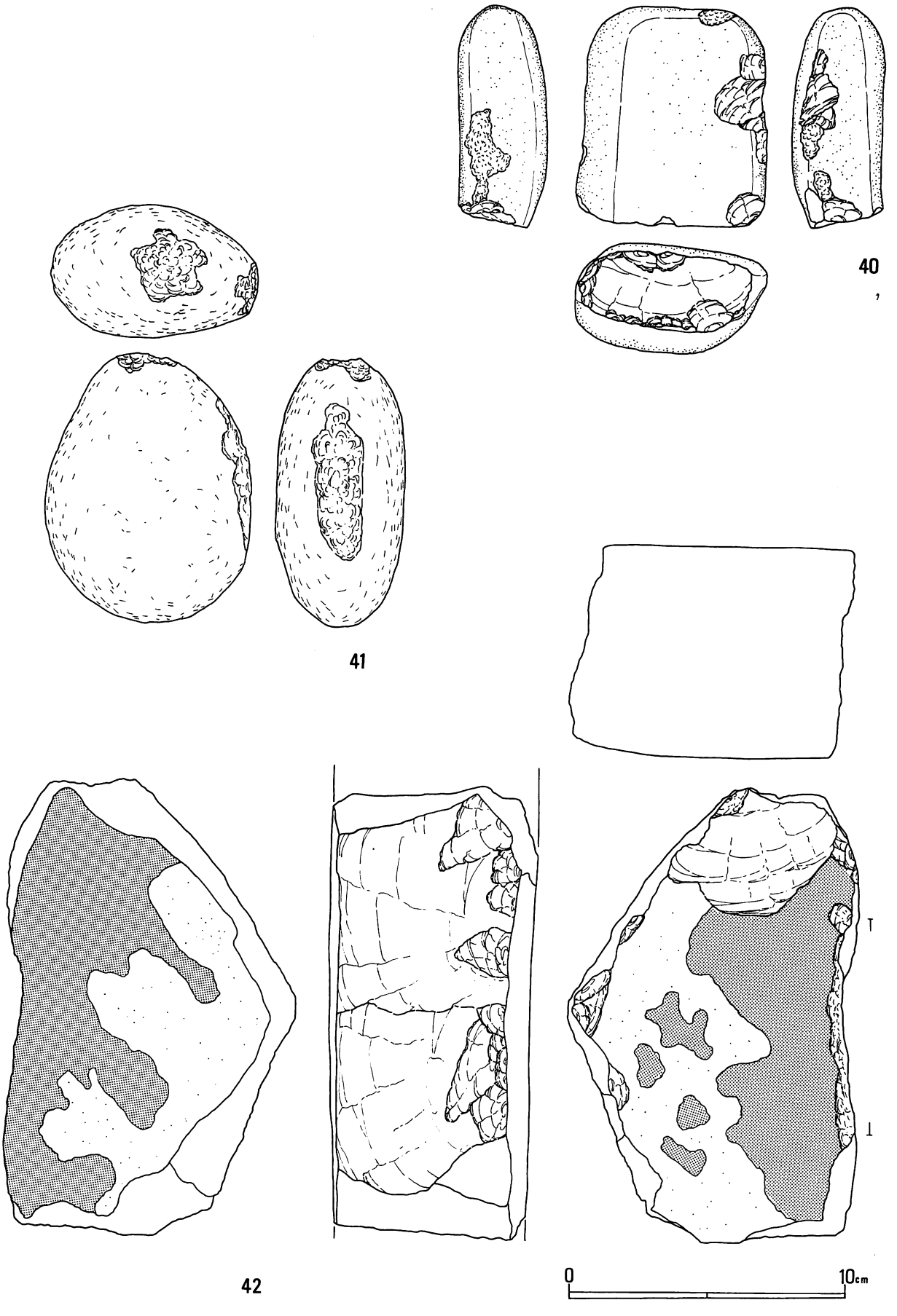


0 10cm

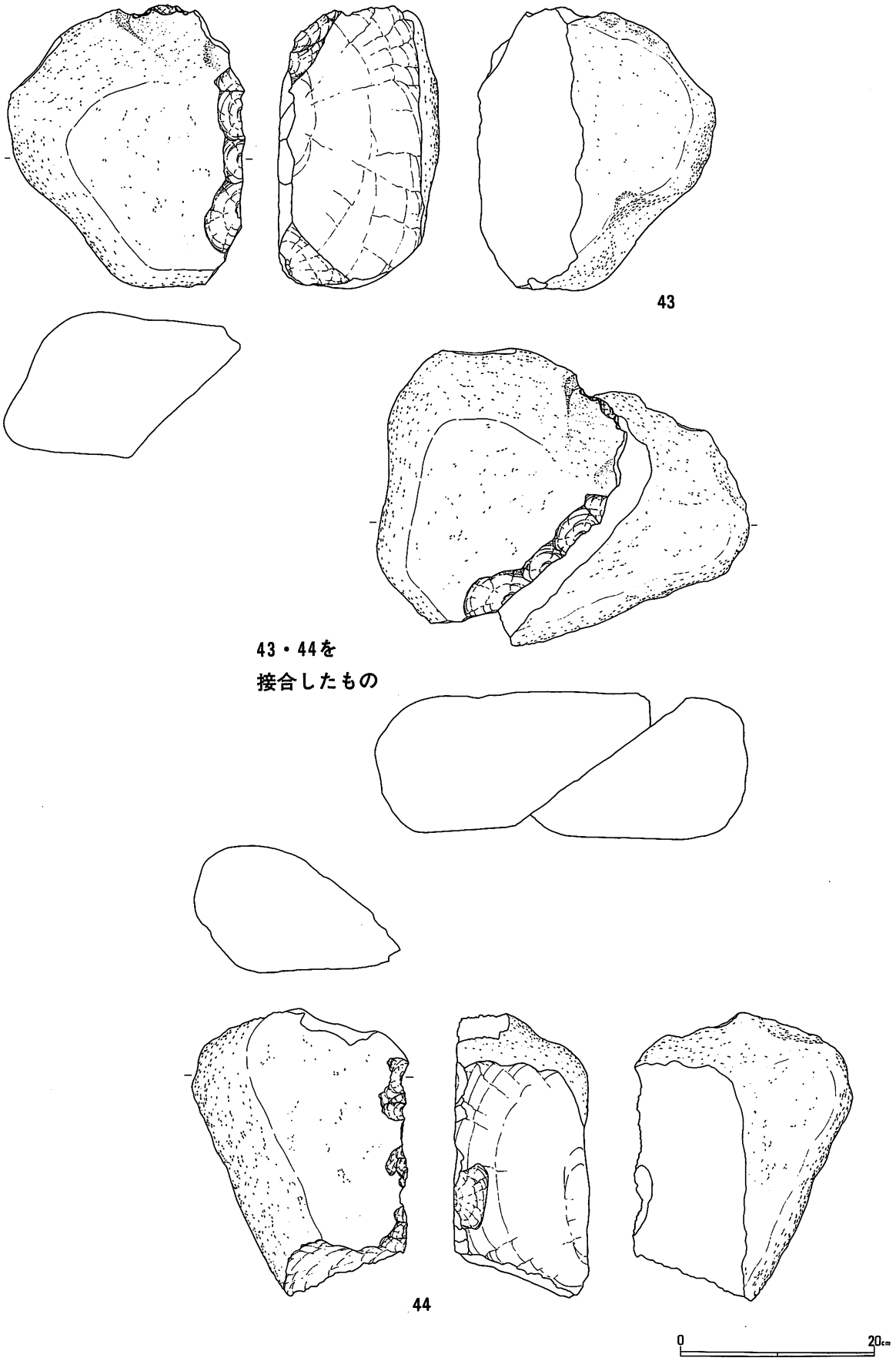
第31図　出土石器（７）



第32図　出土石器（8）



第33図　出土石器（９）



第34図　出土石器（10）

第4章　総括

本遺跡からは、以上のように2,000点あまりにのぼる縄文時代晩期最終末～弥生時代前期にあたる条痕文土器片・石器が発見され、その他にもごくわずかであるが弥生時代中期中葉に属すると考えられる土器片も数点確認され、縄文時代後期の土器片も1点出土している。出土した土器の細別時期については、宮ノ前遺跡（韮崎市）の2号水田下層の土器群とほぼ同じ様相を示すもので、中部高地の編年では氷式の最も新しい段階に、また東海地方の編年では樫王式に位置付けられ、山梨県内の編年では宮ノ前1期（中山 1992）にあたる。土器の示す時期相としては、「縄文時代晩期最終末の浮線文土器群の中に条痕文土器が流入し混在する段階」～「前段階まで伝統的に継承されてきた深鉢・浅鉢を主体とする土器組成から、甕・壷を主体とする組成へと変化する段階」という範疇で押さえられるものと考えられる。器種構成的にも、深鉢と甕がほぼ拮抗する割合で見られ、また浅鉢が含まれている事もこの時期の特徴をよく表わしていると言える。

山梨県内でみられる条痕文期の遺跡については細かいものまで含めると70箇所あまりにのぼるが、遺構が確認されているものとしては、下大内遺跡（北巨摩郡明野村）の正位で埋設された壷を伴う土坑や、寺所遺跡（北巨摩郡大泉村）や中村道祖神遺跡（北巨摩郡明野村）、健康村遺跡（北巨摩郡長坂町）などで発見された土坑がある。なお住居跡については、柳坪遺跡の他、上手沢遺跡（韮崎市）で前期に属する隅丸方形プランの住居跡が1軒発見されており、内部施設としては柱穴4基と地床炉が確認されている。時期はやや下るが中期中葉では牛石遺跡（都留市）で3軒の住居跡が確認されている。さらに視点を周辺地域にまで広げてみると、関東地方・東海地方においても住居跡が集中するような集落跡は発見されておらず、主として土器棺墓から構成される墓域が発見されるにとどまっている。以上のようにこの時期には人々の生活の痕跡を示す明確な遺構などはあまり発見されていないのが現状である。しかしながら掘りこみは確認できないものの、十五所遺跡（中巨摩郡櫛形町）のような、遺物や焼土・炭化物・赤色顔料の分布状況などから作業場のようなものを想定できるケースもある。では、横堀遺跡ではどんな暮らしが営まれていたのであろうか。

遺構については、人為的なものは全く発見されず、確認されたのは風倒木の痕跡と考えられる落ち込みのみであった。また遺物の分布をみると南北方向に帯状に連なる遺物集中帯が確認された。これら出土土器の接合関係をみるとグリッドを跨いで出土した土器片同士が接合しているケースが多くあるが、この遺物集中帯を境にして東側と西側とではその出土傾向が大きく異なっていることがわかる。すなわち、東区で出土しているものについてはこの遺物集中帯との間に接合関係が頻繁にみられるのに対して、西区では土器の出土量自体も少なく接合関係も見られない。またこの土器の分布傾向に石器の分布を加えてみると、西区には打製石鏃が多くみられるのに対して、東区には礫石器が多くみられるという傾向が読み取れる。この西区でみられる打製石鏃については、撥形のタイプと大形の短冊形タイプのものとで分布箇所が分かれていることも特筆できよう。また、黒曜石製の石器や剝片の出土数は全体で23点にのぼるが、そのうちのおよそ7割は遺物集中帯の中でも特に集中する遺物集中区にみられることがわかっている。一方、打製石鏃や礫石器の分布については、これとは全く逆で土器分布が希薄な部分に集中する傾向がある。また約11m離れて接合する台石状の大形礫は、土器・石器それぞれの集中区に重なることなく独自の配置をもっていることから、この大形礫が何らかの作業に使われていた可能性が強い。さらに焼土の分布状況については炉跡のようにある程度集中した焼土箇所は全く認められず、焼土粒という形で遺物を包含する厚さ40cmの黒褐色粘質土中に拡散した状態で均一に分布していることから、継続的に火を使った場所が存在した可能性は低いと言える。

これらの分布傾向を総合して当時の景観を復原してみよう。まず出土している土器片は細かいものばかりで、完形で出土したものは勿論、完形に復原できるような土器も全くみられなかった。また、土器片の多くは摩滅していたことから、しばらくの間風雨にさらされていた状態を想定できる。また、焼土についてもある一定の期間繰り返し火を使った様子を示すような集中箇所は全く見られず、覆土中に分散した状態で確認されたことなどとも考え合わせると、この場所が集落のような生活の主体となる場ではなかった事が推測される。では単なる遺物

包含層であったのだろうか？　これに石器の分布傾向を加えてみると、器種ごとに分布の偏りが見られることから単なる包含層としては片付けられないところがある。しかしながら、住居跡と考えられるような地面の掘りこみや、継続して火を使ったと考えられるような焼土の集中箇所は全く確認されなかったことから、継続的に人が暮らしていたという積極的な証拠は得られていないと言える。これらの事柄も含めて当時の景観を復元してみると、この場所は生活主体の場ではないながらも、当時の生活スペースの一部を担っていた場所だと想定する事ができる。具体的には、その出土状況などから割れた土器片や使わなくなった石器などの不用品が集められた場所であった可能性が考えられるのではないだろうか。おそらくは、集落跡のような〝住〟主体の生活の場は今回の調査地点の近辺に存在し、そのような生活主体の場と不用品の集積場を含む作業スペース的な場所とが有機的な関連を持ちながら、当時の生活が営まれていたものと考えられる。今回の調査で得られた知見は遺物出土状況に依らなければならないところが大きいため、土器・石器それぞれの分布状況から考えられる事をより深めてみたいと思う。まず土器の分布状況から言えることは、これら遺物の集中がほぼ一時期的に形成されたという点、土器の分布には偏りが見られるため、ここがひとつの空間としてのみではなく、廃棄が行なわれた空間を中心として、幾つかの機能的なスペースに分かれていたと考えられる点である。また、石器の分布状況から考えられる事は、①石鏃などの狩猟具が存在せず、黒曜石の剝片剝離は行なっているものの、石鏃等の素材の製作は行なっていない。弥生時代前期においても狩猟活動は存在したはずであり、生業活動の作業内容ごとに地点を違えて活動を行なっていた事が推定され、遊動的な生活形態が推定される。②他の同時期の遺跡には希薄な礫器が存在し、刃部角度の違う2種類の礫器が存在しており注目される。③同一母岩による2つの台石は設置して使用されたと思われるが、その作業空間が2ヵ所あり、両者の台石が接合する事からこれらの遺物分布がほぼ同時期的に形成され、この台石を中心とする作業空間についてもほぼ同時に設定されたものと考えられる。④おびただしい土器の量とともに黒曜石製石器の廃棄空間が存在し、清掃行動の存在が推定される。おそらく、この地点が遊動生活のなかで繰り返し利用されていたこと、またその過程で土器の使用場所や黒曜石製石器の製作、使用の場所が一定の空間に限定されていたことを示している可能性がある。といった事柄である。これらから想定できる事は、廃棄の場、作業の場という両者の性格を併せ持った空間である印象が強いと言える。また、自然科学分析からはこの辺り一帯の植生を示すデータが得られている。遺跡から出土した炭化材の多くはクリでそれに少量のクヌギが伴っているという。この結果からは、落葉広葉樹に囲まれた、遺跡周辺一帯の豊かな自然環境が目に浮かぶ。

横堀遺跡から出土した遺物が示す時代は、縄文時代から弥生時代への移り変わりの時期である。土器の器種構成には、縄文時代晩期からの深鉢の伝統と、弥生時代に入って出現する甕の共存が見られ、さらに弥生時代以降消滅する浅鉢も存在する。また石器組成については縄文時代以来使用されてきた器種のみで構成されており、弥生時代に至って出現する大陸系の磨製石器の類はまったく含まれていない。その一方で、この時期の遺跡から出現する石器の器種構成は遺跡ごとで較差が大きく（例えば、横堀遺跡からは他遺跡ではあまり見られない礫器が含まれており、石鏃は含まれていない。その一方で十五所遺跡からは石鏃が出土しているなど）、縄文時代の遺跡にみられるように、量の差こそあれ、ある程度同じような器種がどの遺跡からも同じように出土する状況とは大きく異なっている。このように土器・石器それぞれの内容から、縄文的要素と弥生的要素の両者を抽出する事ができるという点でも、縄文時代から弥生時代へというこの時期の特徴をよく示していると言えよう。

今回の調査によって得られた結果から多くを語ることは難しいが、少なくともこの土地で暮らしていた人々の生活の一端を垣間見ることができたと言える。しかしその一方で、大きな疑問も生じる。県内周辺でみられる該期の遺跡のあり方として多いのが、遺物が分布するのみで遺構がみられないというパターンであるが、果たしてこのような遺跡の全てを今回想定したような性格に当てはめられるのかということである。これまでの調査のいきさつからすれば、今までの調査地以外の場所にこそ集落跡が存在するという可能性は低いと言えよう。となると、明確な遺構が発見されない遺跡の中にも集落跡のような性格が潜んでいることもあり得る。見方を変えれば、従来いわれているような“地面に痕跡を残さないような住居跡”―すなわち遊動的な生活―が該期の特徴である、ということにもなるが、今回の調査では残念ながらこの疑問に対する有効な手がかりを得る事はできなか

った。

近年、山梨県内では扇状地という白根町と同じような地理的条件下において条痕文期の遺跡が発見されるようになってきているが、今後このような事例がさらに増加し、より条件のよい遺跡での遺物分布に関する分析が行なわれる事により、これまで闇に閉ざされていたこの時期の人々の暮らしが次第に明らかになっていくことであろう。

≪引用・参考文献≫

中山誠二　1985「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要２』
中巨摩郡文化協会郷土研究部　1988『中巨摩郡地名誌』
白根町教育委員会　1989『将棋頭遺跡・須沢城址』
山梨県教育委員会　1989『金生遺跡II（縄文時代編）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第41集
韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会　1992『宮の前遺跡』
中山誠二　1992「宮ノ前遺跡出土の縄文時代晩期末葉から弥生時代中期初頭の土器群」『宮ノ前遺跡』
中山誠二　1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題　―時間軸の設定―」『研究紀要９』
西秋良宏　1994「旧石器時代における遺棄・廃棄行動と民族誌モデル」『先史考古学論集３集』
保坂康夫　1999「御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地　―中部横断自動車道の試掘調査の成果から―」『研究紀要15』

附　編　横堀遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横堀遺跡では、縄文時代晩期最終末～弥生時代中期の条痕文土器や打製石鏃などの遺物が出土している。また、これらの土器が出土した遺物包含層の水洗選別により、炭化材の細片も検出されている。

本報告では、遺物包含層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行い、堆積物の年代を明らかにする。また、炭化材の樹種同定を行い、古植生等に関する資料を得る。なお、炭化材が少量であったため、放射性炭素年代測定は加速器質量分析法（ＡＭＳ法）で行う。

１．試料

試料は、遺物包含層から出土した炭化材15点である。このうち、放射性炭素年代測定は、C-10の１点について行い、樹種同定は全点について行う。

２．方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は、株式会社地球科学研究所を通じて、米国ベータ社で行った。

（２）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

C-10の炭化材の放射性炭素年代測定値は、2000±40y.B.P.（beta-140822）である。δ13C/12Cは－12.0‰であり、同位体補正年代値は1960±40y.B.P.を示す。

（２）樹種同定

結果を表１に示す。炭化材はC-12が、道管を有することから広葉樹材であることは確認できたが、保存が悪く種類の同定には至らなかった。その他の炭化材は、全て落葉広葉樹で、２種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。

表１　樹種同定結果

地区	試料名	樹　　種
F－3グリッド	C－1	クリ
	C－2	クリ
	C－3	クリ
	C－4	クリ
	C－5	クリ
	C－6	クリ
	C－7	クリ
	C－8	クリ
D－1グリッド	C－1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	C－2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	C－3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	C－4	広葉樹
E－3	微細図７下	クリ
	トレンチ11内	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、１～２細胞幅、１～15細胞高。

４．考察

（１）年代について

炭化材の年代は、補正年代で1960±40BPであった。炭化材が得られた包含層からは、条痕文土器が多数出土している。条痕文土器は、東海地方の縄文時代晩期最終末～弥生時代中期頃にかけて広がる土器群である。測定を行った炭化材は、土器を埋積している包含層の水洗選別によって得られたものである。破片が塊状に出土していることから、その場にあった土器が割れている可能性がある。一方炭化材については、土器を埋積した土壌と共に本地点に運ばれてきた可能性もある。そのため、炭化材は土器よりも新しい時期の可能性がある。以上の点を考慮すると、今回の測定値は、弥生時代中期の年代に一致しており、条痕文土器の推定年代とも調和的といえる。

今後、土器に付着している炭化物などについても年代測定を行い、より詳細な時期を明らかにしたい。

（２）古植生について

３・４グリッド地区の炭化材は全点がクリ、１・２グリッド地区の炭化材は種類不明の１点を除く全点がクヌギ節に同定された。この結果から、縄文時代晩期最終末～弥生時代中期頃にかけて、本遺跡周辺ではクリやクヌギ節等の落葉広葉樹が生育する植生が見られたと考えられる。

炭化材の年代測定では、１・２グリッド地区の炭化材が弥生時代中期頃の可能性があるが、３・４グリッド地区については年代測定を行っていないため詳細は不明である。これまで県内で行われた調査では、縄文時代の炭化材にクリが多いことが明らかとなっている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993；植田、1997；未公表資料）。一方、弥生時代の炭化材については、ほとんど調査例がないが、関東地方の調査例では、クヌギ節・コナラ節を主とする古墳時代に似た種類構成が確認されている（高橋・植木、1994）。このことを考慮すると、地区による種類構成の違いは、各炭化材の堆積時期による植生や用材選択の違いを示している可能性がある。

ところで、クリは縄文時代の植物食糧としても重要な種類であり（粉川、1983）、果実の安定した収量を確保するために栽培されていたことが推定されている（千野、1983）。現在栽培されているクリは、９年生～10年生以後から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は年毎に収量が減少する（志村、1984）。このことから、若木を果実確保のために保護・管理し、老木を伐採して用材として利用した可能性が考えられている（千野、1983）。山梨県内でも、多くの縄文遺跡でクリが出土していることから、クリ栽培が行われていた可能性がある。しかし現時点では詳細は不明であり、今後さらに調査を行って詳細を明らかにしたい。

引用文献

千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　―南関東地方を中心に―．東京都埋蔵文化財　センター研究論集，II，p.25-42.

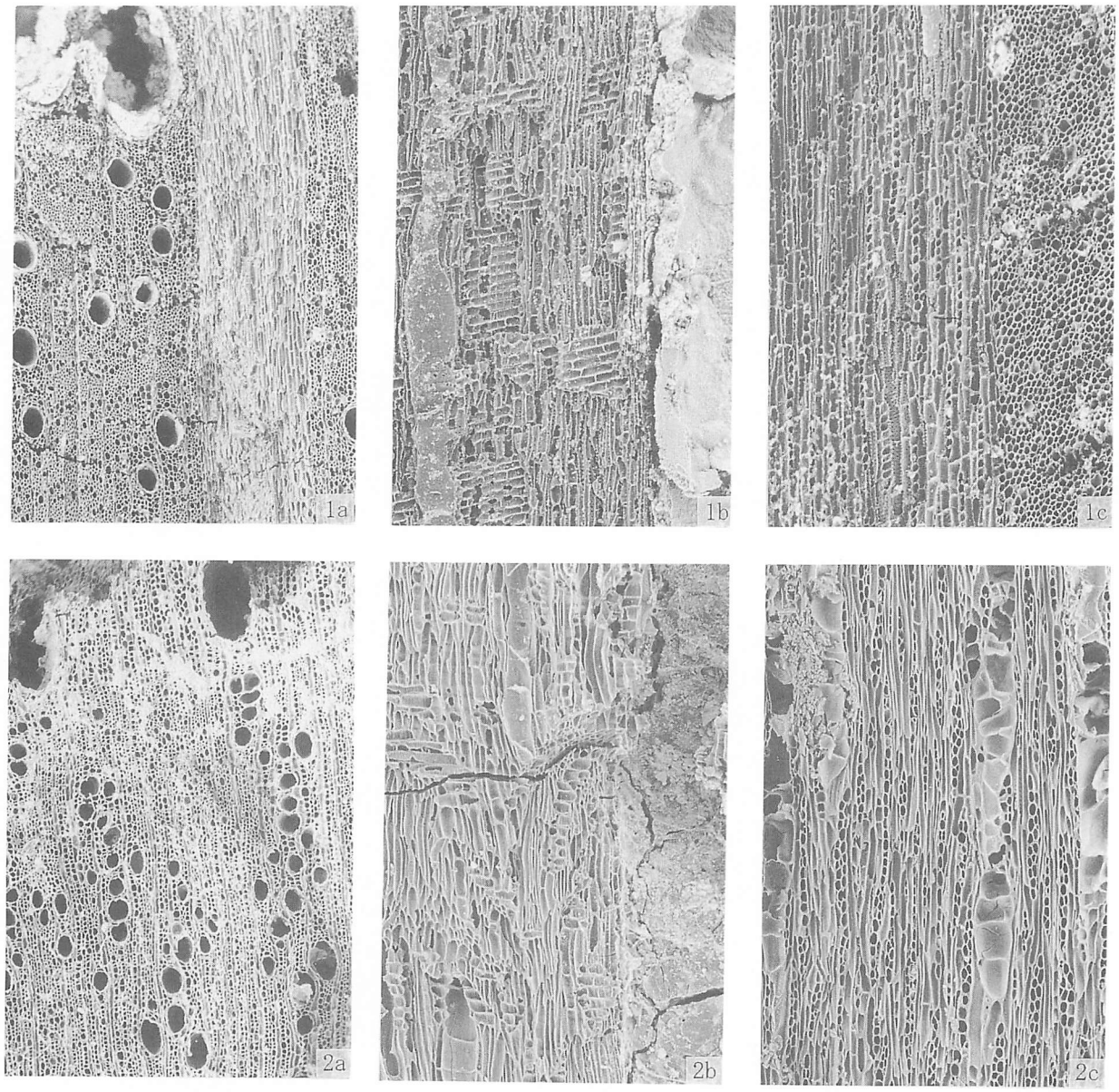
粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究２　生業」，p.42-49、雄山閣.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）上北田遺跡から出土した炭化材および炭化種子の同定.「山梨県北巨摩郡白州町　上北田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.1-5、白州町教育委員会・狭北土地改良事務所.

志村　勲（1984）クリの生育特性.「農業技術体系　果樹編５　クリ基礎編」，p.11-16，社団法人農山漁村文化協

会.
高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択．PALYNO, 2, p.5-18, パリノ・サーヴェイ株式会社.

図版１　炭化材

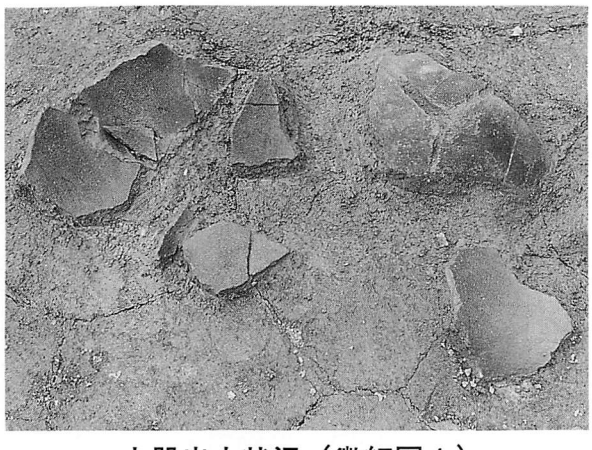


１．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（C-9）
２．クリ（C-8）
　a：木目、b：柾目、c：板目

写　真　図　版

調査区南側をのぞむ

調査区南壁

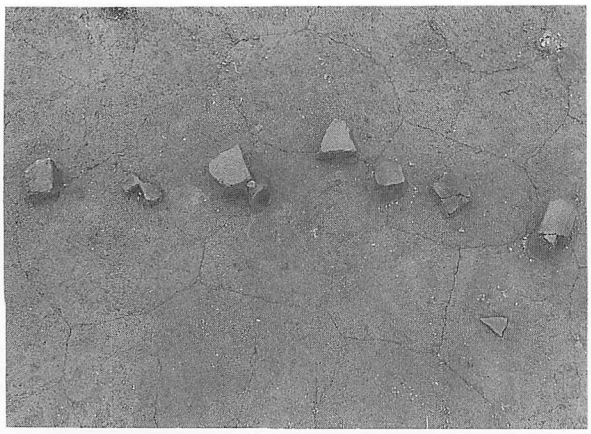


土器出土状況（微細図１）

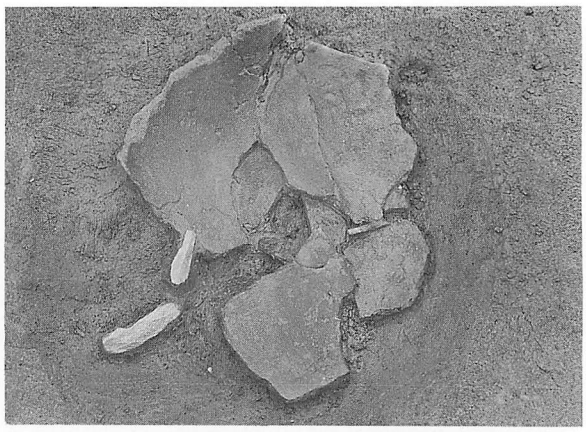
土器出土状況（微細図２）

土器出土状況（微細図３）

土器出土状況（微細図５の一部）

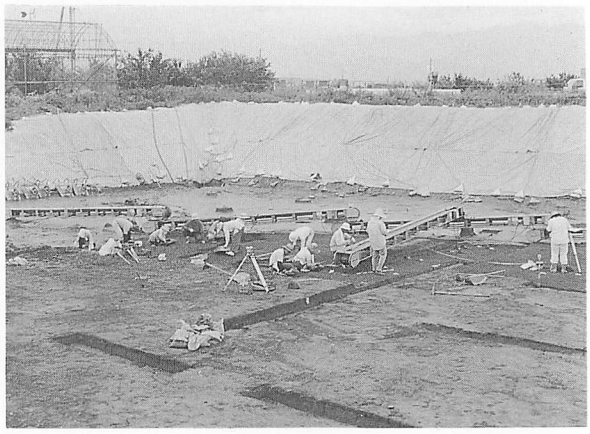


土器出土状況（微細図６）

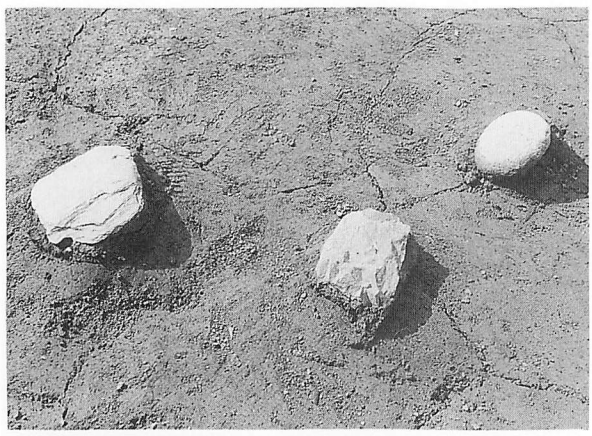


土器出土状況（微細図７）

土器出土状況

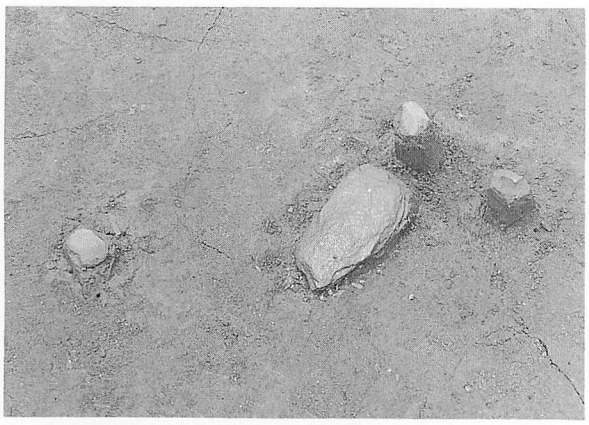


調査風景

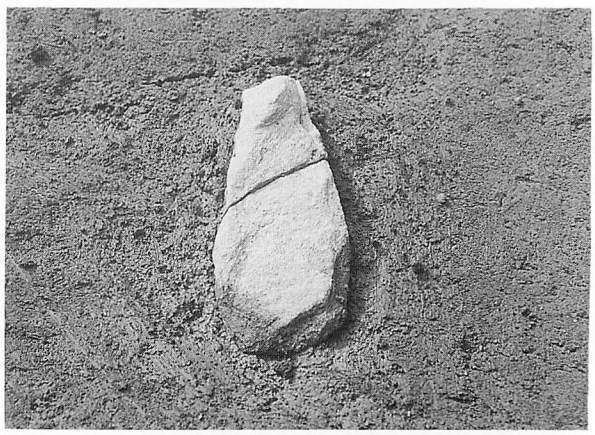


石器出土状況（微細図４の一部）

石器出土状況（微細図４の一部）

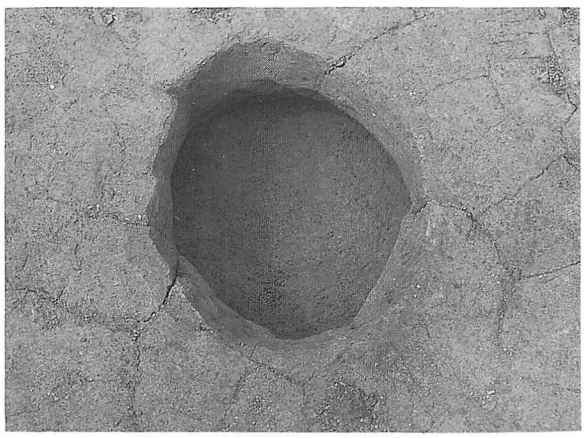


石器出土状況



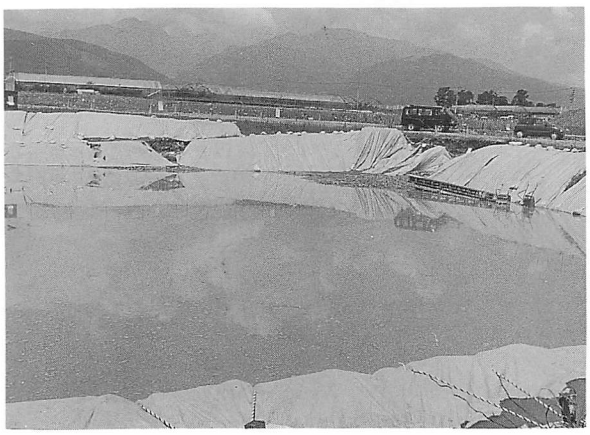
石器出土状況

土器出土状況



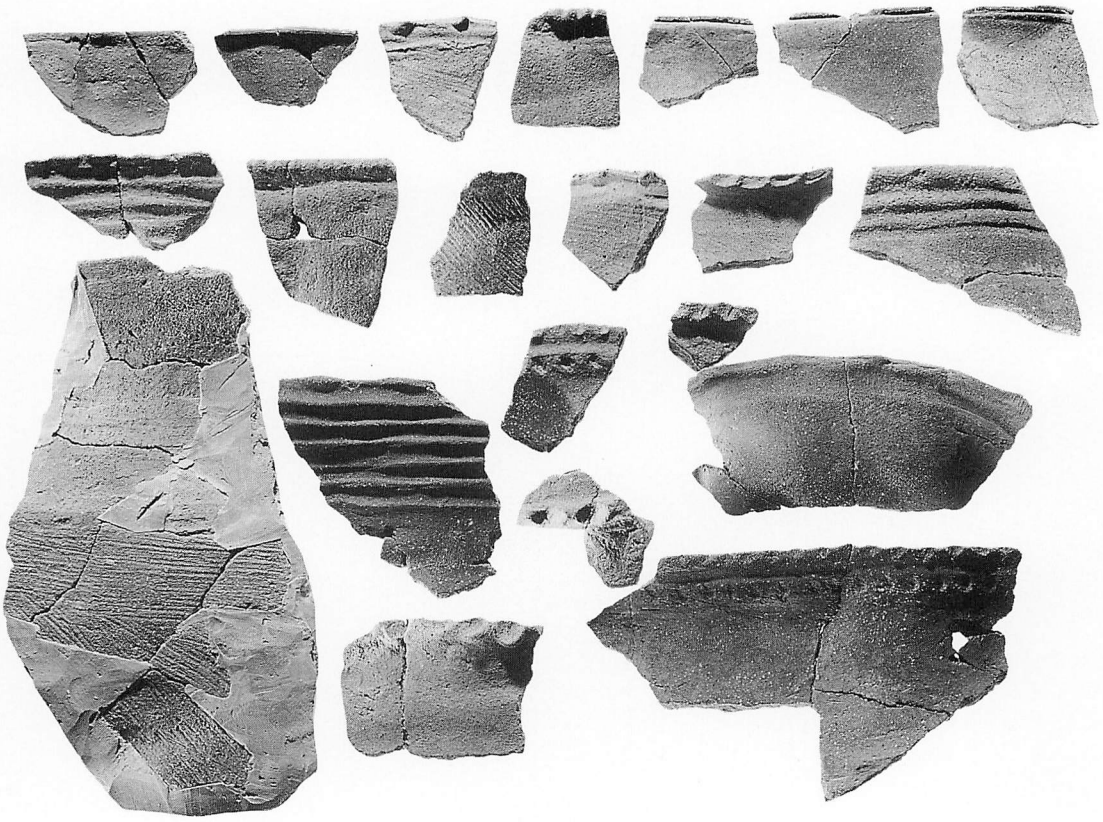
第１号土坑　完掘状況

壁面セクション図作成作業

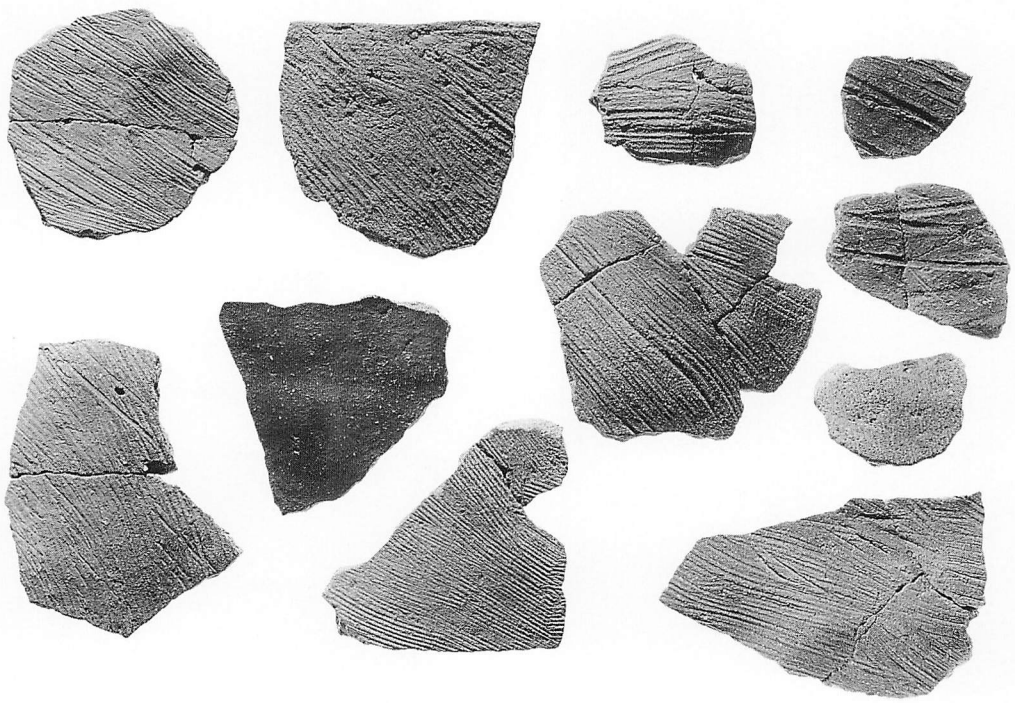


調査区風景

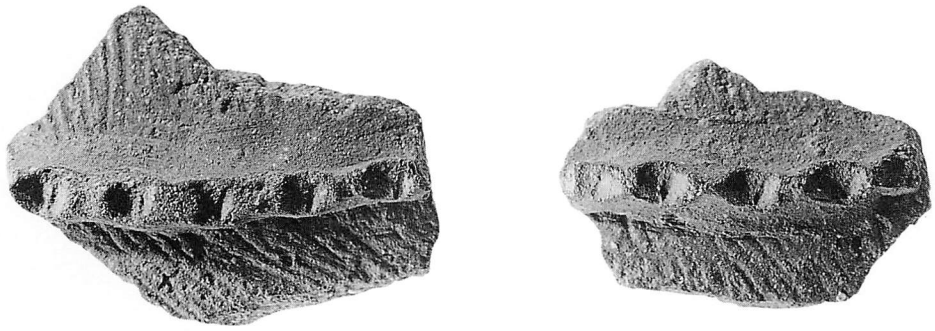
調査風景



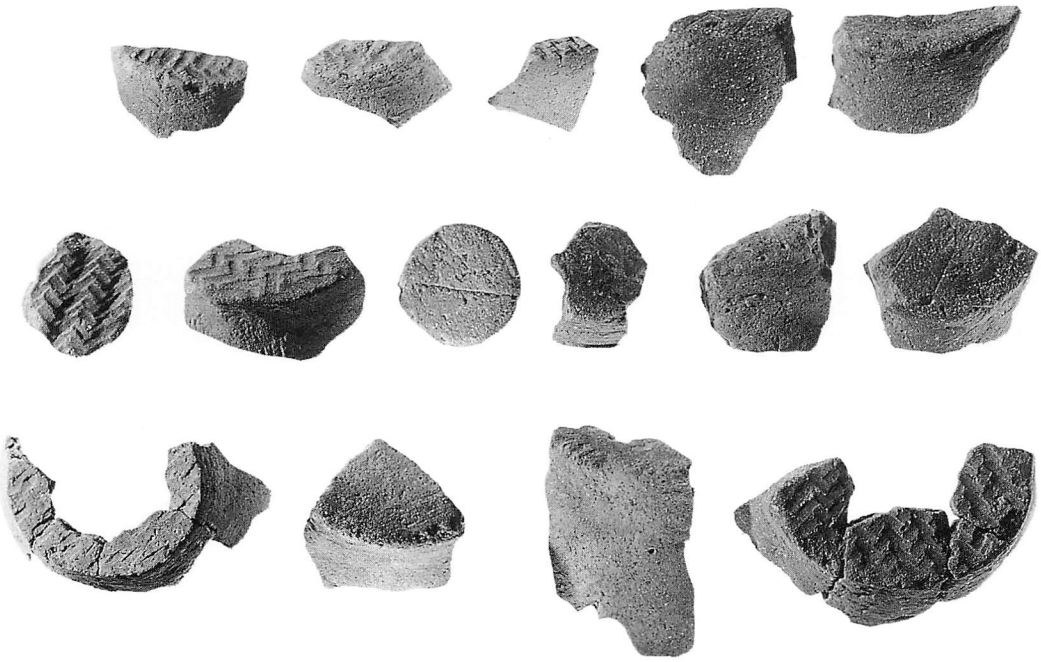
条痕文土器口縁部集合



条痕文土器集合

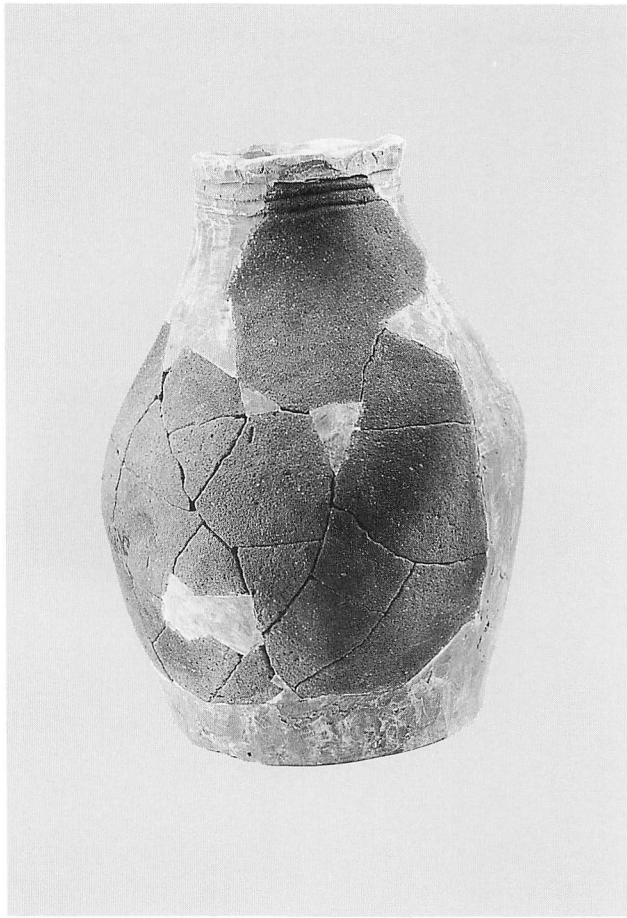


条痕文土器突帯付壷

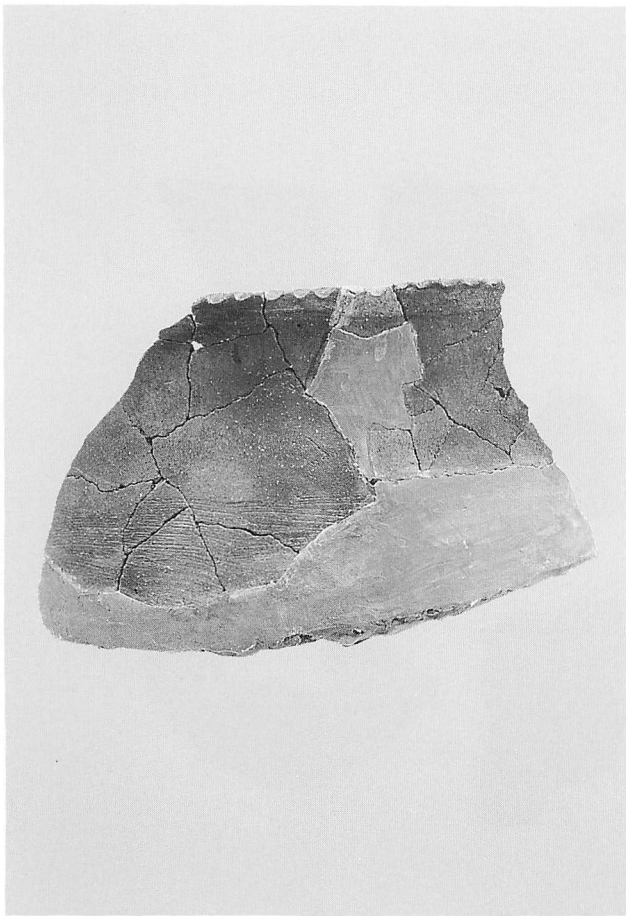


底部（網代痕、木葉痕）集合

壷

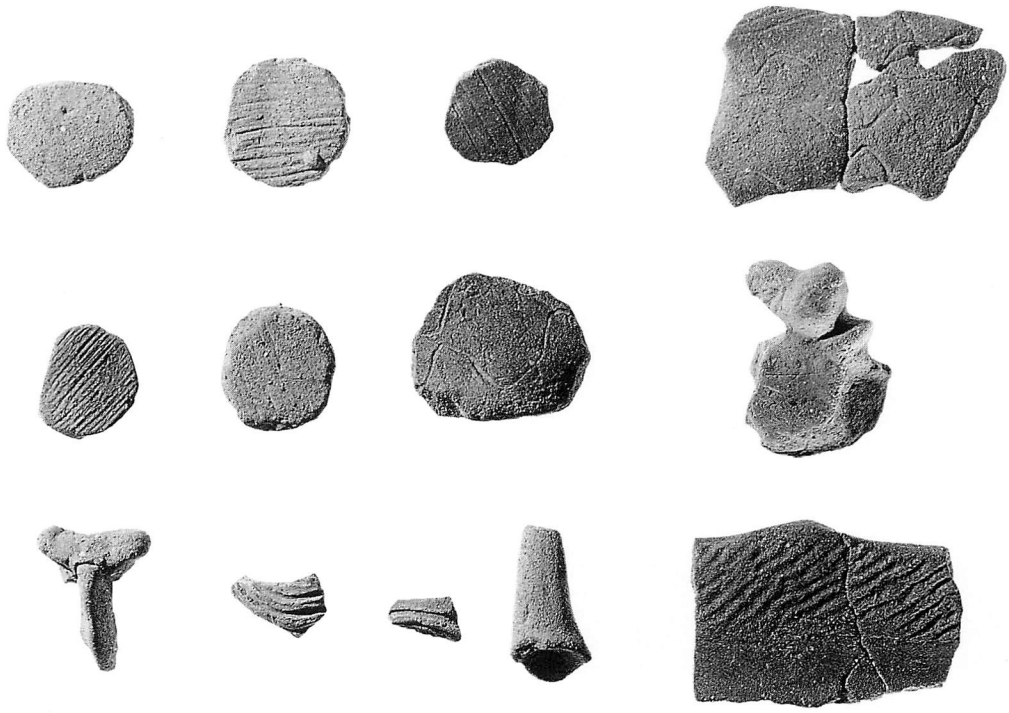


壷

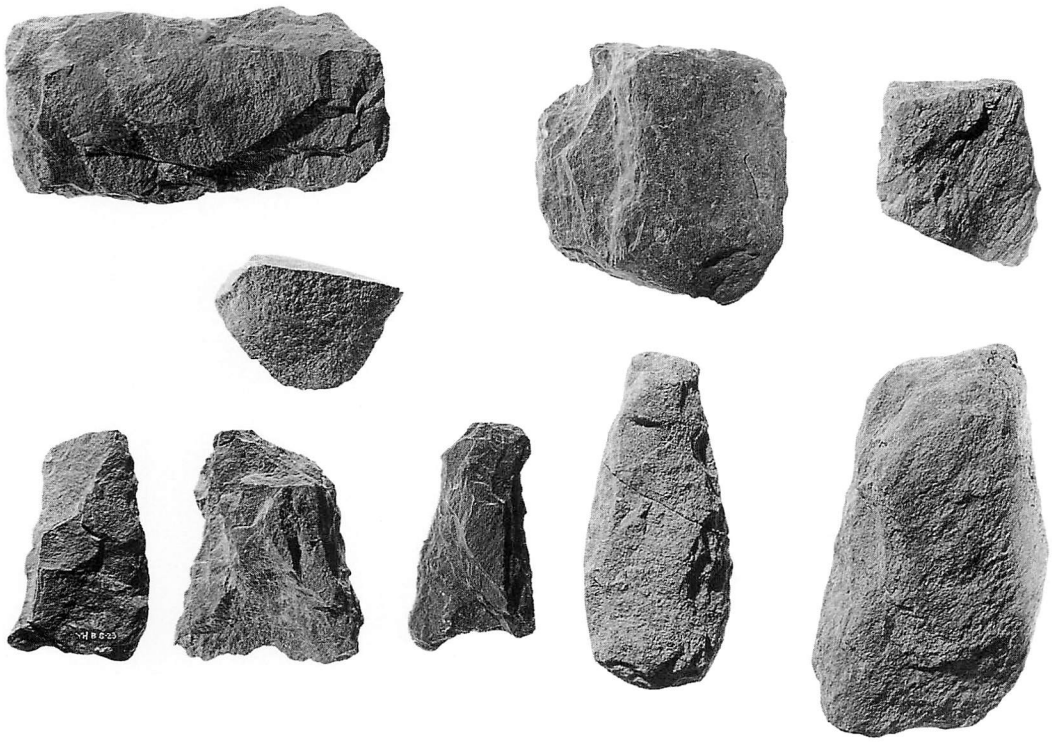


甕

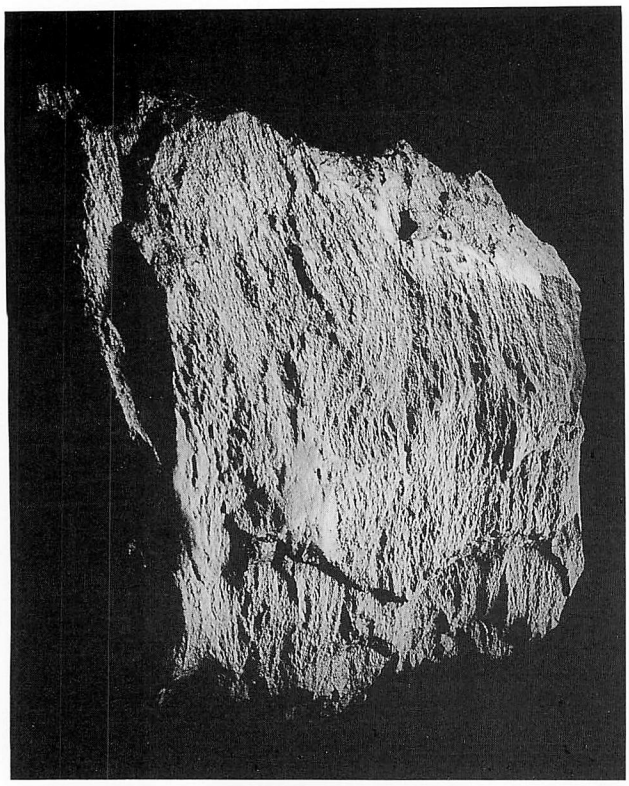
甕（胴部下半）



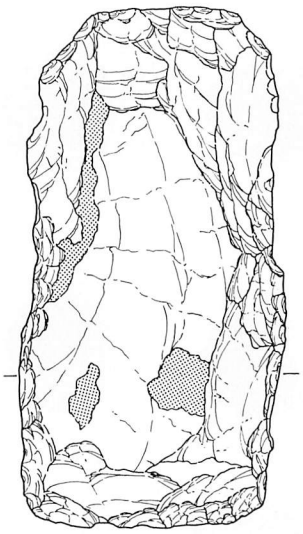
特殊遺物　縄文土器集合



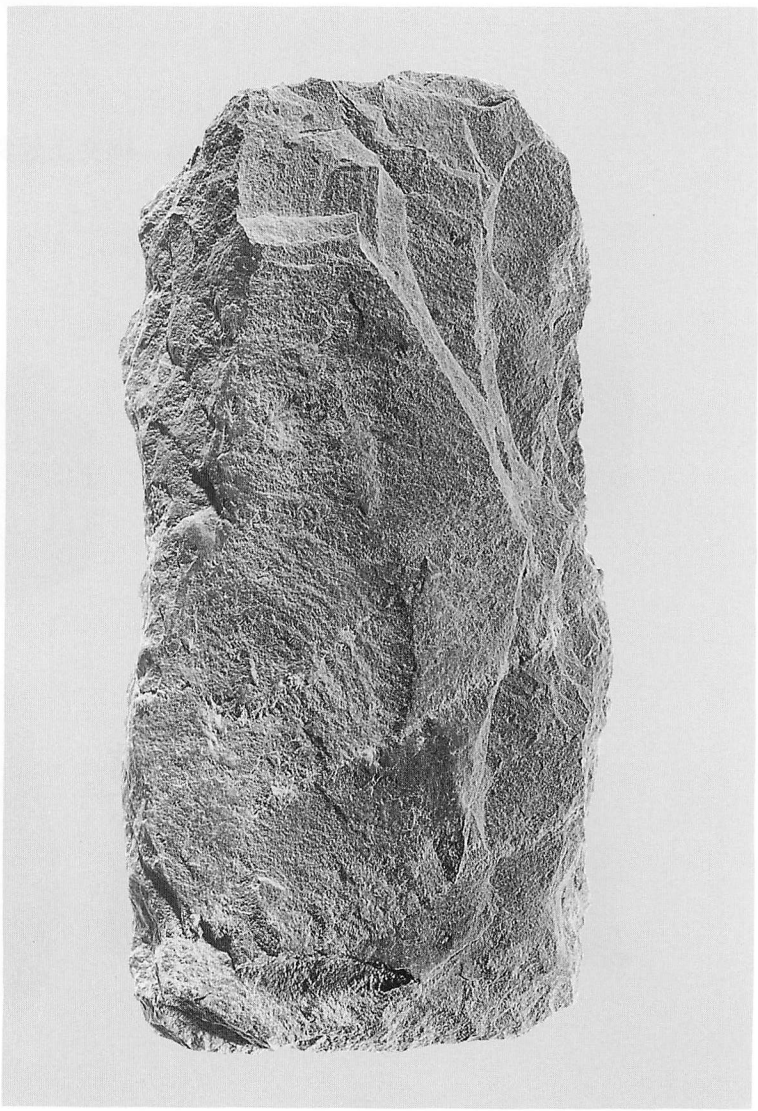
石器集合



摩擦痕



摩擦痕部位



打製石鍬

報告書抄録

ふりがな	よこほりいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	横堀遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第184号
著者名	深沢容子・野代恵子・保坂康夫
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曽根923　　055-266-3016
印刷所	有限会社 雨長　雨宮印刷
発行日	2000年３月31日

横堀遺跡

ふりがな	よこほりいせき
所在地	山梨県中巨摩郡白根町在家塚横堀1538外 やまなしけん なかこまぐん しらねちょう ざいけつか よこほり 25,000分の１地形図　小笠原 位置　東経 138°28′30″　北緯35°33′10″　標高328m 市町村コード 19387
調査原因	中部横断自動車道白根インターチェンジ工事に伴う事前調査
調査期間	1999年５月14日～７月26日
調査面積	1,000m²
弥生時代	
種別	集落の一部？
主な遺構	風倒木と考えられる土坑数基
主な遺物	条痕文土器2,000点あまり、打製石鏃、楔形石器などコンテナ（46×30×26cm）５箱
特記事項	遺物が集中する帯状のブロックを確認。遺物の分布傾向から集落のような生活の主体となる場ではなく、石器製作を含む作業スペースと廃棄の場であったことが想定される。

山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第184号

2001年３月21日　印刷

2001年３月30日　発行

横　堀　遺　跡

編　集　山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曽根923

発　行　山梨県教育委員会

日本道路公団

印　刷　有限会社　雨長　雨宮印刷